

※この色のテキストは、公開用に付け加えた注釈です。

[illegible]

レイも盛り込んで行くことで今までの作品には無かったフェチズムを備えた作品を作り上げます。	
あらすじ	
<p>愛する妻との性交に興奮しなくなっている。</p> <p>藤尾隆彦（ふじお たかひこ）がそんな自分に気付いたのは、二度目の結婚記念日を迎えた夜のことだった。元々自分は性に対しては淡泊なほうだと思っていた。けれど本当の理由はそうではないことにも薄々気付いていた。隆彦は、結婚してすぐに夢を見るようになった。同じ内容のものを、何度も。</p> <p>——生まれ育った村の淫靡な慣わし。</p> <p>——夏祭りの間、夜毎執り行われる宴。</p> <p>——暗闇で蠢き喘ぐ牝と雄。動物じみたまぐわいが生み出す下品な芳香。</p> <p>その慣わしのあまりのおぞましさに耐え切れずに逃げ出した故郷。</p> <p>そこで密かに執り行われていた神事が、自分の心の奥底に拭うことの出来ない性癖を植えつけてしまっていたことに、隆彦は気付いてしまう。熟れた美貌に愛らしい寝顔を浮かべて眠る妻・愛実を見つめながら、隆彦は怒張にどす黒い熱が溜まるのを実感していた。そしてその熱が、故郷に戻ることでしか鎮めることが出来ないだろうことも……</p> <p>「かがち様……お慰め奉ります」</p> <p>憧れの女が唇より紡いだ言葉が、隆彦の脳裏に鮮明によみがえる。</p> <p>※作品紹介サイトにそのまま掲載出来るような文章で雰囲気や掴むためのテキストを書いておきます。</p>	
登場キャラクター	
<p>富蔵 愛実 （とみくら・まなみ）</p> <p>※作品紹介サイトに文章を流用出来るようにしつつ、サイトには載せないような設定もまとめておきます。</p> <p>外見的な特徴もサラリと書いておくと良いですが、原画家さんに書いて頂いたデザインがこちらのテキストとは違っていても、書き起こして頂いた絵のほうがいい！ということが往々にしてありますので、あまり最初のイメージに固執しないほうが良いです。</p>	<p>主人公・隆彦の妻。24歳。旧姓・渡会（わたらい）</p> <p>少女の愛らしさを残した近所でも評判の美人若妻。性格は大人しく控えめだが芯は強い。また一人娘のために両親に蝶よ花よと育てられた箱入り娘で、話し方や振る舞いに控えめな品がある。性的なことには疎く、隆彦とのまぐわいの際にも夫の淡泊な行いに任せたままだが、最近はそれだけでは物足りなさを覚えてしまっている……が、自分がいやらしい女なのではないかという疑問や、いやらしい女だと知られたら隆彦に嫌われてしまうのではないかという不安から、隆彦に更に濃密な夫婦のまじわりを要求することが出来ずにいる。なので平日昼間など、夫が家を留守にしているあいだに、家事の合間などを見計らって自慰にふけることで溜まる疼きを鎮めている。だが最近はその回数が信じられないくらいに増えてきており、今に自分では慰めることも出来なくなるのではないかと怯えている。</p> <p>隆彦とは同じ有名私立大学の出身で、在学中に愛実のほうで隆彦に一目惚れし、奥手ながらも懸命に攻めていった。色恋沙汰に乗り気の様子ではなかった隆彦も愛実の一途さに徐々に惹かれていき、やがて交際を開始する。三歳年上の隆彦は愛実よりも先に大学を卒業して無事に就職を決めて社会人となったが、その間も二人の交際は清く正しく続き、愛実が卒業すると同時に二人は結婚した。</p> <p>本人は知らないが、菱峰建設都市開発企画部の部長である父親・渡会克明（わたらいかつあき）の勤務先、菱峰建設（ひしみねけんせつ）には隆彦の父、長太郎の息が掛かっている。</p> <p>*外見 髪型に関しては長さがセミロングというくらいで、具体的なスタイルに関してはすみれ先生にデザインしてもらった方が良いのかなと思っています。色は綾香を黒髪ロングの和服美人にするので、愛実も地毛で少し明るめの茶色がかった髪色だとパッケージなどで二色並んでメリハリがつくかと。身体は、どちらかと言うとお椀型よりの爆乳。細身の身体で胸は大きい、というキャラデザイン。若妻なので、ボンキュッボンで全身に張りがある。服装はノースリーブの膝丈リボン使いワンピース（色はパールトーンのピンクやクリーム色ベースなど）や、フラワーチュニックなど。パンストも出来れば履かせたいです。外を出歩く際には幅広のストローハットをかぶらせても良いと思います。</p>
<p>富蔵 彩花 （とみくら・あやか）</p>	<p>主人公・隆彦が少年時代に憧れていた女性。33歳。</p> <p>隆彦の初恋の相手であり、隆彦が村を出るきっかけでもある女性。隆彦が13歳の頃に辺り一帯を仕切っている豪農・富蔵家の当主であり実の父親である長太郎（ながたろう）にその美貌を見初められて、貧しい家の面倒を見てもらう代わりに後妻として嫁ぐことになる。長太郎によりありとあらゆる快楽を叩き込まれたと言っても過言ではないほどに弄ばれ、その肉体を男の精を搾り取る極上の愛玩具にされている。巳女（後述）として生まれている——という設定がありますが、本編で語っても語らなくても良いと思います。</p> <p>結婚直後に訪れた夏祭りにて、長太郎が村の若衆に彩花を輪姦させ、それを周辺の権力者との酒宴の肴にしている光景を隆彦が目撃してしまい、それが切っ掛けとなって隆彦は村を出ることになる。</p>

	<p>幼い頃より互いのことを『あやねえ』『タカくん』と呼びあって隆彦を可愛がっており、隆彦が彩花に恋心を頂いていたのと同様、彩花も隆彦の淡い恋心を抱いていた。</p> <p>＊外見 髪型は黒髪ロングで、ストレート系。彩花も髪型に関してはすめらぎ先生のデザイン主導で決定したほうがいいのではないかと思います。身体は柔らか爆乳で、細みに見えつつも太股や二の腕やお尻などにむっちりとした肉がついた熟れ切った肉体というデザイン。服装は珊瑚色の反物に小さな朝顔を上から下まで少し流した紬など、柄が懲り過ぎていない和服が良いのではないかと思います。</p>
富蔵 隆彦 (とみくら・たかひこ)	<p>物語の主人公であり、愛美の夫でもある。27歳。</p> <p>大手広告代理店MC Eに勤務しており、社内からも社外からも共に評判は上々。私生活の方はといえば結婚二年目を迎えた妻・愛実と新婚当初と変わらぬ仲睦まじさを保っておりこちらも上々。</p> <p>だがしかし隆彦は『愛する愛実を、自分ではない誰かに犯させたい』という欲望を抱えていた。</p> <p>その欲望の芽は、十年以上も前、生まれ育った白縄村（シロナワムラ）に伝わるおぞましい風習『かがち様あそばせ』の『お愛手』として村の若衆に犯されている彩花の姿を見たことが原因で生まれた。自分のほれた女性が見ず知らずの男達に凌辱されている——その光景から受けた衝撃と生理的嫌悪からすぐさま村を出た隆彦だったが、その嫌悪はむしろその光景に心のどこかで興奮を覚えていた自分に対するものだということを、薄々ではあるが自覚しつつある。</p> <p>長太郎の一人目の妻で、隆彦の実の母親の姓。かがち様遊ばせを目撃した隆彦はすぐに家を出て、先に富蔵を出ていた母親の元へと身を寄せた。普段は藤尾姓を名乗っているが実際には富蔵家の長男で、戸籍的には富蔵隆彦が正しい。母親には似ているが、父親にはあまり似ていない。</p> <p>かがち様鎮め（後述）の際に千草が孕んだ子供という設定がありますが、本編で語っても語らなくても良いと思います。</p> <p>＊外見 真面目そうな眼鏡男。身体は別にガリガリではなく、そこそこ引き締まっている。服装はチノパンと白ポロシャツなどで真面目爽やかなイメージで。</p>
富蔵 長太郎 (とみくら・ながたろう)	<p>隆彦の父親であり、彩花の夫であり、その初めての男でもある。55歳。</p> <p>女と金が好物で、自らの欲望を満たすためなら家族をも犠牲にする性格。公的な役職にはついていないが莫大な富を蓄えており、白縄村とその周辺の農村の実質的な支配者で、市長だろうが警察署長だろうが、白縄村とその周辺で上手くやっていくためには長太郎への挨拶がいる。</p> <p>豪農として名を馳せていた富蔵家は戦前は日本軍に、戦後は米軍に徹底的に擦り寄ることで自らの財産と領土とも呼べる白縄村一体を戦争の理不尽から守り抜く。農地改革での土地没収からも逃れると、富蔵は闇市で村の作物から米軍横流し品までを幅広く売り払い、女を扱う商売も始め、やがて真っ当な商売から後ろ暗い商売までを幅広く執り行うようになり——戦後のどさくさに紛れて一度は目減りした財産を凶悪に膨らませることに成功する。長太郎の代になっても積極的に財産を増やし続け、都市部で吸い上げた金を地元流すことで人心を掌握している。</p> <p>未だ跡取りはおらず、隆彦の帰参を喜んでいる。もっともそれは息子の帰郷を喜んでという父親らしい感情ではなく、富蔵の財産は富蔵の者だけで独占していきたいと考えているの血に取り付かれた妄執に拠った感情である。</p> <p>＊外見 でっぴりと膨らんだ腹が突き出した脂ぎった肉体に、醜悪で強欲そうな面構え。頭はハゲ。服装は麻の単衣で色は濃紺など。隆弘よりも逞しい巨根。体格もかなり大柄で、隆彦より縦も横も大きい。</p>
藤尾 千種 (ふじお・ちぐさ)	<p>長太郎の一人目の妻で、隆彦の実の母親。故人。</p> <p>白縄村を出た隆彦を受け入れ、高校、大学と無事に卒業させる。隆彦と愛実との結婚を見届けた矢先に体調を崩してそのまま帰らぬ人となる。死の間に隆彦が憎んでいる長太郎から充分過ぎるほどの養育費を受け取っていたことを打ち明けて、それらの蓄えを隆彦に託す。長太郎を愛していたが、白縄村の風習に耐え切れずに村を後にする。</p> <p>＊外見</p>

	細面の幸が薄そうな美人。立ち絵やイベントCGは特に考えておりません。
権造 (ごんぞう)	<p>富蔵家の使用人。45歳。</p> <p>幼少より富蔵家に仕えており、長太郎に絶対の忠誠を誓っている男。庭の手入れや敷地内の清掃、出入業者への指示、来客への対応などなど、富蔵家の様々な雑事をこなす傍ら、裏では長太郎の命令に従って女を数々の手管を用いて責める。時代劇小説に出てくる下男のような話し方をする。</p> <p>＊外見 鼠色の作務衣（さむえ）をまとったスキンヘッドの中年男。身長は低いが筋骨逞しい。常に背を丸めており、下から覗き込んでくるような、粘着質で疑い深そうな不気味な顔つきをしている。隆弘よりも巨根。</p>
須藤 玲人 (すどう・れいじ)	<p>隆彦たちと同じく彦太市に住む21歳の大学生。普段は彦太市の大学に通っているのだが、夏休みを利用して帰省している。普段はただのチャラチャラした若者に見えるのだが、実際は狙った女は絶対に墮とすセックスマニアのヤリチンで、シリコンリング入りの長チンポを武器に年下から年上まで引っかけた女をハメまくっている。二股三股は当たり前なのだが、要領がよく話術も巧みな為にボロを出さない。神社で愛実を見かけて、たまには若妻も良いな、と舌なめずりをしている。</p> <p>＊外見 常に明るい笑顔を浮かべているような、チャラチャラした大学生。ジーンズやチノパン＋ポロシャツというようなシンプルな服装。アゴにチョビヒゲを生やして、線の細いながらも筋肉質な肉体。浅黒い肌。</p>
*	登場人物が増えるにつれ追加していきます。
各種設定や語句について ※シナリオを書くのに助かりますので細かいこともメモしておきます。本編中で描写しないような設定でも軽く書いておくのと何かにつけ便利です。	
季節	<p>季節は夏。MC Eの夏期休暇と有給休暇を合わせて隆彦が取った一週間の休みに起きた出来事を描く。8月11日（月曜日）から8月15日（金曜日）まで。</p> <p>※日にちはともかく曜日は特に理由もなく設定しているので、シナリオを書く上で曜日を変更したほうが良ければ申し出て下さい。速やかに変更します。</p>
白縄村 (しろなわむら)	<p>西日本のどこかの山間に存在する山村。市町村制度で言う村ではなく、周辺の農村を合併して形成されている奥田山町（おくたやまちょう）の一角を指す地名である。</p> <p>地方の人口減少が叫ばれている昨今にしては珍しく、人口は目立った増加も減少も無く、まるで大昔から変わらぬサイクルを保っているかのようである。</p> <p>産業など——白縄村とその周辺の村落を合わせれば気候に適した農作物のほぼ全ては作られているといっても過言ではないが、特に白縄村限定の名産といえば酒米とそれを用いた日本酒。山間部では良質な檜が産出される。また温泉地としても有名で、閉鎖的な農村部に比べ、観光事業が重要な収益の一つとなっている山岳部は積極的に外部の人間を受け入れている。ごく少数ではあるが和牛の畜産なども行われている。</p> <p>※おめこという単語を使いたかったので西日本のどこかということにしました。 ※蛇神さまの作った土地という設定がありますので、名産をお酒にしました。</p>
かがち様 (かがちさま)	<p>白縄村を作ったと言われている蛇神様。</p> <p>龍と見まがうばかりに巨大な、白い青大将であると言われている。大釜山（おおがまやま）と石蓋山（いしぶたやま）という二つの山の合間にあるのが白縄村だが、元々二つの山は一つだったと言う。かがち様が寝床を探すために這いずったことで山が二つに割れ、そこに川が流れて肥沃な土が露出したので人々が集まり村が出来た——それが今日の白縄村である。かがち様は二つの山の割れた場所に深く潜り込み、つまり白縄村の地下深くに潜り込んで休息についており、春夏秋冬の三回に「かがち様遊ばせ」によってお慰め差し上げることで寝床の上に住まうものたちに実りをもたらすことを約束されたという伝承も残っている。</p>
かがち様遊ばせ (かがちさまあそばせ)	<p>白縄村にて年に一回、一ヶ月のあいだ行われる祭り。傍目にはただの縁日に見えなくもないが、その実はあるとあらゆる不貞、不健全な肉の交わりが許される村全体の乱交祭りのようなもの。土着の神を祭る神事であり、途中で神仏習合の影響を受けたりしつつも現在まで残っている。</p> <p>かがち様遊ばせの期間中は村男の身体にかがち様が宿り、その男根がかがち様の男根となる。普段は地の底で眠りにについているかがち様はそのままでいると陰鬱な気が溜まる一方なので、村男の身体を借り、村女とまぐわい陽根から女陰へ溜まった陰気を流し込むことで再び眠りにつくための準備を行う……という神事。夕方18時の逢魔が刻、蛇の目紋の入った提灯に火をつけることで『か</p>

	<p>がち様遊ばせ』が始まる。１８時から夜が明けるまでがかがち様遊ばせの時間だが、それ以外の時間にはかがち様遊ばせのことを口にしてはならないという言い伝えがある。</p> <p>かがち様遊ばせに参加する男は村男ではなくかがち様の化身になりきらなくてはいけないということで、皆それぞれ顔に面を被らなくてはいけない。火男、おかめ、天狗面、翁、般若、変身ヒーローなどなど、顔さえ隠せばどのようなものでも構わない。だが乱交祭りと言えども強姦は許されておらず、女性から「かがち様お慰め奉ります」の言葉が無い限りは挿入してはならないことになっている。だがしかし女性の気分を無理矢理に盛り上げるために愛撫をするのは問題が無い。</p> <p>夏のかがち様遊ばせ。 ８月１日——盆で言う釜蓋朔日にかがち様が目を覚まし、７日まではまどろみの中にいる。 ８月８日から２４日までが『かがち様遊ばせ』の期間であり、かがち様が村の男の身体を借りる。 ８月２５日からはまたまどろみの中にと戻り、３１日には深い眠りについてしまわれる。 ８月１日から３１日の間は白縄村の家々の門前に蛇の目紋の入った提灯が吊り下げられて、かがち様を歓迎する。神棚のある家は蛇の目紋の入った杯でお神酒を捧げる。 ８月１５日はかがち様遊ばせのなかでも一番のイベントである「かがち様鎮め」が行われる。</p> <p>「かがち様お慰め奉ります」という言葉は、女たちにとって快楽に酔い狂うための免罪符のようなもので、かがち様遊ばせにより快楽の虜となった女たちが「変身」を遂げるための、催眠術で言うトリガーワードである。この言葉を切っ掛けに平凡な日常は淫靡な非日常へと変貌する。</p>
かがち様鎮め (かがちさましずめ)	<p>８月１６日、白縄村の地の底に沈んでいるかがち様の頭の直上にあると言われている「白縄神社」の本殿にて行われる神事。巳女（みこ）と呼ばれる若い女を選出し、神社のご神体（黒檀で作られた巨大な男根）の前にて、村中の男で輪姦して精液を注ぎ込む。その時巳女が男子を身ごもれば村長の子となり、将来村を継ぐことになる。女子を身ごもれば将来優先的に巳女としてかがち様に捧げられる。この時に生まれた巳女は、なぜか皆男を魅了してやまない女性として育つという言い伝えがある。</p>
彦太市 (ひこたし)	<p>隆彦と愛実が暮らしている、首都圏から電車で一時間ほどの距離にあるベッドタウン。比較的新しい団地などが立ち並び、中流階級以上の家庭が多く住む。市花は芝桜。市鳥はハクセキレイ。名物は彦太市銘菓びよびよ。ひよこの形をした生地の中にカスタードクリームがたっぷりと詰まっている洋菓子。</p>
<p>ストーリー進行／プロット（プロット中の☆はハートマークに変換してお読み下さい）</p> <p>※自分で書くかもしれないことを考えて、所々荒い下書きめいたものになっています。</p> <p>※キャラクタのセリフや独白などを混ぜておくと、“どういう理由でこのキャラクタが興奮しているのか”などがテキスト担当者に伝わり易くて宜しいかと思います。「企画者が何をエロいと思ってプロットを切っているのか」が伝わるように書けると大変良いと思います。自分も余りその辺りのアウトプットが上手くないので精進中です。</p>	
kag000_01 ●場所 藤尾家居間・昼 ↓ 隆彦職場・昼 ↓ 隆彦職場・夜 ↓ 藤尾家居間・夜	<p>入れるか入れないか考え中。寝取られる興奮を得るためにはまずユーザーが愛妻・愛実に対して愛着を抱かないといけないので、余裕があればここに愛実との日常生活を描写。</p> <p>↓</p> <p>入れることにしました。</p> <p>朝起きて、二人で朝食を食べて、愛妻弁当をもらって、行ってらっしゃいと送られて、一生懸命働き、帰宅して愛実の用意した夕食を食べて、愛実が見たがっていた映画（ラブロマンス）を借りてきて一緒に見て、気分が盛り上がって良い雰囲気になって……みたいなベタベタな幸せな夫婦生活。キスのイベントＣＧなどを使用したい場合は、N010系を使用してください。唇を重ねるだけから、ディープキスまであります。</p>
kag000_02h ●場所 藤尾家寝室・夜 ●使用ＣＧ H290 H291 H292	<p>入れるか入れないか考え中。寝取られる興奮を得るためにはまずユーザーが愛妻・愛実に対して愛着を抱かないといけないので、余裕があればここに愛実との日常生活を描写。</p> <p>↓</p> <p>入れることにしました。</p> <p>映画を見て盛り上がった気分のまま夫婦の営みをはじめる二人。何度もキスをして、愛撫をして正常位。愛してるや愛してますという言葉言い合って、最後は膣内射精で終わり。</p>

H293 H294 H295	
kag000_03 ●場所 藤尾家寝室・夜	<p>入れるか入れないか考え中。寝取られる興奮を得るためにはまずユーザーが愛妻・愛実に対して愛着を抱かないといけないので、余裕があればここに愛実との日常生活を描写。</p> <p>↓</p> <p>入れることにしました。</p> <p>セックス後、うっとり幸せを噛み締めている顔の愛実と一緒にベッドに寝そべっている隆彦。隆彦もちろん幸せなのだが、こうして幸せであればあるほどに、その幸せを壊してしまうような妄想が強くなっていくことを自覚している。（最近ますます、あの夢を見るようになっていく気がする……）そんなことを心の中で呟きながら、愛してると愛実と言い合いながら寝ることにする隆彦。きっと今日も夢を見るに違いない——と確信しながら。</p>
現在はここより下からを本編にする予定。kag000系は余裕があれば入れたほうが良いかと考えています。	
kag001_01h ●場所 調教室・夜 ●使用イベント CG H010 H011 H012 H013 H014 H015 H016	<p>隆彦が、かがち様遊ばせの贅として男達に輪姦されている彩花を目撃してしまった夜の事を夢に見ているシーン。隆彦は12歳で、彩花は18歳という設定。当時の隆彦の年齢については伏せる。</p> <p>深夜。火男や狐の面を被った男達に囲まれながら、縄で戒められて梁に吊り下げられている18歳の頃の彩花。それを覗き見ている12歳の頃の隆彦。場所は富蔵家の一角、長太郎が女を普通ではないやり方で弄ぶために使っている、江戸時代の拷問部屋のような板張りの部屋。壁にはぼんやりとオレンジ色に光る和紙で出来た電灯がつけられていて、それが室内をオレンジ色の光で薄暗く照らしている。また壁には一面に様々な面がかけられている。</p> <p>全裸の彩花は梁から吊り下げられた縄で手を後ろに束ねられ、同じく梁から落ちている縄で膝裏に食い込ませて右足を大きく上げるような格好をしている。（絵コンテ¥元画像¥H010.jpgをご覧頂ければイメージが掴み易いかと思います）彩花は右足がかりうじて地面に爪先立ちになるような高さで吊られており、ぶるぶると全身を小刻みに震わせている。これから何をされるのかと不安そうな、そして大勢の男に生まれて初めて全裸を晒していることに羞恥の表情を浮かべながら、時折身じろぎをする彩花。そのたびに瑞々しく豊かな乳房がぶるっと揺れる。幼い頃の隆彦はその様子を「見たくない」「見てはいけない」と思いながらも、扉の隙間から憧れの女性の乳房を、そしてオマンコを息を飲みながら見つめてしまう。</p> <p>「長太郎様……お願い、お願いします……せめて初夜は……っ、普通にしてください」 「ぐふふ。何を言っておるか。これがわしの普通よ。そしてこれからお前の普通にもなるのだ」</p> <p>面をしている男達の中でただ一人、何も見につけてない長太郎。全裸の長太郎は愚息をヘソに反り返るほどにいきらせながら、ビデオカメラを片手に興奮に上ずった声を漏らしている。</p> <p>「ああ……たまん。たまんぞ彩花。こんなにわしを狂わせるのは、千種以来だ」 「今にお前も、男のチンポ無しではいられない身体にしてやるからな」</p> <p>長太郎の言葉に、まだ少女の面影を残した彩花が言う。</p> <p>「わ、わたしは、そんな風にはなりません……長太郎様以外の、夫以外の方と喜んで……その……せ、セックスするような女では、ありません……ですから、このようなこと、おやめになって下さい」</p> <p>哀願する彩花に向けて、長太郎はにまあと奇怪な笑みを満面に浮かべる。そして言う。</p> <p>「嬉しいぞ彩花。やれお前は金目当ての恥知らずだの、借金のかたに売られてきた娼婦だの、心無い陰口を叩かれていたりもするようだが……お前はわしを心より愛してくれているのだなあ」 「ならば彩花……今宵はわし以外の誰とも関係を持たない貞淑な妻だと証明してくれ」</p> <p>怯える彩花の前でゴム手袋を履く男たち。その中の一人——火男の面をかぶった使用人の権造（ごんぞう）が「ひひっ！ では始めますか……」と引きつような笑いをこぼしながら、彩花に見せ付けるように、先端部分の皮を剥かれて細く削られた山芋を取り出す。処女膜を傷つけることなく生娘を責める伝統的な責めだということを説明する長太郎。嫌がる彩花だが「お前はわしを愛していないのか。やはりわしの妻にはなりたくないか？」とねめつけると、ぐっと言葉を飲み込んで諦める。権造はその先端部分に摩り下ろしたばかりのとろろ汁を塗ったくって、彩花に挿入する。ちゅぽちゅぽと権造が山芋で膣肉を掻き混ぜ始めると、彩花は途端に痒そうに歯を食いしばる。浮</p>

	<p>いた足の指をぐっばぐっばと握り締めたり開いたたりを繰り返し、涙を滲ませ、鼻水を零しながら「ふぐッ、ふぐぐうッ」と、普段の清楚でしとやかな顔をかなぐりすてた情けない顔をして痒みを堪える。膣からは愛液と山芋の交じり汁がどろどろと零れ落ち始めて、生臭い匂いが部屋の中を見たしていく。必死に痒みを堪える彩花の姿にニタつき、怒張をびくびく痙攣させる長太郎。さらに彩花を激しく責める宣告をすると、権造とは別の男がとろろ汁を彩花のクリトリスに揉み込み、塗り込める。</p> <p>「ああッ、がああッ、ああぐううううううううう——！」</p> <p>ふぐうーッ、ふぐうーッと獣のように呻いていた彩花の唇がとうとうぱかりと開いて、ひいひいと甲高い悲鳴を上げ始める。それでも助けてや何とかしての泣き言は言わないのだが、男達の手が四方八方から伸びて彩花の乳首やクリトリスをいやらしく摘み、ねじり、はじき出す。痒みと快感に泣き叫びながら、彩花は潮吹きとも失禁ともつかない大量のしぶきを弧を描くように噴出して、顎をのけぞらせながら果てる。だが男達は絶頂を迎える彩花をそのまま責め続け、弱音を堪え続けていた彩花はとうとう痒みを何とかしてくださいと悲鳴交じりで懇願する。そんな彩花に長太郎は言う。「わしは何とかしてやる気は無いぞ彩花。だが、周りにいるのはかがち様じゃ。かがち様にお願ひすれば、痒いオマンコを奥まで思い切り掻き掻ってくれるぞ。この特製の痒み止めを塗った、かがち様の分身でう」周囲の男達は、ニヤニヤと下卑た笑みを口元に浮かべながら、いきりたった怒張に透明のローションを垂らしてなすりつけていく。長太郎はそれを入れられて掻き混ぜられればいかに気持ちが良いかを彩花に説いて、彩花は痒みに苦悶の呻きを漏らしながらそれら怒張を物欲しげに見つめる。</p> <p>震える彩花の唇から、そっと言葉が漏れる。</p> <p>「かがち様……お慰め奉ります」</p> <p>彩花の言葉に衝撃を受けながら、隆彦は……</p> <p>●選択肢発生 ①その場を立ち去った→kag001_003 ②その場にとどまり続けた→kag001_02h</p>
kag001_02h ●場所 調教室・夜 ●使用イベント CG H016 H017 H018 H019 H019a H019b H019c	<p>愛する人が実の父親に弄ばれている……そんな光景をこれ以上見たくないと思っているのに、足は動かず、何故かその場に留まり続けてしまう隆彦。そんな隆彦の前で、彩花は権造の赤黒く焼けた鉄のような怒張を挿入される。フンツと獣のような声をあげる権造に、みぢみぢみぢっ、と一息に処女を散らされてその衝撃にカハッと息を詰まらせる彩花。</p> <p>「いたっ……ひいい……っ、いたひっ、のにい……っ」</p> <p>自分が信じられないという顔をする彩花は、男の首に両手を回しながら哀願する。</p> <p>「おねがっ、おねがひしますう……っ、もっつ、もっつ掻いてっ、オマンコ掻いて下さいっ」</p> <p>とろろ汁を塗りこまれた膣内を掻き混ぜられる快感に歓喜の悲鳴をあげる彩花。破瓜の鮮血が滲む膣肉をぐいぐいと突き上げられて、処女を失ったばかりとは言えない喘ぎ声をあげる。火男の面をかぶった権造は彩花の膣内の具合のよさなどを周囲の男に自慢しながら、フンフンと腰を振る。</p> <p>「舌の根も乾かめうちにチンポに狂いおって、この牝が！」</p> <p>「ひっ` いいい` いいいッ！」</p> <p>狂気的笑みと嫉妬の炎を顔面に浮かべながら彩花の尻を乗馬用鞭で何度も打ち据える長太郎。瞳をぐるんと上向かせ、歯を食いしばりながら悲鳴をあげる彩花。何度も尻が鞭を叩くうちに、食いしばっていた唇は気持ちよさげにほつれ、その瞳は更にとろとろに蕩けていく。鞭で叩かれながらチンポで突かれることにも快感を覚えてしまった自分に戸惑いの声をあげながらも、その声音はどうしようもないほどに甘く崩れてしまっている。そんな彩花をひょっこ面の男は更に激しく突き上げて、こみあげる射精衝動に任せて思い切り膣内へと射精する。</p> <p>舌をくねらせながら膣内射精アクメを迎えて悲鳴をあげる彩花。</p> <p>「！」</p> <p>射精絶頂にひたるうつろな瞳が、一瞬扉の隙間ごしに隆彦を捉えた気がして、隆彦は息を呑み——</p> <p>■彩花フラグ+1</p> <p>→kag001_03へ</p>
kag001_03 ●場所 バス内・昼 ↓ 田舎道・昼	<p>ガタンと大きな振動に目を覚ます隆彦。</p> <p>田舎道を走るバスのなかで、座席につきながらうとうとしてしまっていたらしい。隣の愛妻・愛実 は黙々と本を読んでおり、隆彦が淫夢を見て勃起していることには気付いていないようだった。</p> <p>「……」</p> <p>無言で外を眺める隆彦。家々の正門には蛇の目紋の描かれた大きな提灯が飾られており、それがこの地方に伝わる夏祭りの季節であることを主張している。隆彦が起きたことに気付いたのか、愛実が言う。</p> <p>「どういうお祭りをするんでしょうね。盆踊りとか……夜店がたくさん出たりするんでしょうか？」</p>

	<p>「さあ、どうだろうね。物心ついた時には村を出てたからね。よく覚えてないんだ」</p> <p>「……隆彦さん」</p> <p>愛実はその言うと、隆彦の手をきゅっと繋いで言う。</p> <p>「それじゃあ、今年は思い出を沢山作って帰りましょうね」</p> <p>「……ああ。そうだね。……本当に」</p> <p>はにかむ愛実を見下ろしながら、隆彦は独白する。</p> <p>物心ついた時に村を出たのは本当だ。けど夏祭りを知らないというのは嘘だ。</p> <p>僕はこの村で行われる夏祭りがどんなものかを、どんなにおぞましいものなのかを知っている。</p> <p>知っているからこそ、こうして愛実を連れて帰省することにしたのだ。</p> <p>（愛実を祭りの生贄にするために帰省したのだが、ここでは明言しない）</p> <p>～画面暗転。プー、ガタガタとバスが停車してドアが開く音～</p> <p>バスを降りて実家まで少しだけ歩く隆彦と愛実。コンクリートで舗装された太い道の両脇は田んぼが広がっている。</p> <p>「ああ、良いお天気。それにとっても空気が美味しい」</p> <p>少女のようにはにかむ愛実。そうだねと返す隆彦。愛実がいかに魅力的な妻かを、そしてそんな妻をどれほど愛しているのかなどなど、愛実の紹介を行う。途中、５０代ほどの男性と隆彦と同じくらいの年齢の男二人が乗っている農業用トラクターとすれ違って軽く会釈を交わす。じろりと睨みつけられて少し腰の引ける愛実。「この辺の人たちはよそ者嫌が多いから」と気にしないように言う隆彦だが、男達の視線の奥底に愛実を品定めするような、オスのケダモノじみた匂いを感じ取り、ドクンと胸を鳴動させる。</p>
<p>kag001_04</p> <p>●場所</p> <p>富蔵家正門・屋</p> <p>↓</p> <p>廊下・屋</p> <p>↓</p> <p>広間・屋</p>	<p>「わあ……」</p> <p>「……」</p> <p>富蔵家の正門を改めて見上げて感嘆の声をあげる愛実。十数年ぶりの自宅の姿に懐かしの気持ちが少々と、去ったきっかけと再び訪れた理由を思い返して苦いような気持ちが大半で無言の隆彦。話には聞いていましたが、本当に大きいんですね……と、呆れたような口調で言う愛実。そうしていると正門から一人の男性が現れる。鼠色のさむえを着たスキンヘッドの中年男性は、隆弘に向かってぺこりと頭を下げる。</p> <p>「……お帰りなさいませ、隆弘様」</p> <p>使用人の権造が家を出たときと全く変わっていない風貌に驚きつつ「ただいま、権造」と挨拶を返す隆弘。権造は次に愛実へと会釈する。</p> <p>「はじめまして奥様。使用人の権造と申します。ご滞在中は何なりとお申し付け下さいませ」</p> <p>「は、はい……あの、隆弘さんの妻の、愛実と申します。こちらこそ宜しくお願い致します」</p> <p>元々男性が苦手な愛実は権造の醜悪な顔に少し怯えた様子を見せるが、愛実の無い顔ながらも愛想の良いことを言われてしまったので引きながらも笑顔で答える。隆弘は権造の視線が一瞬で愛実の足から顔までを嘗め回すように見て、そして先ほどすれ違った男達と同じようにその瞳にけだものじみた欲望がじわっと滲んだのを確認して、再び胸を低く鳴動させる。</p> <p>「旦那様がお待ちですので、まずは広間のほうへどうぞ。お荷物はお持ち致します」</p> <p>「ありがとうございます」</p> <p>～富蔵家廊下・屋～</p> <p>門をくぐり抜け、玄関にあがり、長い廊下を歩く三人。</p> <p>愛実は聞きしに勝る豪邸っぷりに少し腰が引けており、不安そう。</p> <p>「隆彦さん、お土産……銘菓ぴよぴよなんかじゃなくて、もう少しきちんとしたものにしたほうが良かったんじゃないですか？」※</p> <p>「僕の実家なんだしそんなに気にすることないさ。手ぶらでも良いくらいだよ。だからそんなに不安がなくても大丈夫」</p> <p>先を歩く権造のあとについていながらそんな会話を交わす二人。</p> <p>～富蔵家広間・屋～</p> <p>すぐに広間へと通される二人。でっぴりと肥えた腹を突き出した中年男性が脇息に肘を置きながら座椅子に座っており、空いた手で扇子をぱたぱたと扇いでいる。濃紺に染められた麻の単衣を着た中年男性の隣には線の細いむせ返るような色香をまとった妙齡の和服美人が座っている。美人の服装は珊瑚色の反物に小さな朝顔を上から下まで少し流した紬。中年男性は二人の姿に気付くと、にこりと破顔する。</p> <p>「お荷物はお部屋へ運んでおきます。それではごゆるりと……」</p> <p>下がる権造。二人は進められるがままに広間に置かれた座布団に座る。二組の男女が向かいあうような配置になると、中年男性——隆彦の父親の富蔵長太郎は感慨深そうに言う。</p> <p>「何かの折につけ写真を送らせたりはしたものの、こうして実際に会うのは何年ぶりだったか……」</p>

	<p>「良く帰ってきたな、隆彦。それもこんなに別嬪の嫁さんを連れて……でかしたぞ」</p> <p>はっはっはと太った身体をゆずって笑うと、長太郎は愛実へと向き直る。</p> <p>「お会いするのはもちろん初めてですな。隆彦の父の富蔵長太郎と申します。これは家内の彩花。宜しくな愛実さん」「初めまして愛実さん、長太郎の妻の彩花と言います。女同士、何か分からないことがあれば気軽に尋ねてちょうだいね」</p> <p>数年ぶりの愛実の姿を改めてみて、一瞬息を呑む隆彦。ただでさえ美しかった美貌にはますます磨きがかかり、全身から満開の華のように濃厚な『女』が匂っている。</p> <p>「は、はい……こちらこそ宜しくお願い致します」</p> <p>二人の挨拶に恐縮しながら答える愛実。そんな愛実の声にハッと意識を取り戻す隆彦。</p> <p>愛実が手に持っていた銘菓びよびよを渡すと、長太郎は「甘いものには目が無くてな」と笑う。そしてそれを彩花に渡して言う。</p> <p>「彩花、折角だ。女同士のほうが何かと話しやすいだろうし、愛実さんに家の中を案内して差し上げなさい。今日からここが愛実さんの第二の実家になるのだからね」「分かりました。……隆彦さん、愛実さんをお借りしますね？」少し不安げな愛実に大丈夫という視線を送り、広間から追い出す隆彦。二人の足音が遠くなると、長太郎は好々爺然とした笑みを消して、好色そうな笑みを満面に浮かべる。</p> <p>「良い尻をしておるわ。それにあの生意気な胸、瑞々しい肌……くくっ、たまらんなあ」</p> <p>「……くっ」</p> <p>実の父親が自分の妻に向けたとは思えない言葉に憎憎しげに呻く隆彦。だがそれを咎めも戒めもしない。そんな隆彦に、長太郎は好色な笑みを浮かべたまま続ける。</p> <p>「しかし、お前から連絡が会った時は驚いたが、その内容にも驚いたぞ」</p> <p>「まさか自分の妻を『かがち様遊ばせ』の贄にして欲しいと言うのだからな」</p> <p>「愛する女を他人に抱かせて喘ぐ姿を観察したい……か。憎んだ父と同じところに行き着くとは、血は争えんな」</p> <p>長太郎の言葉に心の中で肯定する隆彦。確かに隆彦は長太郎を憎んでいた。生まれて初めて恋心を抱いた女性・彩花を自分の目の前で凌辱した父親を恨まないわけがない。だがしかしその父親の所業が、隆彦の心の奥底に歪んだ性癖を植えつけたのだ。愛する女が自分以外の誰かに抱かれている姿が見たい……という、歪んだ性癖を。</p> <p>「あなたは許せない」</p> <p>搾り出すように言う隆彦。</p> <p>「だけど、あなたのようにしてみたいという気持ちが膨らんで、狂ってしまいそうだ」</p> <p>そう続ける隆彦に、長太郎はにやりと邪悪な笑みを浮かべる。</p> <p>「この屋敷にはお前の望みを叶えるものが幾らでもある。隠し部屋に隠し通路、その全てに覗き穴がついている。お前の愛する妻を赤の他人が汚し尽くす様を、好きなように見せてやろう。だが——だが、それだけでは不公平ではないか？」</p> <p>長太郎は続けて言う。</p> <p>「お前もわしの女を抱け、隆彦」</p> <p>「……な、何を言って……彩花さんは、義理とは言え母親だぞ!？」</p> <p>「つまらないことを言うな隆彦。わしは知っているんだぞ。お前の初恋の女が彩花だということを」</p> <p>「それになあ隆彦、くくっ……彩花も、お前に惚れていたのだ」</p> <p>「……なん、だって……？」</p> <p>「お前等はお互い好きあっていたのよ。だからこそわしは彩花を娶った。お前から奪って、そして汚してやったのだ……くくっ、興奮したぞ」</p> <p>彩花が自分を好きだった。大勢の男達に囲まれ、獣のように絶頂を迎えて処女を散らされたあの時、彩花は自分に好意を抱いていた。それを知っていながら、いや知っていたからこそ父は彩花を目の前で奪ったのだ。そんな事実を知って、ゆらりと、心の奥底に燃えていた黒い欲望の炎が勢いを強める。妻を差し出す代わりに義理の母を抱く。歪んだ欲望を持った父と息子の交換条件。それが隆彦のどす黒い欲望を加速させる。そんな隆彦に長太郎が言う。</p> <p>「寝取る悦びを知ってこそ、寝取られる悦びが極上の甘露になるのだ、隆彦」</p> <p>にたにたと笑う長太郎の言葉に、隆彦はごくんと息を呑む。</p> <p>※銘菓びよびよ＝設定欄彦太市にて記述。</p>
kag001_05 ●場所 客間・夜 ↓ 客間・消灯 ↓ 廊下・夜 ↓ 調教室・夜	<p>「はあ、少し飲みすぎちゃいました……」</p> <p>「大丈夫かい？なんてね……かくいう僕も、少し酔ったみたいだ」</p> <p>豪勢な夕食のあとに客間へと戻って会話をかわす隆彦と愛実。愛実はほろ酔い。隆彦は少し酔ったと言いつつも「この後に何が起きるか」を考え続けていて、どれだけ酒が入っても眠れそうにないほどに興奮している。そんな隆彦の内心を知らずに愛実は言う。</p> <p>「でも、良かったです」</p> <p>「何がだい？」</p> <p>「……隆彦さんが、おうちの方と無事に仲直り出来て」</p> <p>隆彦さんが普段実家のことを話しながらなかったこと、結婚する時にも母方の知り合いしか呼ばなかったことなどなど、実家との軋轢を感じさせる出来事が今まで色々と合ったけれど、でもこうし</p>

て実家に帰って親子で食事を食べたり出来るのはやっぱり素敵ですね、と微笑み愛実。そんな愛実の笑顔に罪悪感を覚えながら「そうだね」と応える隆彦。そんな愛実をこれからどういう目に合わせるのかを考えて、隆彦の心臓が早鐘のように鳴る。

「もし、夜分遅くに申し訳ございません……」

そんな時、障子の向こう側から使用人・権造の声が聞こえてくる。権造は「お休みになれる前に旦那様から大事なお話があるそうでして……」と、富蔵家に嫁入りする女性にだけ伝える口伝があるのでそれを聞きに来るように、と愛実と言う。僕は物心つく前に家を出たからそういうのがあったとは初耳だなあ……と、隆彦。そんなにかからないだろうし行ってきなよ、と笑顔で愛実を送る。愛実が権造に連れられるがまま部屋を出て廊下から足音が聞こえなくなると、鳴男は部屋の電気を消して廊下へと出る。そして長太郎に教えられた通りに廊下を進んで、奥まった一角にある、鍵の掛けられた扉をあけて中へと入る。大昔は掛け軸などで隠されていたらしいそこは各部屋の隠し部屋に繋がっている隠し通路である。広間に居間に風呂場に、そして調教部屋まで……それぞれの部屋には覗き穴がついていて、隠し部屋から穴を覗くことが出来る。長太郎が覗き穴の一つを覗くと、オレンジ色の光でぼんやりと照らされている調教部屋が目飛び込んでくる。手筈どおり室内にはまだ誰もいない……が、ぎしっ、ぎしっ、と板張りの浴衣が軋む音と数人の足音が隠し通路の向こう側から聞こえてきて隆彦は息を呑む。そして穴の向こうで、調教室の扉がガチャリと開く。

「……あ、あの……ここは……？」

壁に無数の面が掛けられた調教室へと足を踏み入れ不安そうな声をあげる愛実。笑顔浮かべている長太郎は無表情の権造。長太郎は扉の鍵をがちゃりと閉めると、不安そうな愛実に向けて語りかける。

「……愛実さんには、隆彦もまだ知らないこの村のしきたりを教えてあげようと思ってな」

穏やかな笑みに行灯の影を浮かべながら口を開く長太郎。その背後に控える権造。長太郎は愛実に白縄村が蛇神である『かがち様』を奉り暮らしていることを説明。そして春夏秋冬に執り行われる『かがち様遊ばせ』についても説明する。冗談ですよと怯える愛実を無視して、長太郎と権造は壁にかけられた面を手取る。長太郎は翁面。権蔵は火男面。それぞれ面を被ると、服を脱ぎ捨てふんどし姿になる。二人が本気であることを感じ取って、愛実は叫ぶことも出来ずにへにやりとへたり込んでしまう。お義父さまやめてくださいと震える声で怯えながら懇願する愛実、こんなことをして隆彦さんに申し訳無いとは思わないんですか！と続ける愛実に、長太郎は言う。

「隆彦は彩花と寝るからなあ。お互い様だ。そら、諦めてわしらのかがち様を遊ばせてくれ。慰めてくれ」「……えっ……え……た、隆彦さんが、彩花さん……と……？」

驚く愛実に、隆彦にはまだ確かにこの村の風習を教えていないが、明日の夜にでも説明して彩花と寝させるつもりだと語る長太郎。あの二人は幼い頃好き合っておったから丁度良いわと笑う長太郎に、愛実は顔を青ざめさせる。義理の母親と自分の夫が寝る……おまけに二人はお互いに好き合っていた……そんなことを許せるわけがない。

「だ、だめっ！ そんなの絶対にだめです！」

慌てる愛実。では隆彦にはこの風習は秘密にしよう。その代わり、分かるだろう？と“隆彦と彩花にはセックスさせない代わりに、愛実には楽しませてもらうぞ”と取り引きを持ちかける長太郎。彩花と隆彦が寝るにせよ寝ないにせよ、どちらにせよ長太郎は自分を弄ぶつもりなのだ……と、唇を噛み締めて悔しさを堪える愛実。まだ決心のつかないらしい愛実に向かって、長太郎は言う。

「菱峰建設都市開発企画部の部長、渡会克明君か……なかなか面倒見の良い男らしいね」

「……え、な、ど、どうして……父のことを知ってるんですか？」

「菱峰建設には色々世話を焼いてあげているからねえ……だからまあ、わしの大体のお願いは聞いてくれる」

ニヤニヤと笑う長太郎は、さあっと顔色を青くする愛実に向かって言う。

「まあわしも鬼ではない。これからあるゲームをしよう。そのゲームに勝てば、わしらは愛実さんとのオメコは諦めようじゃないか」

ここで必要な描写は下記2点です。

①隆彦は村の秘密をまだ知らないという嘘を長太郎が愛実に説明する。

②愛実が、隆彦に風習を教えない（彩花とセックスさせない）+父親を守るために長太郎との勝負に乗る。

kag001_06h

ドクンという心臓の鼓動のSEに合わせて、H019cが表示される。次にH020が表示される。

●場所
調教室・夜

「……ああ、こんな格好……いやあ……っ、隆彦さん……っ」
助けを求めるように隆彦の名前を呟く愛実。隆彦はそんな妻の姿に息を飲みながら、すでに怒張を痛いほどに勃起させながら、覗き穴の向こう側を覗き続けている。愛実は隆彦が初めてかがち様遊ばせを見た時の彩花のように、爪先がつくような高さで宙から吊り下げられている。だがその手足を戒めているのは縄ではなく、黒革の拘束具。手を後ろ手に黒革でまとめられ、太股の間には強制開脚ポールが通っている。そして愛実の腕と右足を戒めている拘束具を縄で吊りあげているような

●使用 CG
H019c（鼓動合わせ）
H020

H019d (鼓動合わせ)
H021
H022
H023

体勢だ。(※絵コンテ画像を見たほうが分かり易いかもかもしれません)

「縄を使えば痕が目立つからのう。だがこれはこれで趣があるな、権造」
「へえ……全くで」
「愛実さんの綺麗なオメコも丸見えだわい。くくっ、隆彦とはあまりせんのか？ おぼこのように可愛らしい桃色をしておる」
「……う、うう……ああ……そんな、恥ずかしいことを言うのはやめてください、お義父さま」
羞恥に悶える愛実、くぐもった笑みを零しながら長太郎は言う。
「くくっ……そうなの。言葉で愛実さんをなぶっている時間は無い。夜は短い」
「それでは早速これから愛実さんとするゲームのルールを説明しよう。なあに難しいことはない。愛実さんはこれから1時間、何をされても、わたしのチンポを欲しがなければ勝ちだ」
「……えっ……そ、そんな、簡単なルールで……？」
よほど理不尽なことを言われるのかと思っていた顔をする愛実。そんな愛実の顔に長太郎は愉快そうに笑う。
「ぐふふ、簡単かね？」
「……隆彦さん以外とセックスする気なんて、ありませんから……」
青ざめながらも気丈に言う愛実。そんな愛実の言葉に愛を感じて、歪んだ興奮に更に身を焦がす隆彦。愛実の言葉に長太郎はニタニタと笑う。
「それは楽しみだ。愛実さんの隆彦への愛の強さを、たっぷりと見せてもらおうでしょう」
長太郎が、一瞬覗き穴を見てニヤリと笑みを浮かべる。

～時間経過の演出～

ドクンという心臓の鼓動のSEに合わせて、H019dが表示される。次にH021が表示される。

「はあッぐ……はあッ、はあッ、はあッ……ッ！」
にゅぽにゅぽちゅぽちゅぽと水っぽい淫音と、愛実の苦悶の声が調教室にこだましている。愛実はいつかの彩花のように、膣に山芋を挿入されて掻き混ぜられている。彩花の時と違うのは、処女ではない愛実のために山芋が立派な張り型のような形にされている。山芋チンポをズボズボと権造の手で抽送される愛実。はじめは痒いと言ったり、ビデオカメラを取り出した権造に向かって撮影をやめるように懇願していたのだが、山芋責めが始まって20分も経った頃には、ただひたすら苦悶の声を噛み締めながら責めを堪えるだけになっている。
「あッ……あッ、ううッ、うっく、くふッ、くふう……ッ」
「とろろ汁をこんなにこぼしておって、はしたない嫁だ」
鼻水をたらし涙を流して顔をぐちゃぐちゃにしながら膣肉を襲う痒みと、痒みの発生源である山芋に痒い部分を掻きまられる快感と、山芋を擦り付けられれば擦り付けられるほど増していく痒み……という痒みと快感の螺旋に悶える愛実。だが二人の怒張をねだるような真似はしない。
「なかなか頑張るじゃないか愛実さん。ならばもう少し、苛めてやるとするか——権造」
名前を呼ばれるだけで長太郎がどのような責め苦を求めているのか理解した権造は、びたりと山芋の抽送を止める。奥深くに山芋張り方を飲み込んだままの愛実は、とたんにじりじりと尻をもじつかせ始める。
「あゝ ああッ、あゝ ああッ！ お、おかしく……なるう……ッ！」
吊り下げられた身体を必死に揺らして、とうとう自分から尻を振って山芋を前後に抽送する愛実。だが戒められた身体は満足に動かず、結果として物足りない刺激を送り続けて、結果として痒みだけが切なく溜まっていく。必死の形相で快感を堪える愛実だが、その顔からは刻一刻と理性が剥がれ落ちていく。そしてとうとう、噛み締めていた口を開いて、本能のままに叫び始める。
「あああッ、もうだめえ、だめえッ！ 痒いッ、痒いッ！」
痒くて切なくて頭がおかしくなりますと必死に訴える愛実。そんな愛実に「隆彦を裏切るのか？」と意地悪く聞く長太郎。長太郎の言葉に「うああ……た、隆彦さんッ……隆彦さんは、裏切れません……ッ」となけなしの理性を振り絞って漏らす愛実。
「権造、見せてあげなさい」
「へえ……」

そんな愛実の前で、権造がふんどしを脱ぎ捨てる。醜悪な、大蛇のような怒張を見てヒッと息を呑む愛実。こんなに大きくなるものだから……と、権造の怒張が隆彦よりもはるかに逞しいことに驚く愛実に、長太郎が言う。

「この特製の痒み止めを塗りたいくったチンポで、愛実さんのとろろ汁まみれのオメコを突きまくったら、それはもう気持ちが良いぞ？」「楽になりたいだろう？ 気持ち良くなりたいたいだろう？ 隆彦は見えておらんのだ。愛実さんさえ秘密にしておれば良いことじゃあないか」「そもそもこれは神事だ。このチンポはかがち様だ。村の繁栄のために仕方なくやることだ。愛実さんは、富蔵家の女として当然の義務を果たすだけだ」

愛実は悪くない。これはただの神事である。と強調する長太郎。よだれをダラァと口から垂らしてうつろな視線で尻を揺らす愛実。その瞳の先の赤黒く焼けた鉄のような怒張が、ビクンビクンと力強く亀頭を振る。そんな様子を見て、愛実はぐくんと息を呑む。愛実が落ちかけていることを見て長太郎がいやらしい笑みを浮かべながら言う。

	<p>「さあ、楽になりたいければ言いなさい。かがち様お慰め奉ります——と」 愛実 は再びごくんと息を飲み、漏らすように言う。 「……た、隆彦さん……ごめんなさい」 「かがち様……お慰め、奉ります……」 よく言ったぞ愛実さん、これであんたは正真正銘富蔵家の一員だ！と笑う長太郎。その一言でタガが外れたのか、お願いします。早く早く何とかしてください！と必死になって尻を揺らす愛実。そんな愛実の姿に満足げに笑いながら、長太郎は権造に言う。 「息子妻の折角のご好意だ。遠慮なく、かがち様を慰めて頂きなさい」 赤子の握りこぶしのような亀頭を愛実の膣肉に押し当てる権造。浅ましく、権造に向かってじりじりと尻を突き出す愛実。そんな妻の姿を見て、泣きながら勃起している隆彦。次の瞬間、権造の太マラが愛実の膣を容赦なく貫く。痒い膣肉を硬く焼けた怒張に掻き毟られる快感。隆彦よりも遅しいもので初めて奥まで貫かれる女としての未曾有の悦び。それら全てが渾然一体となって、愛実を瞬く間に押し上げていく。 「義父との初顔合わせの夜に、不貞チンポで気をやりそうにしおって。このドスケベ妻が！」 愛実の尻を思い切り手のひらで打ち据える長太郎。愛実 は悲鳴をあげて謝りながらも、結合部から透明な飛沫をあげている。尻を叩かれながら潮を噴いているのだということを理解して、隆彦の興奮は最高潮に高まっていく。愛する夫への謝罪の言葉を何度も漏らしながら愛実 は高まっていき、そして—— 「ごめんなさっ、ごめっ、隆彦さんっ……っく、っぐく……ッ、イクうッ！　いくいくくッ、いくふうううううううううッ！」 凄絶な絶叫と共に叫ぶ愛実。その瞬間、権造も「おっ、おおっ、おおううッ……！」と醜い呻き声をあげながら、ビクビクと腰を突き上げる。膣内射精をされている。実の父親どころか、使用人の精液を愛する妻が注ぎ込まれている。あきれ返るほどの射精をしているのか、串刺しにされた結合部からはとろろ汁に負けないくらいに濃くドロドロとしたオスの子種が溢れ出して、地面に垂れ落ちている。精液を膣奥で受け止めながら、愛実 は絶頂の余韻にひたり、隆彦へ謝っている。権造が腰を引くと、ずるり、と怒張が引き抜けて更に大量の精液が床へと零れ落ちていく。 「セックスが……こんなに、すごいだなんてえ……」 息も絶え絶えでとろんとした声を漏らす新妻が赤の他人の子種で子宮を凌辱し尽された——そんな事実を証明するかのような光景を実ながら長太郎は満足そうな笑みを浮かべて、そして言う。 「賭けはわしの勝ちだな、愛実さん。これから一週間、気が向いた時にはかがち様のお世話を宜しく頼むぞ」「くくっ、ピルでも飲んでおけば心配なかる。遠慮なく、子種アクメを極めさせてやるからな」</p> <p>目の前の光景に衝撃を受けながらも、隆彦もいつの間にか取り出してしごいていた自らの怒張から、ビュッ、ビュッと薄い精液を吐き出している。これから一週間こんなことが続くのか……と、後悔と興奮とで気が狂いそうになる隆彦。本当にこんなことをして良かったのか。こんなことを続けて良いのか。覗き穴を覗きながら「ぐっ、ぐぐ……」と呻き声を噛み殺しながら煩悶する。</p> <p>※ここまで体験版範囲</p>
kag001_07 ●場所 調教室・夜	<p>愛する妻を実際に他人に抱かせてみて、罪悪感よりも興奮が勝る隆彦。</p> <p>射精し終えた怒張はまだ硬さを保ったままで、ビクビクと力強く反り返っている。穴の向こうでは愛実が気をやった女の色香をこれでもかと放っていて、それが自分とのセックスによってもたらされたものではない、という事実が隆彦の嫉妬と怒りと興奮をグラグラと煮立たせてたまらない。</p> <p>(……ああ、君はなんて綺麗なんだ。愛実) 自分ではない男に汚しつくされながら、獣のように喘ぎ悶え、ブビッブビッと下品な音を立てながら膣から精液を逆流させる妻の姿に、隆彦は再度怒張をしごき始める。怒りと妬みと興奮に満ちた隆彦の肉棒から、程なくして二発目の精液が放たれるのだった。</p>
kag002_01 ●場所 客間・昼 ↓ 廊下・昼 ●使用 CG H029a H029b H029c	<p>白縄村滞在 2 日目。8 月 1 2 日の朝。 時刻は朝 8 時ほど。いつもよりも少し遅い時間に客間で目を覚ます隆彦。ふと隣に敷かれている布団に目をやれば、愛実の姿は既に無い。 「……」</p> <p>ドクン (H029——権造のピストンで激しくよがる愛実の CG をセピア加工して表示) ドクン (H029a——権造に射精されて絶頂を迎える愛実の CG をセピア加工して表示) ドクン (H029b——権造の怒張を引き抜かれて精液を逆流させる愛実の CG をセピア加工して表示)</p> <p>心臓の鼓動の SE を三回ほど鳴らしながら、タベの愛実の喘ぎぶりを思い返す隆彦。初めは嫌がっていた。快感を懸命に堪えようとしていた。だが最後には自分以外の怒張を受け入れて、そして精液を注ぎ込まれて絶頂していた。余りセックスが好きではないのではないかと思っていた、貞淑な愛</p>

	<p>妻の牝の顔を思い返して、隆彦は朝ということもあり勃起する。覚えてたの中学生のように、タペの出来事を思い返して自慰に耽りたい気分になるのだが、それをぐっと堪えて洗面所へ向かうことにする。いつも通りの時間に目覚めたのか、それとも良く眠れなかったのか……手持ち無沙汰で朝食の準備でも手伝いに言ったのだろうか……というようなことを考えながら隆彦は部屋を出る。</p> <p>～廊下・昼～</p> <p>洗面所に向かうと、丁度出てくるところだったのか愛実と出くわす。</p> <p>「やあ、おはよう」</p> <p>「おはようございます、隆彦さん」</p> <p>微笑む愛実。肌は薄く濡れ、頬をわずかに紅潮させている。その身体からは朝だと言うのに強烈な女が匂っていて、そのあまりに豊潤な牝のフェロモンにくらりと立ちくらみを起こしそうになりながら、隆彦は少しハツとして切り出す。</p> <p>「……夜は涼しかったけれど、日が昇ると途端に暑くなるね。思い切り寝汗をかいてしまったよ」</p> <p>「そうですね。わたしも……汗をかいてしまいましたのでお風呂をお借りしました」</p> <p>「ああ、それは良いね。僕も朝ご飯の前に風呂浴びるかな」</p> <p>そんな会話をかわして、隆彦も風呂場へと向かう。タペの出来事が後を引きずっていて、それであんな色気を朝から振りまいていたのだろうか、とかそんなことを考えながら。</p>
<p>kag002_02</p> <p>●場所 広間・昼</p>	<p>富蔵家の広間で朝食を取っている隆彦、愛実、長太郎、彩花。四人の前には派手なご馳走というわけではないが栄養のバランスをしっかりと考えて作られたことが分かる和食が並べられた膳が置かれている。権造はおらず、食事のあれやこれやの世話は彩花がしている。</p> <p>「やはり家族揃っての食事は良いものだな」</p> <p>「そうですね」</p> <p>長太郎の言葉に答える隆彦。自分が生まれて初めて惚れた女性を奪い取り、実母が家を出ることになった原因でもある父親を憎む気持ちは消えないが、愛実の手前表面上だけでも仲の良い親子を演じないと、と自分でも驚くほど冷静な気持ちで考えている。愛実は朝からふさぎこみがちで、それが自分への申し訳なさから来ていることを重々承知している隆彦。自らも愛実に申し訳無い気持ちで一杯になりながら、反面、今日はどんなことをされてしまうのかと密かに興奮を隠しきれない。</p> <p>「愛実さん、お代わりはいかが？」</p> <p>「お気遣いありがとうございます、お義母さま。ですがもうお腹がいっぱいで」</p> <p>「あらそう？ 遠慮はしないで良いですからね。それから、昨日も言いましたけれどもお義母さまなんてやめて下さい。彩花で良いですから」</p> <p>「……は、はい。彩花さん」</p> <p>ころころと笑う彩花。少し戸惑いがちな笑顔の愛実。“彩花は愛実よりも大分前にこの家に嫁入りした。ということはこの家の女がどのような目に遭わされるか知っているはずだ。もしかしたら自分と同じようにタペは男達に弄ばれたのかもしれない。なのになぜこんなに屈託無く笑えるのだろうか”——愛実は恐らくそんなことを考えているのだろう、と隆彦は推察する。彩花の様子におかしいところがないのは、彩花は愛実が昨夜どのようなことをされたのか知らないからだ。隆彦が帰省するときに彩花は長太郎に申し出たのだという。隆彦が帰っているあいだはせめて普通の、おかしなしきたりの無い家にしましょうと。あとでどのような責めを受けても良いからお願いしますと彩花は申し出たのだという。</p> <p>『その時に、彩花の奴がお前をまだ好いていると分かった。母としてではなく女としてな』</p> <p>『あれだけ長いあいだ離れていたくせにまだ少女じみた恋心を抱いているのかと、実の息子であるお前に激しく嫉妬した。お陰であの晩は燃えに燃えたぞ。わしのチンポから一生離れませんと叫ばせてやったわ』</p> <p>自然と視線は愛実から彩花へと移っていく。家を出る直前、父親と結婚したばかりの彩花。あの時の彩花でさえ幼心になって素敵な大人のお姉さんだろうとドキドキしたというのに、今の彩花は当時が比べものにならないほどに熟れている。満開の華のように、女が咲き誇っている。</p> <p>“この牝を自由にして良いのだ”</p> <p>そんな声が腹の奥底から聞こえてきて、ぞわり、と背筋がおぞけだつ。愛するものを寝取られる興奮とは別の、雄の喜び。</p> <p>(……ああ、楽しみだ)</p> <p>庭先にぶら下がっている提灯に火が着いて、村中にかがち様が現れる時間を思い、静かに興奮をたぎらせる隆彦。その時、ああそうそうと長太郎が口を開く。</p> <p>「滞在中のことなのだがな、何か用事がある時以外は自由にしてくれて構わんぞ。家でのんびりするもよし、外をうろつくもよし。車を使いたいなら好きなのを乗っていけ。鍵は権造が用意する」</p> <p>「暇ならわしの将棋相手になるもよし、愛実さんとドライブに行くもよし、だ」</p> <p>分かりましたと返事をしながらも、隆彦の頭の中には弄ばれる愛実の姿と、自分が弄んでいる彩花の姿が一杯になっている。</p>
<p>kag002_03</p> <p>●場所 客間・昼</p>	<p>朝食後、客間へと戻る隆彦と愛実。隆彦は書斎に転がっていた本を読み、愛実は手持ち無沙汰もてあましているのか、彩花から貰った浴衣を隆彦のために繕っている。さて暇になったがどうしようかと考える隆彦。まだ日は暮れていない。彩花にちょっかいをかけるには早い時間だ。ならば長太郎が言っていたように将棋の相手でもするか。それとも愛実と出かけようか。</p>

	<p>■選択肢発生</p> <p>①長太郎の相手をする→kag002_04</p> <p>②愛実と出かける→kag002_07</p>
<p>kag002_04</p> <p>●場所 客間・屋 ↓ 書斎・屋 ↓ 廊下・屋</p>	<p>「少し親父のところへ行ってくるよ」</p> <p>「あ……はい」</p> <p>浮かないわけではなく、まだ少しぼうとした感のある愛実に言ってから部屋を後にする隆彦。そのまま長太郎が普段筆っている書斎へと向かう。</p> <p>～書斎・屋～</p> <p>「まさかもう一度父子で将棋盤を挟む時が来るとはな」</p> <p>「僕も驚いていますよ。正直今も、あなたのことは憎くて憎くて堪らない」</p> <p>「わしだってそうだ。彩花から好かれているお前が憎くて憎くて堪らんぞ」</p> <p>平手で指すぞと言いつつも駒を並べ始める長太郎。隆彦もそれに習って駒を並べていく。振り駒をして長太郎が先手ということになり、いざ打ち始める前に長太郎が言う。</p> <p>「……ところで、今朝の愛実さんは色っぽかったと思わんか？」</p> <p>「……」</p> <p>同意の言葉は無く、ただ顔を上げて長太郎を見る隆彦。長太郎はニタニタと下品な笑みを浮かべて隆彦を見つめ返す。まさか自分が寝ているあいだに何かあったのか、とドクドクと胸を高鳴らせる隆彦。表面上は冷静を装う隆彦に、長太郎は余裕の笑みで続ける。</p> <p>「わしに勝てれば、今朝の愛実さんがどうしてあんなに色っぽかったのかを教えてやろう」</p> <p>無言で将棋を指し始める二人。</p> <p>～時間経過の演出～</p> <p>「負けたか。……ぐふふ、そんなに気になるか？」</p> <p>長太郎はにやつきながら書斎の机の棚を開けると、そこからデジタルビデオカメラを取り出して隆彦に渡す。ビデオカメラにはヘッドフォンがついていて、どうやら中身を再生してみろということらしい。「愛実さんにそれを持っているところを見付からんようにしろよ。中を見るなら勝手口近くのトイレあたりが良い」そんなことを言う長太郎に送り出されて部屋を出る隆彦。</p> <p>～廊下・屋～</p> <p>胸がドクドクと早鐘のように鳴っていく。懷にビデオカメラを隠すようにして、長太郎の言うように客間から離れたトイレへと窺る隆彦。プレビュー用に大きな液晶画面のついているビデオカメラの電源を個室の中で開いて、メモリーカード内に入っているデータを参照する。</p> <p>■ガチネトラレフラグ+1</p>
<p>kag002_05h</p> <p>●場所 トイレ・屋 (立ち絵背景は無し・ 参考資料は有り)</p> <p>●使用 CG *フェラ H030 H031 H032 H033 H034 H035 *口内射精 H036 H037 H038 *顔面射精 H039</p>	<p>富蔵家のトイレの中で、長太郎に命じられてフェラチオさせられる愛実。</p> <p>初めは黒画面の中で、長太郎と愛実の会話。</p> <p>「お義父さま……や、やめて下さい……まだ夕方になっていないじゃありませんか……！ まだ、かがち様遊ばせは……」</p> <p>「こらこら愛実さん、言っただろう？ かがち様遊ばせのことは屋間口にははいかんと」</p> <p>「だって、そんな迷信っ」</p> <p>「おやおや、そんな罰当たりなことを言っではいかんなあ。その迷信を信じてこの村は発展してきた。かがち様のことを悪く言っているのをもし村人に聞かれたら、ただじゃすまんぞ？」</p> <p>「……」</p> <p>「それにこれは、ただ義父の下の世話を息子嫁に頼んでいるだけよ。タペの愛実さんの姿を思い返すとチンポが腫れて腫れて堪らんよ。こんな有様じゃおちおち朝飯も食べれん。愛実さんには責任を持って鎮めて貰わんとあ」</p> <p>「……それとも、約束を破るつもりかね？」</p> <p>長太郎の声の芯が、これでもかというほどに冷える。言うことを聞かなければ恐ろしいことになるぞ、とでも言うような響きに、愛実が息を飲む音が聞こえる。</p> <p>「どうも愛実さんは自分の立場が分かっていないと見える。無事に夏休みを終えて、隆彦と幸せな生活に戻りたいのなら、わしの言うことには従ってもらわんとあ」</p> <p>迷っている風の呻きが黒い画面から聞こえてくる。畳み掛けるように長太郎は言う。</p> <p>「何も朝から晩までわしの相手をしろと言っているわけではない。今日は、そうさな、朝だけ。今だけわしのチンポを慰めておくれ。別におめこさせろと言うわけではない。ただ愛実さんのぷっくりといやらしい口おめこで、わしのチンポをちゅうちゅうしてくれれば良いんだ。朝っぱらから生おめこをするよりはいいだろう？」</p> <p>ごくんと息を飲む音が聞こえて、小さな溜息をつくような声で愛実が言う。</p>

H039a
H039b

「わかり、ました……」
「物分りのいい嫁は好きだよ、愛実さん。ただ、あんたが妙な気を起こさないように、保険だけは掛けさせて貰おうか」

～イベント CG H030 表示～

「あっ、やっ、いやっ！　だ、だめ、だめです！　やめてください！」
ビデオカメラで撮影されて、目を右手で隠す愛実。愛実は仁王立ちで帯を解き怒張を露出している長太郎の股間に跪いている。撮影をやめるように言う愛実に長太郎は言う。
「愛実さんがわしの言うことに大人しく従えば別に誰に見せたりするわけでもない。ほれ、早くせんと彩花が飯の準備を終えて呼びにくるかもしれないぞ？」
ビンビンに怒張した勃起で、愛実の唇をつんつんと突く長太郎。醜悪な怒張に唇を撫でられて、愛実は不快そうに呻く。呻きながらも右手をゆっくりと顔の前からどける。だが視線は突きつけられた怒張から逸らしている。
「ぐふふ……生娘じゃあるまいし、そんなに恥ずかしがることは無かろう？」
「……で、でも、口でするなんて……初めてで……」
愛実が初フェラチオだということを喜ぶ長太郎。嬉々としながら舌で先端を舐めさせ、啜えさせ、ジュボジュボと頭を振らせ……と、フェラチオを仕込む。息子嫁の初フェラをゲットした黒い喜びに浸る長太郎。自分にもしたことのないフェラチオを必死になって、父親の怒張を唾液でヌルヌルとてからせる愛実。画面内の愛妻の尻がフェラチオに興じながらもじりじりと揺れていることに隆彦は気付き、愛実が長太郎へのフェラチオで発情しているのだということを理解する。そんな愛実の姿に長太郎も興奮を煽られたのか、ふんふんと鼻息を荒くしながら腰を叩きつけるようなイラマチオに切り替える。愛実は怒張で口を付かれながらも健気に言いつけを守って、必死になって長太郎のチンポを吸い上げる。そんな愛実の奉仕に、醜い呻き声をあげながら、画面の中の長太郎が射精を迎える。

■選択肢発生

射精選択肢A→口内に注ぎ込む

射精選択肢B→顔面にぶっかける

■口内射精の場合

「全部飲むんだぞ、愛実さん……おおうッ！」
愛実の頭を押さえつけながら、醜く呻きつつ射精する長太郎。あきれ返るほどの精液を放出しているのか、長太郎がビクンビクンと腰を引きつらせるたびに愛実は呻き声をあげて、ゴクゴクと喉を鳴らし、唇から精液をわずかに零れ落としていく。
「ふふっ……愛実さんがエロいお陰で朝からたんまりと出たわ。どら、きちんと子種を飲めたか見てやろう。口を『ああん』としてみなさい」
「……んむあ……ん」
長太郎の言うがまま、口をぱかりと開く愛実。精液の糸が口内に幾つも引く。それを見て長太郎は再び萎えた勃起をいきり立たせて、愛実に言う。
「愛実さん、子種を注いでもらったあとは、お口でお掃除をするのが作法だぞ？」
口内射精の衝撃に放心状態の愛実は、長太郎の言うがままにお掃除フェラをする。
ぴちゃぴちゃねちゃねちゃと精液のカスをなめ取られて「ううっ、おっ、おおっ、おう……」と醜い呻き声をあげる長太郎。

→kag002_06へ

■顔面射精の場合

「愛実さん、口をあけて、ペロを出しなさい……ぐおっ、おおう！」
長太郎の言葉に従って、その通りにする愛実。直後、長太郎の怒張から年齢からは考えられないほどの大量の精液がほとばしる。
「んむあっ、んぶっ、んむあッ！　はうっ、んふああ……っ！」
煮えた粥のように濃厚な精液を顔面にぶちまけられるたび、甘い悲鳴をあげる愛実。
「ぐっ、ふふっ……ただ気持ちよくしてもらっただけじゃ、申し訳ないからの……子種汁パックで、愛実さんの美肌作りに協力してやろう……ふっ、ふう……ッ」
そんなことを嘯きながら、ビュクッ、ビュルッと精液を放つ長太郎。最後一滴がビュクンと飛び出した後に、長太郎は言う。
「そら愛実さん、最後にチンポの残り汁を、綺麗にペロペロしておくれ……」
愛実は特に抵抗の気配は見せず、むしろ顔面射精の衝撃に酔っているよううっとりとした顔で長太郎の怒張に舌を這わせる。そんな愛実を見下ろしながら、長太郎は下品な笑みを浮かべてお掃除フェラの快感に酔いしれる。
「おっ、おっ、おっ……義父思いの嫁をもらった隆彦には感謝せんとのおう……ぐふふ」

→kag002_06へ

	<p>※このシーンで特に意識して頂きたいこと、二点</p> <p>①初フェラを実の父親に取られて嫉妬に燃えつつ興奮する隆彦。</p> <p>②愛実がフェラにあまり嫌悪感を抱いてはおらず、最初から羞恥を強くあらわしている。フェラチオの指導を受けるうちに、徐々に発情していているのが隆彦にも分かり、貞淑な妻だと思っていた愛実が実は淫らな素質を備えていることを隆彦が知る。</p>
<p>kag002_06</p> <p>●場所 トイレ・昼（表示する背景は廊下・昼）</p> <p>●使用 CG H039c H039d</p>	<p>kag002_06h で口内射精を経過していた場合は H039c を表示 kag002_06h で顔面射精を経過していた場合は H039d を表示</p> <p>「ううっ、くっ、ううっ……！」</p> <p>ビデオカメラのプレビュー画面に表示されている、長太郎の精液を口から垂らしている愛実の顔を見ながらトイレでオナニーして射精している隆彦。初フェラを父親に取られたことに対する嫉妬や、朝から妙に愛実が色っぽかった理由やらが頭の中をグルグルとめまぐるしく回転しつつ興奮している。自分にもしたことの無いフェラをしている愛実の姿に胸を締め付けられながらも「ああ憎いあの男の精液を浴びている君の姿はどうしてこんなに美しいのだろう」と隆彦は猿のようにチンポをしごきまくる。そして興奮しながらも、俺だけがこんなに悔しい思いをする必要は無い……と、脳裏に自分に組み伏せられてあえぐ彩花の姿を浮かべる。</p> <p>※口内射精と顔面射精どちらを選んだ後に表示されても問題の無いテキストでお願いします。</p> <p>→kag002_15 へ</p>
<p>kag002_07</p> <p>●場所 客間・昼</p>	<p>浴衣を繕っている愛実に、よければお弁当でも持ってドライブでもしないかい？と声をかける隆彦。愛実は喜んで賛成する。スポーツカーとかもあるけど乗ってみる？と尋ねる隆彦に、落ち着かないので普通の車が良いですと愛実。家の者が用事を片付ける時に使っている車（白いプリウス）を借りてドライブをすることに。車に乗り込んで、さあどうしようかとドライブのプランを考える隆彦。大釜山（おおがまやま）と石蓋山（いしぶたやま）※の二つをつなぐ山道でも走って途中二人で山を散策でもしようか、それとも山を越えて日本海沿いの道でも走ろうか、どちらにしようか？</p> <p>■選択肢発生 ①山道をドライブ→kag002_08 ②海沿いをドライブ→kag002_11</p> <p>※山については企画書上部の設定まとめに軽く記述があります。</p>
<p>kag002_08</p> <p>●場所 溪流・昼</p> <p>●使用 CG *キス N010 N011 N012</p>	<p>のんびりと山道をドライブして、石蓋山の山中にある溪流までやってくる隆彦と愛実。車を降りて大きく息を吸って清涼な空気を味わう。</p> <p>「はあ……とっても涼しいですね。良い気持ち……」</p> <p>「そうだね。良い気分だよ」</p> <p>そんなことを良いながらボンネットに腰掛ける隆彦。愛実はお行儀が悪いですよと苦笑するが、隆彦は毎朝権造が洗ってるから大丈夫さ、とはぐらかしながら愛実にも座るように薦める。もっと下流の方だけど、小さな頃は自転車に乗って近所の子供と釣りをしに来たりしたなあ……と、川のせせせらぎに耳を傾けながらしみじみと言ったり、そういえばこの下流には掘れば温泉が湧き出てくるところがあってねえ、折角だからお風呂道具を持って来れば良かったねとそんな会話に興じる。</p> <p>ふと会話が途切れ、視線を感じて横を向く隆彦。すると愛実が隆彦のことを、濡れた瞳で見ていることに気付く。発情した女の色香をじっとりと底から滲ませた瞳。朝からたびたび見せていた愛実の哀切な顔に、隆彦は胸を鷲づかみにされるような息苦しさを覚えて、胸を高鳴らせる。どちらともなく唇を寄せて、恋人同士がするのではなく、男と女が交わす濃密なキスを交わす二人。切なげな息を漏らす愛実に、付き合い始めたばかりの頃の、童貞だった頃のような興奮を感じる隆彦。唇のあいだにつうと唾液で出来た銀色の橋をかけながら、愛実がささやくように言う。</p> <p>「……隆彦さん、はしたないこと、言っても良いですか？」</p> <p>「……良いよ」</p> <p>「抱いて、ください……隆彦さんと、シたくてたまらないんです」</p> <p>「僕も……今すぐく愛実としたい。……良いんだね？」</p> <p>ここで、外でも良いのかという問いかけにこくんと頷く愛実。隆彦は愛実の手を引いて、茂みの中へと入る。</p>
<p>kag002_09h</p> <p>●場所 溪流・昼</p>	<p>※森の中で木に手をついて立位。</p> <p>「はあ……っ、んっ、んっ、んんっ……どうして、わたし……こんな……隆彦さん……っ」</p> <p>大きな木に両手をついて尻を突き出し、外で抱いて欲しいと口走ってしまった自分に戸惑いの言葉</p>

<p>●使用 CG</p> <p>H040</p> <p>H041</p> <p>H042</p> <p>H043</p> <p>H044</p> <p>H045</p> <p>H046</p> <p>H029（鼓動 SE 合わせ）</p>	<p>を漏らしながら、愛実は唇をつぐみがちにして喘ぎ声をこらえている。愛実は服は着たままで、スカートから下着をひき下ろしてお尻を丸出しにしている。隆彦も衣服を着たままで、愛実の膣肉を指でくちくちと丁寧に愛撫している。</p> <p>愛実が発情しているのは、タベ夫以外の男に抱かれて絶頂を迎えてしまったがための罪悪感から来ているのかもしれない。その罪悪感を夫とのセックスで上書きしたいのかもしれない……と、そんなことを考える隆彦。隆彦もまた、タベ夫以外の誰かに抱かれる妻を見たせいで、いつもより信じられないくらいに自分が興奮していることを自覚する。</p> <p>「すごく濡れてるよ、愛実。いやらしいね」</p> <p>「ごめんなさい、隆彦さん……っ、いやしくて、ごめんなさい……」</p> <p>隆彦の指に恥蜜をねっとり絡みつかせながら誤る愛実。そんな愛実の姿に、隆彦はさらに強く興奮する。もっといやらしくなっているんだよ——そんなことをささやきながら、隆彦は突き出した舌で愛実の肉溝をべろお……と舐め上げる。普段はクンニなどしない隆彦の濃厚な愛撫に、愛実の膝をカクカクと揺らし、しきりに恥ずかしいと呟きながら快感の声をあげる。舐めれば舐めるほどに蜜を漏らす恥肉にむしゃぶりついていると、愛実の吐息はいよいよ切羽詰っていき、挿入をねだる。愛する妻のおねだり声に下半身を露出させる隆彦。いつもよりも遅くそそり返っている夫の肉棒を見て、瞳を妖しく輝かせる愛実。愛実に自分とのセックスを味わわせるように、ゆっくりねっとり怒張を挿入する隆彦。にゅぶぶぶぶ——と熱きった果実のような膣肉を怒張が掻き分けていく快感に隆彦は苦悶の声を漏らし、愛実はうっとりため息のような声を出す。初めはゆったりとしたピストンを繰り返す隆彦。だが愛実の声は次第に大きくなっていき、</p> <p>「隆彦っ、さん……っ、もっと、もっとして……もっと、もっと強くしてえ……っ」</p> <p>と、さらに強い快感を要求する。隆彦の脳裏にタベ権造に激しくピストンされていた愛実の姿が思い浮かび（心臓の鼓動 SE と共に H029 を表示して、鼓動の鳴り終わりに H043 に戻す）、隆彦は権造に負けじと愛実を喜ばせるためにハードなピストンを繰り返す。ひいひいと悲鳴をあげながら、いつもに比べて格段に激しい夫のセックスにあられもない声をあげる愛実。そんな愛実に、君は最高だ、と何度も何度も繰り返す隆彦。野外であることも忘れてケダモノのように交わりながら、二人は絶頂に向かって一気に駆け上がっていく。そして本能の赴くままに愛実の膣内に精液をたっぷり放出する隆彦。夫とほぼ同時に絶頂に達する愛実。隆彦は愛実の尻肉に指を食い込ませて引き寄せ、愛実はガクガクと膝を笑わせながらも肉棒の根元に尻をむっちり押し付けて、繁殖欲を満たす快感に酔いしれる。</p> <p>「クセに……なっちゃいそう……」</p> <p>繋がったままちゅっちゅと余韻に浸るようにキスをする二人。</p> <p>とろんとした瞳のまま、愛実がうっとり呟く。</p>
<p>kag002_10</p> <p>●場所</p> <p>溪流・屋</p>	<p>青姦後、身だしなみを整える二人。愛実は今更ながら外で乱れに乱れたことを猛烈に恥ずかしく思っているらしく真っ赤になっている。隆彦も愛実ほどではないが気恥ずかしい。そんな気恥ずかしさを誤魔化すように隆彦が言う。</p> <p>「身体を動かしたらお腹が減ったね。お弁当、食べようか」</p> <p>「……は、はい」</p> <p>恥ずかしそうにしながらも頷く愛実。そんな愛実は、隆彦のことをじっと見て、それから搾り出すように言う。</p> <p>「隆彦さん」</p> <p>「なんだい？」</p> <p>「……愛してます」</p> <p>愛実の愛情や、夫の父と寝てしまった罪悪感を受け取りつつ、自分の欲望のために父親に妻を差し出した罪悪感と、愛実への強い愛情を感じる隆彦。お互いに秘密を抱えつつもお互いを愛しているのだという想いを噛み締めて隆彦は言う。</p> <p>「……僕もだよ」</p> <p>→kag002_014</p>
<p>kag002_11</p> <p>●場所</p> <p>海岸線・屋</p> <p>↓</p> <p>海・屋</p> <p>↓</p> <p>海岸線・屋</p> <p>↓</p> <p>ラブホテル</p>	<p>青空→海岸線・屋→海・屋という感じで背景変更。</p> <p>「うわ、暑いなあ……」</p> <p>「暑いですねえ」</p> <p>うんざりした顔の隆彦と、その割には嬉しそうにニコニコと笑っている愛実。二人の目の前には白い砂浜と青い海。田舎だからか海水浴客は真夏だというのに殆どおらず、沖合いに漁船が出ているくらい。「水着を持って来るべきだったね……」と失敗したなあという顔をする隆彦に「水着がなくても海で遊べますよ」と愛実。スカートをめくって腰の辺りできゅっと結ぶと、靴を脱ぎ捨て、熱い熱いとはしゃぎながらそのまま嬉しそうに波打ち際に向かって歩いていく。微笑ましく見守っていると「隆彦さんもー！」と遠くから呼ばれ、苦笑しながら愛実に習って波打ち際へと向かう。</p> <p>～時間経過の演出～</p>

	<p>波打ち際を散歩したり、人が大勢いる海水浴場じゃ恥ずかしくてとても出来ないこと（波打ち際で水をかけあったり）をして、お弁当を食べてからそろそろ帰ろうか、という話になる。今度海に来る時は水着を持てきましようねという愛実の言葉に頷きつつ海を後にする。</p> <p>～海岸線・昼～</p> <p>海岸線沿いを走る車。お互いかなりはしゃいだせいか言葉少な。心地よい沈黙に浸りながらアクセルを踏んでいると、田舎だというのにやけに立派で新し目な洋風のお城が建っているのに気付く。「こんな田舎にもあるんだなあ……ラブホテル」</p> <p>感心したように呟く隆彦。すると愛実がぼつりと呟く。</p> <p>「……隆彦さん」</p> <p>「なんだい？」</p> <p>「……休憩、していきませんか？」</p> <p>運転中なので助手席は見えない。だけれど愛実の声はいつのまにかしっとりと湿っていて、その濡れた瞳が隆彦の横顔を捉えているのが分かる。</p> <p>「……」</p> <p>「……」</p> <p>車内を先ほどまでの心地良い沈黙とはまた別の、みだらな期待に満ちた沈黙が包み込む。愛実の申し出に答えるように、隆彦はウィンカーを上げて車をラブホに入れる。</p> <p>～ラブホテル～</p> <p>「……」</p> <p>先にシャワーを浴び終えてラブホのベッドに腰掛けている隆彦。朝、洗面所の前で会った愛実。朝食時の愛実。オスにだけ分かるメスのフェロモンを匂わせていた愛実。午後にはすっかりとなりを潜めていた愛実のそんな姿が、先ほど唐突によりみがえった原因について考える隆彦。</p> <p>（罪悪感だろうか……？）</p> <p>タベ夫の父親たちを相手に、夫にも見せたことのない乱れぶりを見せた自分を消してしまいたいとも思っているのだろうか。それとただ単純に、結婚する前に海に行った時のことでも思い出して気分が盛り上がった？ 原因は分からない。それに原因なんてどうでもいい。隆彦の頭の中では、先ほどから強烈なフラッシュバックが起こっていて、自分でも信じられないくらい興奮が高まっている。タベ、父親に抱かれて喘いでいた愛実の姿を思い返すたびに、肉棒が破裂しそうなくらいに痙攣してしまう。そしてガチャリと、バスルームの扉が開く。</p> <p>「お待たせしました……隆彦さん」</p> <p>バスタオルを巻いている愛実が、少しかすれた声で言う。豊かな胸、くびれた腰、白桃のような尻の描くライン。それを目にした瞬間、愛実と初めてセックスした時のような興奮が全身を貫いて、まるで自分が童貞の少年になってしまったかのような感覚に陥ってしまう。今すぐしたい。目の前のこの女と、今すぐセックスをしたい——という本能の声を押さえつける隆彦。愛実がゆっくりと、焦らすように近づいてきて、隆彦の腰掛けている横に座る。</p> <p>「隆彦さん……」</p> <p>濡れた声で言われて、隆彦ははやる気持ちを抑えながら、愛実に向き直る。</p> <p>■愛実フラグ＋１</p>
<p>kag002_12h</p> <p>●場所 ラブホテル</p> <p>●使用 CG</p> <p>*キス N010 N011 N012</p> <p>*側位 H050 H051 H052 H053 H054 H055</p>	<p>まずはキスをする二人。軽く唇を重ねて、舌をくちゅくちゅと絡めて、つうと舌を引き抜いて……と、短めの描写でまとめる。気分が盛り上がって、そのまま愛実をベッドに倒す。横臥し、愛実を後ろから抱きしめるような格好のまま、荒い息を互いに交わしつつキスを交わす二人。甘い声で自分の名前を呼ぶ愛実に応えるように、隆彦は愛実の腰を抱きしめていた右手を愛実の股間へと運び、左手を愛実の左乳房へと運ぶ。キスをしたまま愛撫する隆彦。愛実が漏らす息の甘ったるさが増していき、全身から漂う牝の匂いがますます濃厚になっていく。乳首はピンと切なげに膨らみ、股間のぬかるみはくちゃくちゃと増していき、ピンク色のシーツに小さな染みが浮かぶ。愛実の隆彦の名を呼ぶ声がさらに深く甘くなる。挿入を、雄との生殖を願っていると誰が聞いても分かる声になる。</p> <p>「隆彦さんの、いつもより、すごい……です」</p> <p>「愛実も、いつもよりもすごいやらしくなってる」</p> <p>素股のように股間から飛び出している怒張をいとおしげに触る愛実。白魚のような指が奏でる快感にうめきながら、隆彦は愛実の耳元でささやく。そして愛液が糸を引く自らの指を、愛実の眼前に差し出して見せ付ける。自分が垂れ流した本気汁を見せ付けられて恥じらいながらもとうとうハッキリと挿入を口に出してねだる愛実。隆彦もそれ以上こらえることが出来ず、愛実の太ももを右手で持ち上げて開かせると、濡れそぼった膣穴に肉竿の切っ先を押し付けて、そして腰をねじ入れる。煮詰まった膣穴をゆっくりとこじ開けるように突き進む肉棒。いつもよりも熱烈に絡み付いてくる愛妻の膣肉に隆彦は呻き、いつもよりも逞しい夫の雄の象徴が自身を貫く心地よい圧迫感に聞く方が堪らなくなってしまいそうな哀切な声を漏らす。</p> <p>「こんな格好……めずらし……っ……んっ、んんっ……」</p>

	<p>いつもは大体正常位の隆彦が珍しく側位なんて選び、ずっと愛実を抱きしめたまま口付けを繰り返している。珍しく情熱的な夫の様子に嬉しそうな声を漏らす愛実をもっと悦ばせ、感じさせてやろうと隆彦は抽送を開始する。右手はふとももを抱え、左手は腰をつかんで腰をゆるやかに往復させる隆彦。膣の入り口から奥までをじっくりとこすり上げるようなピストンにとろとろに溶けた声をあげる愛実。快感を示すように肌の桜色が深く濃くなっていく愛実をもっと喘がせたい、乱れさせたいという隆彦の欲望が、ピストンをより旺盛なものへと変えていく。隆彦の怒張がこつんこつんと愛実の膣奥を軽く突き上げ、そのたびにきゅっきゅっと締めつけを増す牝芯。俺だって愛実を感じさせられるのだという雄の征服欲のようなものが隆彦の快楽を昂ぶらせ、射精欲求を急激に膨らませる。愛実の膣奥にたっぷりと精液を注ぎ込む隆彦。愛実の膣内射精を受け止めながら顎をのけぞらせ白い喉を晒し、ラブホベッドのシーツを思い切りよじって全身で絶頂を表現する。汗まみれになりながら満足そうな吐息をつく愛実に、もう一度後ろからキスをする隆彦。繋がったままたっぷり舌を絡める二人。</p>
<p>kag002_13</p> <p>●場所 海岸線・昼</p>	<p>「……」</p> <p>再び海岸線を走っている隆彦。愛実が疲れたのか、ラブホテルを出て十数分も経った頃には眠ってしまっている。信号待ちで横を向いて、安らかな寝息を立てている愛実を見る隆彦。愛実を他人に抱かせて興奮するという自分の性癖はどうにも出来ないが、かといって愛実が自分以外の男に夢中になって自分の元から去ってしまうようなことは絶対に嫌だ……と、勝手なことを考える自分に自己嫌悪しつつ、やはり寝取られ属性はどうにも出来ないと独白。</p> <p>→kag002_14</p>
<p>kag002_14</p> <p>●場所 客間・夕</p> <p>●使用 CG H039e H039f H039g H039h</p>	<p>kag002_10 か kag002_13 の、どちらかから合流。</p> <p>ドライブから帰ってくる隆彦。愛実は富蔵邸についてすぐに風呂場へ向かっており、客間には隆彦しかいない。そこに権造がやって来る。どうしたのかと尋ねると、旦那様より預かりものがございます……と、うやうやしく一礼しながら隆彦に大きな茶封筒を手渡してくる。</p> <p>「愛実様がいらっしゃるところでは中を見ないように、とのことです」</p> <p>そんなことを言いながら権造はすぐに部屋を後にする。茶封筒の表には『朝7時過ぎから朝食直前まで』と書かれている。そのタイトルを目にした瞬間、脱衣所の前で愛実と出会ったことを思い返す隆彦。どくん——と、胸が鳴る。隆彦は震える手で封筒を開けると、中に入っていた紙を取り出す。どうやらA4光沢紙のようだ。</p> <p>「——あ」</p> <p>間抜けな声が漏れる。そこには愛しい愛妻が高画質のフルカラーで写し出されていた。自分ではない誰か——いや、写っている衣服から夫の父親とはっきり分かる人物の肉棒にひざまずいて奉仕している姿が。目を手で隠して恥らっている一枚目、羞恥に顔を真っ赤にしている二枚目、長太郎に頭を押さえつけられてイラマチオされているらしい三枚目、口内にたっぷりと精液を注ぎ込まれているらしい四枚目……自分にはしたことの無いフェラチオの様子が、初めから終わりまで連続写真になっている。最後にはご丁寧にお掃除フェラをしているらしい。</p> <p>（罪悪感なんかじゃ……無かったんだ）</p> <p>愛実が朝から妙に色っぽかった原因を知る。封筒には写真をプリントアウトしたもののほか、長太郎から隆彦への手紙が入っていた。“夫にもしたことの無いフェラチオをして、義父の朝勃ちを慰めてくれる、思いのほか出来た嫁だ”つまり愛実が朝自分より早く起きて洗面所へ向かう途中か何かに長太郎に捕まったのだろう。そして初めてのフェラチオを指導されたのだ。朝から、夫の父親のチンポを咥えさせられて牝の本能をくすぐられていたのだ。だからデートの最中に、夫とのセックスをねだったりした。父親だけが性欲を解消して、愛実はずっと欲求不満だったのだ。</p> <p>（罪悪感なんかじゃ……無かったんだ）</p> <p>もう一度同じ眩きを心の中でする。鍵付のブリーフケースに封筒をしまいながら、隆彦の胸の中に嫉妬の炎がメラメラと燃え上がる。そして自分だけがやられっぱなしでなるものかという強烈な対抗心が、胸の中に巻き起こる。長太郎が愛しい妻に手を出したなら、自分も同じように報復をしなくてははいけない。隆彦の頭の中に、彩花のあられもない姿が浮かんでは消える。</p> <p>→kag002_15へ</p>
<p>kag002_15</p> <p>●場所 客間・消灯 ↓ 廊下・夜 ↓ 彩花の部屋・消灯</p>	<p>～客間・消灯～</p> <p>二日目の夜。月明かりが差し込む部屋の中で瞳を開けている隆彦。隣に敷かれた布団では愛実が穏やかな寝息を立てている。今夜は長太郎が留守にしているので安心していうのもあるのだろうが、愛実に熟睡してもらうために権造に言って用意させた薬湯が利いているんだろうな、と隆彦は考える。子供の頃遠足の前の晩に目が覚めて眠れなかった時なんか飲んでいたもので、どんなに目がさえていても一発で熟睡してしまう優れものだ……と、そんなことを独白しながら隆彦は部屋をそっと抜け出す。</p> <p>～廊下・夜～</p>

	<p>まだ煌々と明かりを灯した提灯がところどころに吊り下げられた廊下を音を立てないように歩き、彩花の私室にまで向かう隆彦。その手には、屋敷に飾られていた狐面を持っている。ほどなくして彩花の部屋の前についた隆彦は、すう——と音を立てずに障子をあけて室内に滑り込む。</p> <p>～彩花の部屋・消灯～</p> <p>聞こえてくる寝息に誘われるようにして部屋の奥へゆっくりと進む隆彦。そこには薄く綿を入れた麻の夏布団の上で穏やかな寝顔をしている彩花がいる。隆彦はそんな彩花を見下ろして、そっと掛け布団を引き剥がす。彩花は白い肌襦袢だけを身につけて眠っており、はちきれそうな谷間やむっちりとした太ももが大胆にあらわになっている。ごくんと息を呑みながら、隆彦は彩花の顔に唇を寄せる。</p>
kag002_16h ●場所 彩花の部屋・消灯 ●使用 CG H060 H061 H062 H063 H064 H065 H066 H067 H068 H069	<p>「ん……む……う」仰向けに寝ている彩花をまたぐようにしてキスをする隆彦。首筋に、胸元に、キスマークをつけて長太郎に見せ付けるつもりでちゅうちゅうと吸い付く。彩花は眠りながらも、隆彦が肌を吸うたびに「んっ、んふっ……」と悩ましい吐息を漏らす。彩花のしっとりとした白磁のような肌を堪能したあとは、口内に舌を差し入れる隆彦。隆彦がめるりと口内を舐めるとそれに堪えるように舌を絡ませてくる。隆彦は興奮に息を荒くしながら、彩花の口の中をくちやくちやくとかけ混ぜる。</p> <p>軽く彩花の唇と舌をねぶった隆彦は、次に襦袢の前をはだけさせる。愛実よりも豊かな爆乳がまろびでてきて、隆彦は幼い頃からあこがれていた女性の丸出しの乳房に感動と興奮を覚えながら、まるで初めて女性の胸を触った子供のように、熱っぽく愛実の乳房を揉みしだく。眠っていても感じるのか、彩花は「ん……ん……」と小さく戸息を漏らしながら、ぷくんと小さな乳首を膨らませて、乳輪からわずかにせり出させる。彩花の乳房の感触をひとしきり堪能した隆彦は、いよいよ下半身へと手を伸ばす。</p> <p>襦袢を完全に開いて彩花の下半身も丸出しにさせる隆彦。瞳をつぶったままの彩花の眉根がぴくっと動いて、一瞬その全身が強張る。部屋に入った時に聞こえていた寝息はなりをひそめて、その代わり彩花の口からは熱っぽい吐息が漏れ出している。彩花は起きている……が、寝たふりをしていると隆彦は瞬時に理解する。起きて拒否されるならまだしも、寝たふりをしてくれるならむしろ好都合だと、隆彦は行儀よく揃っている彩花の両足に手を伸ばす。くちゅり。その付け根にある牝芯からは、わずかに蜜が染み出していて、隆彦の人差し指にぬかるみの感触を与える。年齢からは考えられないほどにそそとした性器に感動を覚えながら、隆彦はそこに顔をねじ込ませる。</p> <p>「ん……っ……んっ……」</p> <p>彩花は瞳を閉じながら、唇をきゅっと控えめに噛み締めて切なげな吐息のような喘ぎを漏らす。快感を堪えている彩花の姿にますます興奮して、隆彦はますますクンニに熱を入れる。彩花の悩ましい吐息はどんどん荒くなり、湿り気を増していき、閉じられていた足がゆっくりと開いて、車に轢かれた蛙のようにパカリとがに股に開いてしまう。</p> <p>「彩花さん……入れるよ？」</p> <p>隆彦の言葉に、彩音はいよいよ隠し通せないと思ったのか、快感にとろけた瞳を細く開く。</p> <p>「だめ……だめよ、隆彦さん……っ、それだけは絶対にだめ……わたしたち、母と息子なのよ？」</p> <p>「血は繋がってない」</p> <p>「分かってちょうだい……っ、今なら、今なら無かったことに出来るから……っ、お願い、お願いだから、普通の家族でいましょう……ね？」</p> <p>「それなら、家族じゃなきゃあ良いわけだ」</p> <p>「あ……ああ……っ！」</p> <p>布団の脇に置いていた狐面をかぶる隆彦。そんな隆彦を見て目を丸くする彩花。隆彦が本気であること、そしてかがち様遊ばせを知っていることに驚愕しながら、彩花はさらに言い募る。</p> <p>「愛実さん……っ、愛実さんに顔向け出来ないわ……っ、お願い隆彦さんっ、正気になって！」</p> <p>「僕は正気だよ。だから最愛の妻を父親に抱かれたままじゃ我慢出来ない。こっちもやりかえさないと」</p> <p>隆彦の言葉にハッとして「隆彦たちがいるあいだは普通の家族でいましょう」という約束が破られていたことを知る彩花。愛実は僕も彩花さんも何も知らないと思っているけど、と隆彦。親子でこんなこと絶対におかしいわとうろたえる彩花に隆彦は言う。「彩花さんが父さんと結婚した初めての夜、権造たちにあんな目に遭わされているのを見た時から、僕はずっとおかしくなっているのさ」「……彩花さんだって、本当はおかしくなっているんだろう？」素股の要領で彩花の割れ目をネチッネチッと擦りあげる隆彦は、彩花はだめだめと弱弱しく訴えながらも、隆彦が割れ目を擦るたびに尻をじりっじりっとして揺らす。彩花が音をあげるまでずっとこうすると言う隆彦に、彩花はきゅっと唇をつぐんで、意を決したように囁く。</p> <p>「……かがち様、お慰めします」</p> <p>彩花が唇から漏らした悩ましい言葉に、隆彦はごくんと息を呑みながら切っ先を膣口に当て直す。</p> <p>彩花に挿入する隆彦。彩花は声をあげないように口を嚙みながら、身体の横に置いた両手で布団の</p>

	<p>シーツをぎゅっとよじり快感を堪える。隆彦は彩花のきゅうきゅうと締め付けてくる膣とは違う、ねっとり絡み付いてくるような彩花の具合の良さに内心唸りながら、幼い頃あこがれていた女を抱く喜びと興奮に腰を律動させる。</p> <p>はじめは口を嚙んでいた彩花だが、時折どうしても我慢できないという色っぽい声が漏れはじめ、全身から滲み出す色香はますます濃厚になっていく。この女を征服したい。自分に屈服させたい。もっともっと感じさせたい。隆彦は自分がまるでやりたい盛りの男子学生にでもなったみたいに、動物のような腰使いで彩花の膣肉を何度も突き上げる。だめだめと華やかな声をあげる彩花。だめなら止めるとの言葉に止めるのも駄目と切ないあえぎを漏らす彩花の膣奥に、隆彦はたっぷりと精液を注ぎ込む。細く長く尾を引くような絶頂の悲鳴を響かせながら、彩花は隆彦の腰に足を回して自らの腰へと引き寄せる。まるで隆彦の精液を一滴も逃さないとも言うように。</p> <p>「別に毎晩とは言いません……気が向いた時に、かがち様を慰めて下さいよ。良いですか？」</p> <p>「……わかった、わかったわ……んっ……はぁ……はぁ……っ」</p> <p>満足した牝のつく吐息を漏らしながら、彩花はうっとり囁く。</p> <p>※このシーンでは隆彦も彩花も昔好きだったとかそういう台詞は口にしないようにお願いします。後々のシーンで使います。</p>
kag003_01 ●場所 客間・昼	<p>三日目の朝、客間で起床する隆彦。隣の布団には愛実が寝ている。今朝は長太郎に呼ばれてはいないようで、安心したような、ほんの少しだけ落胆したような複雑な気分。愛実の寝顔は安らかで少女のように可愛らしく、眺めているだけでどうしようもなく愛しさがこみ上げてしまう。反面、このあどけない顔をした愛妻がいざ夫以外の怒張を受け入れれば信じられないほど淫らに乱れるのだと思うと、すさまじく力の篋った朝立ちをしてしまう。</p> <p>(……最低だな。僕は)</p> <p>自分の性癖を満たすためだけに何も知らない妻をだましていることに、隆彦は勃起しながら自己嫌悪にさいなまれる。</p> <p>■選択肢発生 選択肢①だけど欲望には勝てない→kag003_01a 選択肢②それでも愛美を愛してる→kag003_01b</p>
Kag003_01a ●場所 客間・昼	<p>(でも、どんなに最低な願望でも……僕はそれに抗うことが出来ない)</p> <p>愛する妻を騙していることを自覚しながらも、自分の欲望を優先させてしまう、という独白。愛美への愛<<<自分の欲望、というテキストをお願いします。</p> <p>■ガチネトラレフラグ+1</p> <p>→kag003_01cへ</p>
Kag003_01b ●場所 客間・昼	<p>(それでも愛美を愛している気持ちに偽りは無いんだ……)</p> <p>妻を騙していることを自覚しながらも、でも自分の寝取られ願望は自分がどれほど妻を愛しているのか確認するためにしている節もある……と、ただ興奮を得るためだけではなく、妻の姿を見て愛を再確認しているのも少しはある、という独白。</p> <p>愛美への愛>>>自分の欲望、というテキストをお願いします。</p> <p>→kag003_01cへ</p>
Kag003_01c ●場所 客間・昼	<p>03_01aもしくは03_01bの独白を終えると、障子の向こう側から「おはようございます。おめざめでしょうか」と声をかけられる。声の主は権造で、長太郎と彩花は今朝は朝食を取らないそうなのでご希望でしたらこちらまでお食事をお運びします、と申し出てくる。隆彦はありがたく提案を受け入れて(顔でも洗ってこよう。戻ったら愛美を起こしてあげよう)と考える。</p>
kag003_02 ●場所 客間・昼	<p>「……やってくれたな」</p> <p>長太郎の部屋にて、憤怒の形相の長太郎と対峙している隆彦。隆彦は涼しい顔で「やりましたよ」と返す。お互い様でしょうとも続ける。</p> <p>「ああ、そうだな……お互いさまだ」</p> <p>愛実の部屋にも覗き穴があるのだろう。長太郎の目の前にあるノートPCには、昨夜の彩花の部屋での一部始終が動画として再生されている。隆彦は怒りながらも、その股間を恥ずかしいくらいに膨らませながらモニタを血走った目で凝視している。「お前のおかげで、今朝は食事を取らずにマスをかきまくるはめになったわ」と長太郎。長太郎も隆彦と同じく、妻を他人に抱かれた嫉妬と興奮に身を焦がしているのがはっきりと伝わってくる。「色々な男に抱かせたが、息子に妻を寝取られるのはまた格別だな。嫉妬と興奮で、頭がおかしくなってしまうそうだ」父と子で妻を寝取り寝取られしている自分たちは既に頭がおかしいと静かに思う隆彦だが何も言わない。そんな隆彦を見て、長太郎はニヤリと笑う。</p>

	<p>「お前が本気なのはよく分かった。残り数日は楽しいことになりそうだな？」</p> <p>お前の愛妻をより破廉恥に辱めてやる——と、長太郎の目が語る。この田舎に引っ込んでその淫靡な風習に浸り続けた父がどのような方法で愛実を辱めるのか、そう思うと隆彦もますます興奮せざるを得ない。そしてまた、夕方がやって来る。</p>
<p>kag003_03</p> <p>●場所 客間・夕</p>	<p>夕食を食べた後に部屋に戻る隆彦と愛実。浴衣姿の愛実は湯上りの肌を覚ますように、窓際で団扇片手に涼んでいる。昨夜は熟睡出来ていたようだし、朝は長太郎に呼び出されなかったからか、表情はだいぶん明るくなっている。</p> <p>「家のお風呂もここくらい広ければ良いんだけどね」</p> <p>「うふふ。でも家のお風呂は二人で入るとぎゅって出来て良いじゃないですか」</p> <p>「ははは。それで何度のぼせたか分からないよ。愛実を抱いてると時間を忘れて困る」</p> <p>「も、もう……隆彦さんたら……」</p> <p>恥ずかしいことを最初に言い出したのは自分だと言うのに恥ずかしそうにする愛実。実際にこの目で決定的な証拠を見ていなければ、この可愛い妻が自分の父親とセックスをしてはでにイって見せたなどとてもではないが信じられないだろう。愛らしく貞淑で子供っぽいところが少しだけあって……とにかく可愛い少女のような妻だと思っていた。でもそんな愛実も何食わぬ顔で夫に嘘がつける、自分にも嘘がつける大人の女なのだ……と、そんなことをぼんやりと考える隆彦。そしてその大人の女の妻を、今夜も思い切りあえがせてやりたい、とも。</p> <p>今夜の愛実の相手として思い浮かんだのは二人の人物。</p> <p>まず一人目は当然、長太郎。そして二人目は使用人の権造だ。</p> <p>長太郎に抱かせれば愛実の心を、ひいては隆彦の心を責めるようなことをしてくるだろう。権造はその巧みな性技で、自分には出来ないようなことを愛実にするかもしれない。</p> <p>どちらに話を持ちかけてみようか？</p> <p>■選択肢発生</p> <p>選択肢①長太郎に話を持ちかける→kag003_04</p> <p>選択肢②権造に話を持ちかける→kag003_07</p>
<p>kag003_04</p> <p>●場所 客間・消灯</p>	<p>※このシーンの愛実の音声は全部ひそひそ声。</p> <p>夜、布団に入り寝たふりをしている隆彦。時計の針はもうすぐ午前0時をさすところで、寝たふりを開始してからそろそろ一時間が経過する。そしてそろそろ長太郎との打ち合わせの時間である。愛実には背中を向ける格好で寝ている隆彦。愛実はまだ眠れないのか、浴衣を身にまとい、和風のベッドサイドランプを枕元に置いて本を読んでいる。時折ページをめくる音だけが響いている。</p> <p>そこにギィギィッと誰かが静かに廊下を歩く音がして、そしてその音が部屋の前で止まる。愛実が息を呑む気配が伝わってきて、隆彦も胸を高鳴らせる。</p> <p>「愛実さん、大事な話があるんだ。入っても良いかね？」</p> <p>長太郎の声が聞こえてくる。返事が出来ずに愛実が固まっていると、すうっと障子が静かに開く音が聞こえてくる。返事が無いので入らせてもらったよ、としれっと言う長太郎。愛実は硬い声で返す。「こ、こんな夜更けに、どうされたんですか？」愛実の当然の問いかけに、長太郎が言う。</p> <p>「男が夜に女の部屋に来ると言ったら、用件はひとつだろう？」</p> <p>「そ、そのお面……っ」</p> <p>愛実の声で、長太郎が面を見せ付けていることを理解する隆彦。長太郎はここがかち様遊ばせをするつもりなのだ。隆彦との打ち合わせ通り。</p> <p>「そ、そんなの出来ないに決まっています……帰って下さい。隆彦さんがいるんですよ……！」</p> <p>「大丈夫だよ。隆彦は絶対に起きない。眠る前に、権造の淹れた薬湯を飲んでいただろう？」</p> <p>あれにちよいと睡眠薬を忍ばせておいたから朝までグッスリだと長太郎。実際に隆彦が飲んだのは、眠気を少し飛ばす効果のある薬湯なのだが、愛実は信じたのか無言になってしまう。</p> <p>「で、でも無理です……隆彦さんのそばで、隆彦さんを裏切るなんてこと、絶対に出来ません……今夜は帰って下さい！」</p> <p>愛実の毅然とした言葉に愛情を感じる隆彦。だが長太郎がふふと楽しげに笑った次の瞬間、バサバサと地面に大量の紙が散らばるような音が響く。愛実が絶句する気配が伝わってくる。</p> <p>「一昨日の夜や昨日の朝の愛実さんがあまりに可愛らしく撮れていたものでね、お父上にも見せてあげようかと思うんだが……良いかね？」</p> <p>権造に抱かれる姿や長太郎へのフェラチオの様子をプリントアウトしたものを見せ付けられているらしい愛実が、「やめてください」と搾り出すように言う。愛実さんのお願いだけ一方的に聞けというのかい？と楽しげに言う長太郎。愛実はもう一度、搾り出すように言う。</p> <p>「……なんでも、なんでもしますから、やめてください」</p> <p>愛実の言葉にぐふふと笑うと、長太郎は言う。</p> <p>「そうかね？ それじゃあ、なんでもしてもらおうかね」</p>
kag003_05h	<p>※このシーンの愛実の音声は全部ひそひそ声。</p>

●場所
客間・消灯

●使用 CG
H070
H071
H072
H073
H074
H075

「くふっ……くふっ、ふっ……くっ……ふう……」

必死に快感をかみ殺す甘ったるい声が客間に響き、隆彦のうなじに時折愛実の吐息が吹き付けられる。愛実には背を向けている隆彦。その隆彦を見るような態勢で横になっている愛実。そして愛実の後ろから抱き着いて愛撫しているらしい長太郎。愛実と長太郎は側位の体勢（H050と同じ体勢）愛実には浴衣の前をはだけさせられ、胸も股間も丸出しになっている。

「親子三人川の字になって寝るのは良いなあ、愛実さん」

「くっ……ふう……」

くちゃっくちゃっくちゅっとリズムカルな粘着音が鳴る。長太郎は愛液まみれの指で愛実の膣肉を掻き混ぜながら、もう片手ではクリトリスに蜜をまぶすように優しく転がしている。

「愛実さんのぬかるみも『たまたまに良い』と泣いておるわ。ほれほれ。この辺もたまたまなかるう？」長太郎の太く節くれだった指が愛実の急所を責め立てる音は徐々に大きくなっていき、水っぽさを増していく。くちゃくちゃと控えめだった音は瞬く間に「ちゅぐっちゃぐっちゃちゅぐっちゃちゅぐっ！」と濁音を混ぜるようになり、背をそむけている隆彦にも分かるくらい濃密な牝の匂いが室内に漂い始める。ただ喘ぎを堪えるだけだった愛実の口からは時折甘い声のはっきりと漏れ始めて、すっかりと出来上がってしまっているのが分かる。

「愛実さん、見なさい。面を被ったぞ。かがち様には何とご挨拶するんだったかな？」

愛実「はあー……はあー……」とますます熱くなった吐息を隆彦に吹きつけながら、言う。

「……かがち様……お慰め……致します」

※ここまでの愛撫はあっさり目で良いです。

愛実には挿入してゆっくりとピストンを開始する長太郎。

「はああ……こんなっ……ゆっくり……っ」

愛実の声と、ぬちゃり、くちゃり、と遅い抽送音から、長太郎が焦らすような腰使いをしていることを隆彦も理解する。長太郎の一物の先端から根元までを味わわせるようなピストンで奥を突かれるたびに「んっ……ふ、んっ……ふ……」と息を詰まらせる愛実。その喘ぎや吐息が、気持ちよさそうにしつつもじれったそうな響きを持ち始めるのを隆彦は悔し勃起しながら聞いている。

「……お、お願いします……お義父さま……早く、終わらせてください……」

早く終わらせて欲しい。それがその言葉通りの意味ではなく、もっと強くして欲しいと言っているのは明白だった。隆彦は、自分がすぐ目の前にいるというのにも関わらず、父親との激しいセックスを愛実が望んだことに衝撃を受ける。長太郎も愛実が何を言いたいのか理解したのだろう、ねっとりと絡みつくようないやらしい言葉遣いで尋ねる。

「早く終わらせると言ってもなあ……わしは愛実さんのなかをじっくりと味わいたいんだ」

「それに早く終わらせるということは、激しくするということだ。万が一隆彦が目覚めてしまったら大変だろう？」

愛実には喘ぎ声をかみ殺しながら、でも、だって、と煮え切らない態度の長太郎にもどかしさを剥き出しにする。

「我慢……我慢しますから、声は我慢しますから……っ、お願いします、お願いします……」

「ふふふ、わしも鬼じゃあない。可愛い息子妻に必死にお願いされたら、断れん」

「愛実さん、言ってみなさい。隆彦の粗末なちんぽの代わりに、お義父様の立派なおちんぽ様をズボズボハメハメしまくって下さいとなあ」

「……なっ……ああ……そ、そんなことお……っ」

「言わんと切ないまんまだぞ。このまま一晚生殺しにしてやったって良いんだ。どうする？」

衣擦れがやみ、抽送音が止まり、愛実の深い呼吸だけが室内に響く。たっぷり十数秒の沈黙のあと、ごっくん、と驚くほど大きな喉を鳴らす音が聞こえてくる。そして、はあ、はあ、と切なげな吐息を漏らし続ける愛実の口から、諦めたようなため息が出る。言わないで欲しい。そんなひどいことは言わないで欲しいと、自分からこの状況を招いたくせに必死に隆彦は祈る。だが。

「た……隆彦さんの……隆彦さんの……ああ……隆彦さん……ご、ごめんなさい……隆彦さん……ごめんなさい……」

「隆彦さんの……そ、粗末な……チンポに代わって……」

「お義父様の……り、立派な、おちんぽ様を……ズボズボ、ハメハメ……しまくって……下さいい……っ！」

「ふんッ！」（長太郎

「はあッぐ！　ふうくふううッ！」

ぱちゅんッ、と肉と肉が打ち合わせられる音が響いた瞬間、愛実が息を詰ませたような声を出す。長太郎は愛実の言葉に興奮をあおられたのか、フンフンと鼻息を荒くしてパチンパチンと愛実の尻に股間を叩きつける。自分のすぐ後ろで父親と愛する妻がケモノのようにセックスしている。かつてない嫉妬と興奮に、隆彦は今にも叫びだしそうになるのを必死に堪えて歯を噛み締める。

「このエロ嫁めッ、義父のチンポにちゅうちゅう吸い付くエロメコめ！　成敗してくれるわ！」

盛りきった父親の声。そして、口を手で覆いながらも必死に快感をかみ殺す愛妻の声が室内に響き渡る。長太郎は愛実には、隆彦と自分どちらとのセックスが気持ち良いのかと、執拗に腰を叩きつけながら尋ねる。そんなこと言えない、言えませんが声はひそめながら必死に繰り返す愛実だが、長太郎の「言わんとまたお預けにするぞっ、言えっ、言えっ、言えっ！」とねちっこく繰り返される言葉と腰使いに、観念したように言う。

「お義父さまっ、お義父さまですっ……お義父さまのセックスのほうが、お上手……ですう！」

	<p>「くくっ、わしのほうがお上手か？ 隆彦はへたくそか？」</p> <p>「下手じゃないですっ、下手じゃないですけど……っ、ああっ、ああっ……んんっ」</p> <p>「わしのほうが単純にうまいというわけか。わしのチンポのほうが良いのか？」</p> <p>「いいっ……いいですっ……いいです……隆彦さんごめんなさいっ……お義父様のおちんぽっ……いいところっ、いいところに当たるのっ……隆彦さんじゃ当たらないところっ、来るうッ」</p> <p>愛実の言葉に頭を殴られたような衝撃を受ける隆彦。思わず射精しそうになるのを堪える。</p> <p>ヒィヒィとか細い悲鳴をあげる愛実。その堪えた喘ぎがいよいよ逼迫する。</p> <p>長太郎は長太郎で、いよいよ射精が近いのがまるわかりの息遣いをしながら、まるで呪文でも唱えるように「出すぞ、出すぞ、出すぞっ……たっぷりと注いでやるっ、このエロメコにたっぷりと注ぎ込んでやるっ、たっぷりと注いで……おおっ、おおっ……」と小声で繰り返しながら、愛実に言う。「オメコが締まるっ、いくのか、愛実さん、行くのか？」もはや理性も擦り切れる直前なのか愛実は素直に応える。「イきますっ……イきます……っ」とうわごとのように繰り返す愛実に、長太郎は最後の仕上げとばかりに言う。いく時は隆彦に謝るんだぞ——と。</p> <p>「ああああっ、いくいくいくいくいくっ、隆彦さんごめんなさいっ……いくッ、いきますっ、いくううううううううううう……っ！」「いっ、くふうううううううううう……っ！」悲鳴をあげそうになるのを必死に堪えながら、嗚咽のようなイキ声を漏らす愛実。長太郎も「おっおっ、おっ、おっ……っ」と生臭い呻き声をあげる。激しい衣擦れの音や、ばちっばちっばちっ和小気味よく響いていた抽送音が止まって、背中を向けている隆彦にも分かる。二人は今、夫婦のように密着して、膣内射精の快感に酔いしれているのだ……と。</p>
kag003_06 ●場所 客間・消灯	<p>長太郎が汚れたから片付けたほうが良いだろうと言って、シーツと愛実を抱えて部屋を出て行った後、客間の布団のなかで猿のようにオナニーをし終え、息を荒くつきながら悶々としている隆彦。</p> <p>（はたしてシーツを片付けるだけで済むだろうか？）</p> <p>隆彦の頭に当然の疑問が浮かぶ。あの父親のことだ、身体を流してやるなどと言って愛実を連れて風呂に入り、そのまま二回戦をはじめるのではないだろうか？ 見に行きたい。でも見に行ったらすぐに愛実が帰ってきたら、自分が起きていたと気付くのではないか？ 結果、部屋を出ることも出来ず、かと言って眠ることも出来ずに隆彦は寝たふりをし続ける。</p> <p>——そして愛実が帰ってきたのは二時間後。シーツを片付けるだけでそんなに時間がかかるわけはなく、おそらく隆彦の妄想は正しいことを時計の針が証明していた。シーツを直しているのだろう。衣擦れの音が響いて、そして愛実が布団にもぐりこむ音が聞こえてくる。そして最後に</p> <p>「……こんなの、おかしくなってしまうす」</p> <p>どこかうっとりとした小さな囁きが、隆彦の胸を強く締め付ける。</p> <p>→kag004_01へ</p>
kag003_07 ●場所 客間・夜	<p>客間を覗くことが出来る隠し通路に入り、室内を覗いている隆彦。隆彦は古い友人に会いに行ったということになっており、室内には愛実が一人、窓際で涼みながら本を読んでいる。</p> <p>「こんばんは。愛実様はいらっしゃいますでしょうか？」</p> <p>そこに打ち合わせどおり、廊下から権造の声が聞こえる。愛実は一瞬返事をするかしまいか迷った顔をするのだが、素直に返事をする。と、権造が風呂敷包みを片手に部屋に入ってくる。どうしたのかと尋ねる愛実に、権造は「旦那様のお申し付けで、愛実様に按摩を施させて頂きに参りました」</p> <p>と語る。権造と二人きりということが何よりも嫌なのだろう、愛実は遠慮して帰って貰おうとするのだが、権造は「按摩を受けて下さらないと旦那様に怒られてしまいます。ご遠慮はいりませんので何卒……」と、愛実に頼み込む。頼み込みながら「それに……旦那様の善意を不要とおっしゃられるのは、愛実様にも余り良い結果にはならないかと思いますが……」と、遠まわしに愛実を脅す。愛実は権造の言葉に少しおびえながらも、その申し出を受けることにする。</p> <p>「それでは下着は身につけたままで結構ですので、これにお着替えください」と権造は愛実に風呂敷包みを渡す。中に入っているのは薄く透けている肌襦袢で、愛実が肌が透けて見えるその衣装に難色を示しつつも、権造に後ろを向いてくれるように頼むと、諦めたようにそれに着替える。</p>
kag003_08h ●場所 客間・夜 ●使用 CG H080 H081 H082 H083 H084 H085 H086	<p>「んっ……ふっ……ん……」</p> <p>「そのまま楽にしてください。大分節々が張っておいでだ」</p> <p>「は、はい……分かり……ました……」</p> <p>布団の上でうつぶせになり、気持ちよさそうな声をあげている愛実。権造は無骨な手を器用に使い、まずは愛実の肩や背中を揉んでいる。ただのマッサージであることに安心したのか、強張りは大分取れて権造の手を受け入れている。そんな様子を、隆彦は引き続き覗き穴から見ている。</p> <p>「……腰も、随分とこっておりますね」</p> <p>「……んっ……そ、そう……ですか……」</p> <p>権造の手が下半身に滑り降りて、一瞬ビクリと身体をこわばらせる愛実。そんな愛実を安心させるように権造は言う。</p> <p>「ご安心を。旦那様のお申し付け通り、あくまでマッサージしか致しませんので」</p> <p>「……んっ……く……」</p>

H087
H088
H089
H089a

「それにしても、愛実様は良いお尻をしていらっしゃる。これなら隆彦坊ちゃんの子供を何人でも産めるでしょうね」

「ふっ……くっ……うっ……んっ……」

腰を、そして尻をグニグニと揉み解しながら言う権造。愛実は一瞬何か言いかけながらもおとなしく黙り、権造のなすがままにされる。愛実の吐息が、妙になまめかしくなっていく。

「少し変わった部位を揉み解しますが、大人しくしていて下さいまし」

「きゃっ……そ、そこはっ……そこっ……はっ……」

「太ももの付け根を揉み解すと、リンパの通りが良くなります。じっくり……按摩しましょう」

「そ……う、なんです……か……？ んっ……あっ……んっ……」

権造の手がさらに下に向かう。節くれだった指が下半身の白襦袢をはだけたかと思うと、愛実の太ももの付け根をぐいぐいと——秘部には触れないように指圧し、揉みしだき始める。そこは確かに太ももの付け根であり、恥肉を直接愛撫されているわけではないので、愛実は何も言えないまま権造の指を受け入れる。初めは恥ずかしそうな表情をしていた愛実が、見る間に気持ちよさそうな顔になっていく。はあっ……はあっ……はあっ……はあっ——と、熱い吐息と甘い声を漏らすだけになってしまう。

「はあっ……はあっ……はあっ……これ、なんか……っ、なんか……っ」

何かが変だ……と、言いたそうにする愛実。その顔が語っている。気持ち良過ぎると。直接愛撫されているわけでもないのに、女としての快感を得てしまっている。そういう顔をしている。さもあらん。権造が愛実にほどこしているのは、性感マッサージなのだ。初めはとじていた愛実の足がもどかしそうにシーツの上でじりじりと揺れ、ゆっくりゆっくりと開いていく。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……あああ……」

どうしようも出来ないという声を出す愛実。浅く上下する尻。その足が、カエルのようにばかりと開く。下着に濃い染みがはっきりと浮かんて、肉溝を浮かび上がらせている。そんな愛実の姿に明らかに股間を膨らませながら、権造は切り出す。

「……下着の下を直接マッサージすると、もっと美容と健康に良いマッサージが出来ますが、どうしますか？」

「……」

手を止めて尋ねる権造。愛実は瞳を泳がせながらも、明らかに物足りないという顔をしている。愛実の葛藤を見透かしたように、権造はさらに続けて言う。

「ただのマッサージですよ」

熱にうなされたような顔をした愛実は、ぼそりと呟く。ごめんなさいと。それが隆彦への謝罪であることは明白だった。そして愛実が続けて言う。

「……マッサージ、お願いします」

「かしこまりました」

権造は愛実の下着を器用に抜き取ると、そのまま右手を膣穴に、左手をクリトリスへと運ぶ。

ちゃぐっ、ちゃぐっ、ちゅぐっ、ちゅぐっ、ちゅぐっ！

既に洪水状態だった膣肉を掻き混ぜられ、クリトリスをこね回され、愛実の口からうあああ……とどうしようも出来ないという声が漏れる。うああっ、あああっ、と声にならない声を漏らす愛実の尻がクイックイッと上下に振られ、左右にもじつき、洪水のようにシーツに愛液がたれ落ちていく。愛実の口が小さく動く。

「だめだめだめだめだめ……えっ、だっ……ああっ、ンあああああっ、あっ、ああああ～～～ツ」

愛実の尻がぐいと持ち上がったかと思うと、ぴゅっ、と透明な飛沫が噴き出す。飛沫は次々と、連続してあふれ出して権造の指や身体を汚し、シーツにお漏らしのような染みを作る。悲鳴をあげるようなことはなく、どうしていいか分からないという声で、愛実はいき声のようなイキ声を低く響かせる。

「あっ、あゝ あ……ツ、はあうっ、あゝ ああ……っ」

濁点交じりの声でアクメの余韻に浸る愛実。しずくまみれの陰毛がそよぐそのそばで、膣肉が物干しようにひくついている。そんな光景を見ながら、権造が言う。

「それでは仕上げに、愛実様のおめこの奥を按摩して差し上げましょう」

愛実が何か言うよりも早く、黒光りする怒張を一息に奥までねじ込む権造。愛実はもうろくに言葉も出せずに、ただただ快感にとろけた声をあげる。隆彦さん、ごめんなさい、ごめんなさいと言いながら自分から尻を揺らして、貪欲に快感を貪ろうとする。初めはねっとりと愛実の膣肉を堪能していた権造も、パンッパンッパンッパンッと炸裂音じみた音を鳴らしながらハードなピストンを繰り出して愛実をよがらせる。そしてそのまま、仕上げをして差し上げますよ、と嘯きながら思い切り膣内へと射精する。性感マッサージで快楽を高められた愛実は、獣のようなアクメ声をあげる。

「それでは、またマッサージが必要でしたらおよび下さい。いつでも参りますので……」

衣服を整えて部屋を後にする権造。愛実は布団の上でうつぶせになり、がに股の体勢のまま、膣穴から注ぎ込まれた精液を「ぶぶッ、ぶびッ、ぶびびッ」と下品なマン尻交じりで逆流させている。

<p>kag003_09</p> <p>●場所 客間・夜</p>	<p>（愛実……あんなっ、動物みたいな顔をして、声をあげて……下品な音を鳴らして、僕のじゃあない精液を逆流させて……っ、ううっ！）</p> <p>黄ばみがかった精液を膣から逆流させて失神している愛実の姿に、覗き穴から一部始終を覗きつつオナニーに耽っていた隆彦も唸りながら射精する。そんな隆彦の見つめる先で、愛実がとろけきった声で呟く。</p> <p>「ごめんなさいい……隆彦……さあん……」</p> <p>自分以外の誰かに抱かれる快感を、愛実が急速に受け入れ始めていることを隆彦は理解する。</p> <p>→kag004_02へ</p>
<p>kag004_01</p> <p>●場所 客間・昼</p>	<p>※前夜愛実を長太郎に抱かせた場合、権造に抱かせた場合、両方ともこのシーンに合流しますので、どちらでも通用するような書き方をお願いします。</p> <p>実家に来て四日目の朝。じっとりと寝汗を浮かべながら目を覚ました隆彦は、まず一番初めに横を見る。隣の布団では愛実が穏やかな寝顔を浮かべてねている。だが愛実の寝姿はただ愛らしいだけではなく、ただそうしているだけで濃厚な牝の色香がじっとりと滲み出している。たった四日で愛しい妻が作り変えられている。ほかの男の——それも実の父親の手によって。そんな事実には隆彦は今日も朝から黒い興奮を隠せない。</p>
<p>kag004_02</p>	<p>広間にて朝食を取っている隆彦、長太郎、愛実、彩花。</p> <p>彩花も愛実も、お互いの夫を交換して抱かれたことなど微塵も感じさせない、和やかな雰囲気会で会話をかわしている。彩花はまだしも、愛実までまるで何事も無かったかのように長太郎と会話しているのを見て（ああ……愛実もやっぱり女なんだな）と、そのしたたかな一面に奇妙に感心してしまう。そして、長太郎や権造とかがち様遊ばせをすることが愛実のなかで「納得したこと」になっているのを感じて、隆彦は胸が締め付けられる。恐らく愛実はちょっとやそっとのことでは抵抗もせずに受け入れるのだろう。これは仕方が無いことだと自分に言い聞かせて、仕方が無いことだから良いのだ、と信じられないくらい淫らな顔で喘ぐのだろう。そんな確信が隆彦を嫉妬でいっぱいにする。それでも表面上は完璧に平静を装って食事を取っていると、長太郎がそうそうと口を開く。</p> <p>「折角実家に来ているのだからゆっくりしてくれ——と言いたいところなのだが、一つ頼まれてくれんか？」</p> <p>家の中の大抵のことは権造がこなしてくれるのだが、この時期は何かと忙しいので免許を持っている隆彦に家の中のことを手伝って欲しいのだと言う。“老人会の主催する暑気払いの酒宴用に何か良い肴がないか、近所の魚屋に行く”か“盆踊りのやぐら設営をしている若衆に差し入れを持っていく”かのどちらかを選んでくれ、と言われる。</p> <p>■選択肢発生 魚屋について詳しく聞く→kag004_03 差し入れについて詳しく聞く→kag004_05</p>
<p>kag004_03</p> <p>●場所 広間・昼</p>	<p>魚屋について聞くことにする隆彦。山一つ超えればすぐ日本海が広がっており、近場には大きな河川や湖もある白縄町は魚介類も豊富である。白縄町の老人会では夏の盛りを乗り切るため、カガチ様へ地酒と旬の食べ物を貢ぐという建前で暑気払いの酒宴を開いているのだという。富蔵家の長男として帰省したわけなのだから、いつも鮮魚を運ばせている馴染みの魚屋さんへ挨拶の意味を込めて顔を出し、老人会に出す魚で良いものがあれば聞いてきなさい——という。代金は後で権造に運ばせるので注文をしてくるだけで良いという。</p> <p>「……とは言っても事前にある程度まとめて注文はしてあるので、今日特別に入っているものがあれば追加でといったところだな」「家にいても暇だろうし、愛実さんとドライブがてら行って来なさい。車は好きなのを使って良い」</p> <p>それじゃあさうしようかと隆彦。愛実も家にいるよりはと思ったのか、喜んでお付き合いしますと賛成する。</p>
<p>kag004_04</p> <p>●場所 田舎道・昼 ↓ 街中・昼</p>	<p>車を走らせて、白縄町の山のほうへと向かう隆彦と愛実。来る時に利用した駅があり、その周辺は温泉街として発達している。人口も農村部より多く、商店街には色々な店が並んでいる。そんな商店街の一角に、隆彦に教えられた魚屋がある。</p> <p>「どうも、富蔵家の者ですが」</p> <p>話しかけると「どうも若旦那」と店主。愛想の良い店主はにこやかに微笑みながら老人会のための魚は準備万端整っているので時間になれば配達致しますとのこと。事前に頼んでいるものの他に何か良いものがないかと尋ねると、店主はものめずらしげに辺りを見回している愛実に、ほんの一瞬だけチラリと好色そうな視線を走らせる。獣が、得物を見る視線を。</p> <p>（ああこの男も自分の妻に欲情しているのだ……）</p> <p>（いや、もしかしたら、機会があれば愛実を辱めるように言われているのかもしれない）</p>

	<p>と、興奮する隆彦に魚屋は言う。では地物のうなぎなんて如何でしょうか？ 獲れたてピチピチで活きの良い立派な天然うなぎが入ってましてね。こいつを食べれば精のつくこと間違いなし、爺様の寿命もまあ一週間くらいは伸びるかもしれませんと威勢の良い口上で言う魚屋に、それじゃあそれも届けて下さいと隆彦。ヘイ毎度！と魚屋。注文を終えて帰ることに。</p> <p>■共有フラグ+1</p> <p>→kag004_07へ</p>
kag004_05 ●場所 広間・昼	<p>差し入れについて聞くことにする隆彦。話は簡単で町の酒屋に行って飲み物を受け取ってそれを神社まで運び、やぐらを設営している若い衆に配って欲しい。昼食のお重も用意してあるのでそれと一緒に頼むということらしかった。</p> <p>「お屋前に家を出れば丁度良いだろう。ドライブがてら、愛実さんと一緒に行くと良い」</p> <p>それじゃあそうしようかと隆彦。愛実も家にいるよりはと思ったのか、喜んでお付き合いしますと賛成する。</p>
kag004_06 ●場所 神社・昼	<p>「ここみたいだね」 「そうですね」</p> <p>外出したことで少し気分の晴れた顔をしている愛実と共に車を降りる隆彦。実家から持ち出してきた台車に飲み物の入ったクーラーボックスを積み、境内を進んでいく。やぐらの周りで忙しげに作業をしている男達に声をかける隆彦。富蔵家から差し入れがあると聞いて歓声があがる。木陰にて、飲み物や食事を配る隆彦と愛実。「ありがたいことです。この村がやっていけるのも富蔵様のお陰ですよ」と感謝される。だが一見爽やかな笑顔を浮かべている男達が、時折獣欲に満ちた目で愛実を見ていることに隆彦は気付く。若く逞しく荒々しい男達に輪姦される愛実の姿が一瞬脳裏に浮かんで、隆彦はその余りの興奮にくらりと立ちくらみを起こしそうになる……が、周りには気付かれない。</p> <p>「へえ、お二人は彦太市にお住まいなんですか。実は僕もなんですよ！」 今は帰省しているのだが普段は彦太市の大学に通っているという若い大学生・須藤礼次（すどう れいじ）と出会う。いかにも今時の若者といった軽い空気の礼次と世間話をするのだが、礼次もやはりその時々で愛実を値踏みするような目をしている。愛実がどんな男から見ても魅力的なのだという事実を誇らしく思いつつも、それはどんな男からも狙われていて、チャンスがあれば抱かれてしまうかもしれないということなのだ……と、収まりかけた興奮をじわじわと滾らせる隆彦。機会がありましたらまたお話ししようと二人に言う礼次に別れの挨拶をして、二人は車へと戻っていく。</p> <p>■玲人フラグ+1</p> <p>→kag004_07へ</p>
kag004_07 ●場所 田舎道・夕	<p>長太郎の使いを終えて富蔵家へと戻る二人。魚屋に行った場合も、差し入れに行った場合も、どちらもここに合流するので『長太郎の使いを終えた』という書き方にして、どちらから来た場合でも違和感の無いようにしてください。</p> <p>夕焼けに染まる田舎道を車で走る隆彦と愛実。道沿いにぼつぼつと点在している提灯に火がとまり、ぼうつとした灯りが浮かび上がる。そんな光景を見ながら愛実が言う。 「……幻想的っていうのが、ぴったりな風景ですね」 「そうだね」 「……日が沈んで、ああやって提灯に火がつけば、まるで別の世界に迷い込んでしまったみたいだね」 別の世界。日常ではない世界。かがち様に支配されている世界。だから淫らな自分になっても良いのだと、愛実はその自分に言い訳しているようだった。その証拠に窓の外を見つめている愛実の、そのうなぎがほんのりと色づいている。肌が上気している。嫌だ嫌だと言いつつも、今夜は何をされてしまうのか——と、期待しているのだ。そのあまりの艶めかしさに隆彦は何も言えず、ぐくりと息を呑むことしか出来ないでいると、愛実がぼつりと漏らす。 「変なこと、言っちゃいましたね」 「……いや、言いたいことは良く分かるよ」 隆彦だって愛実の言いたいことは良く分かる。あの提灯に火がつけば、愛しい妻が自分ではない誰かに抱かれる時間の、淫夢が形になったような世界に紛れ込んでしまうのだ。今ごろ富蔵家では、愛実をどのように陵辱してやろうかと考えているケダモノが、てぐすねを引いて待っている。</p> <p>●フラグ分岐 共有フラグが1の場合→kag004_08 共有フラグが0の場合→kga004_23</p>

<p>kag004_08</p> <p>●場所 客間・夜</p>	<p>使いを終えて客間に戻り、一息ついている隆彦と愛実。するとすぐに長太郎がやって来る。 「戻ったばかりのところを悪いが、今夜は愛実さんに少し手伝って欲しいことがあるんだがね」にこやかな笑顔で切り出す長太郎。その笑顔の裏にはケモノの顔が覗いていることを知りながら、隆彦は何も知らない善良な夫を演じる。 「——ということらしいんだけど、愛実、大丈夫かい。疲れていないかい？」 隆彦の問いかけに「家事も何もしていませんから疲れなんて全然」とにこりと微笑む愛実。長太郎は「今から公民館で老人会の集まりがあるんだが、そこに来て欲しくてね」と言う。手伝いが必要なら僕も向かいましょうか？と形だけでも尋ねる隆彦に、長太郎は「帰りは遅くなってしまうと思うので、隆彦は家で留守番をしてくれないか。彩花が一人だと、何か男手の必要な時に難儀すると思うのでな」と伝える。それはその言葉通りの意味ではなく「お前と彩花はこれから家で二人きりになるのだ」——という事実を強調したかったのだと分かる。あまり遅くならんようにするからなと言うと、長太郎は愛実を連れて外へと出て行く。 彩花と二人きりという状況は魅力的だが、老人会の会場で愛実を連れて行って一体何をする気なのかと考えるだけで隆彦の胸は嫌な音を立てて軋む。ああどうすればいいんだと悩む隆彦は……</p> <p>■選択肢発生 選択肢①公民館を覗き見る→kag004_09 選択肢②彩花と二人きりに→kag004_13</p>
<p>kag004_09</p> <p>●場所 田舎道・夜</p>	<p>一目見て自分だと気付かれないように着替えて、天狗面を片手に持ち、公民館へと向かう隆彦。富蔵家からそれほど距離は離れておらず、程なくして田んぼのど真ん中にある茅葺屋根の建物に到着する。入り口に大きな提灯が飾ってある公民館からは大勢の男の下品な笑い声と、それから女の甘い悲鳴が聞こえてくる。聞き覚えのある女性の声に息を呑むと、隆彦は面をかぶって公民館へと足を踏み入れる。</p> <p>■共有フラグ＋１ ■ガチネトラレフラグ＋１</p>
<p>kag004_10h</p> <p>●場所 公民館・夜 (背景は無し。内装は広間と同様に大きな和室)</p> <p>●使用 CG H090 H091 H092 H093 H094 H095 H096</p> <p>093 と 094 を交互に使用して、うなぎが深く潜り込んだり排泄されたりという演出をして下さい。</p>	<p>※長太郎は余り前に出ずに、老人たちに愛実を好きなようにさせている、というシーンです。</p> <p>「ひっいいい……やっ、だめっ、だめえっ！ なにっ、なんですかこれっ、ひいいっ！」 おびえた悲鳴をあげる愛実。愛実が皮製の目隠しをさせられ、ギロチンを縦にしたような木製の拘束台に頭と手足を固定されて（参考資料：H090 拘束台サンプル.jpg）M字開脚の姿勢で、奉納という札の貼られた巨大な金魚鉢に入れられている。拘束台は丸く、金魚鉢の蓋にピッタリなサイズ。その金魚鉢の中には大量のうなぎが投入されており、うなぎは必死になって愛実の膣やアナルに向かって頭をぐりぐりと押し付けている。 「何か分からんかね？ 屋に魚屋で仕入れてもらったウナギだよ。食べるのではなくこういう風に使うと、わしら年寄りでも随分と精が出るでな」「爺さん、精が出るの意味が違うだろうが」下品な笑いに包まれる公民館。そんな中、愛実が膣やアナルに頭を押し付けてくるうなぎから逃げようと、自由になる尻を必死になって前後左右に振る。酒を入れた熱めの湯の中に女を入れて、その中にうなぎを入れる——これも古くから伝わる、かがち様をお慰めする神事であ、とニヤつく老人。うなぎは少しでも涼しい場所を探そうと、必死に女の中へ潜り込もうとしているらしい。激しくうなぎに頭を押し付けられる愛実、時折悲鳴ではなく、感じた声を漏らしてしまっている。 「さっきおめえさんに飲んで貰ったのは、この辺りに昔から伝わる薬湯であ……薄めねばお婆こでも潮を噴いて果てるような代物よ。うなぎのぬるぬるが堪らなくなってきたじゃろ？」 こんなのおかしい、幾らなんでも狂っていますと悲鳴をあげる愛実だが、その声はますます甘くなっていく。周りの老人たちは愛実を「ほれほれ、もっと必死になって、猿みたいに腰を振らんとうなぎが入るぞ」と囁き立て、げらげらと笑いながら酒を飲んでいる。鼻水をたらしながら腰を振る愛実だが、いよいようなぎが膣口とアナルに切っ先を押し当てて、そして次の瞬間、ずいゆッと頭をねじ込みにかかる。 「っひひひひっ！ だめだめだめだめだめえっ！」 愛実の抵抗もむなしく、ずぬぬっと、頭を埋め込んで尻尾をビチビチと振るわせるウナギ、愛実の膣もアナルもよほど締め付けがいいのだろう、うなぎはなかなか潜り込めない。アナルにいたっては排泄の要領でうなぎを捻り出し、押し戻された分をうなぎが進み、また排泄し……と繰り返し、その異様な行為に、愛実はおかしくなる」と叫びながら未曾有の快感に悶えている。膣とアナルからあふれたうなぎはお湯とアルコールに狂ったように暴れて、愛実のクリトリスやヘソや脇や乳首や……愛実のありとあらゆる性感帯を這いずり、愛実をさらに責め立てる。愛実はまだセックスでは到底味わえない異形の快楽に困惑をむき出しにしながらも、とうとう白目を向いて絶頂の声をあげる。ひとしきりケモノのような声をあげた愛実、くたりとペロを出して失神する。その膣とアナルに入ってたうなぎが、ビクビクと痙攣して動かなくなる。実際には愛実の締め付けだけが原因ではないのだが、周りの老人たちは「とんだ助平穴だ、うなぎを絞め殺しおったわ！」と下品な笑いを響かせる。そして老人のうちの一人が言う。 「これはわしらのうなぎも絞め殺してもらわんと、収まりがつかんのう」</p>
<p>kag004_11h</p>	<p>「ああッ、だめっ、これすごいっ、これすごいですっ、これっ、すごひい……っ」</p>

<p>●場所 公民館・夜 （背景は無し。内装は 広間と同様に大きな和 室）</p> <p>●使用 CG H100 H101 H102 H103 H104</p>	<p>火男の面をつけて全裸で畳に寝そべっている太り気味の老人。その勃起した怒張の上に同じく目隠し＋全裸でまたがり、腰をくなりくなり振りがら背面騎乗位の愛実。すごいすごいとうわごとのように言っている愛実の瞳からは理性がごっそりと抜け落ちて、ただただ快感をむさぼっている。愛実の周りには順番待ちの老人たちが山ほどおり、隆彦は色に狂うという表現がびったりの様子な愛実を見ながら、周りの老人たちに混じって裸になり、怒張をシゴいている。</p> <p>「年を取ると腰を動かすのが億劫になってなあ、若い女の尻を眺めながらするのが一番じゃわ」愛実の下になっている老人は愛実の尻をいやらしく撫でさすり、愛実に良い声をあげさせる。そして「おめこだけ使って全員の分を抜くのは時間が掛かりすぎるぞ？」と自らも腰を突き上げながら言う。落とした尻を老人とは思えない怒張が貫く快感に酔いしれながら、愛実は甘い吐息混じりに言う。「おくちっ……おくちもっ、いいですから……どなたか……っ」愛実の申し出に、老人たちはヒヒヒといやらしい笑みを漏らす。一人の老人が、それじゃあ遠慮なくと愛実の顔の前に怒張を差し出す。はじめは喘ぎ喘ぎしながらぺろぺろと老人の怒張を舐める愛実。フェラをしてもらっている老人は絶頂が近づいてくると愛実の顔を押しえつけてイラマチオに移行し、愛実の下の人にも激しく愛実を下から突き上げる。愛実は怒張をねじ込まれたまま、くぐもった喘ぎを漏らす。そして口を犯している老人と膣を犯している老人が、同時に射精する。その後、血走った目でそれを見てオナニーしていた老人たちと隆彦も射精して、愛実の全身に精液をぶちまける。精液を浴びて絶頂に肢体をびくつかせる愛実を見て、下になっている老人がニヤつきながら言う。「まだまだ夜は長い。たっぷりと楽しませてもらうぞ」</p>
<p>kag004_12</p> <p>●場所 公民館・夜 （背景は無し。内装は 広間と同様に大きな和 室）</p> <p>※黒背景か、差分で輪 姦事後の CG を作成しま す。</p>	<p>「あっ……う……あ……」</p> <p>満足した老人たちに解放され、精液まみれになって床に転がり、膣からどろりと老人たちの精液を逆流させて失神している愛実。そんな愛実を見下ろしてかつてない興奮にひたる隆彦。長太郎や権造が愛実を女として扱うセックスとは別の、愛する妻がただの性欲処理道具にされる興奮。そんな黒い興奮と、怒り、嫉妬、抑えきれない感情に悶えていると、公民館の端にいた長太郎が隆彦を見ていることに気付く。</p> <p>“お前の愛する妻を汚しつくしてやったぞ”</p> <p>と、目で語る長太郎。隆彦は更に胸に渦巻く感情を強くしながらも、公民館を後にする。</p> <p>→kag005_01へ</p>
<p>kag004_13</p> <p>●場所 廊下・夜 ↓ 風呂場・夜</p>	<p>家に残り、彩花と二人きりという状況を利用することにする隆彦。どうしてやろうかと考えながら廊下を歩いていると、風呂場へ向かうらしく洗面道具を持っている彩花とばったり出くわす。二日目の夜のことを思い出すのだろう。二人きりだとどんな顔をして良いのか分からない、という表情をしつつ頬を薄赤くして俯きがちな彩花に“愛実と長太郎が遅くまで家を開けるので今夜は二人きりである”“だから男手が必要なことがあれば遠慮なく申し出て欲しい”と隆彦は申し出る。そして何とは無しに切り出す。</p> <p>「これからお風呂ですか？」</p> <p>「え、ええ……そうなの」</p> <p>「僕もこれから頂こうと思っていたところなんです」</p> <p>「あら、そうだったのね。それじゃあわたしは後で……」</p> <p>「はは。何を言ってるんですか。親子なんだから一緒に入っても問題無いでしょう？ 久方ぶりの帰省なんです、親孝行に背中を流すくらいはさせてもらわないと」</p> <p>笑顔で言う隆彦に、でも……と困惑する彩花。困惑しながらも、その瞳に一瞬、義母ではなく女の色が浮かんできたことを隆彦は見逃さない。そのまま彩花の手を引いて、風呂場へと向かう。</p> <p>～風呂場・夜～</p> <p>言葉少なな彩花の背中を流す隆彦。生まれたままの彩花の姿をじっくり、至近距離で改めてみて、その瑞々しさや艶めかしさにゴクンと息を呑み、ヘソに反り返るように勃起する。</p> <p>前は どうします？ と尋ねる隆彦に、自分でするからと彩花。彩花がボディスポンジで肌を撫でるのを一通り見守ると隆彦も切り出す。</p> <p>「僕の背中も流して貰えませんか？」</p> <p>少し迷いながらも隆彦の背中を擦り始める彩花。その視線がちらちらと勃起に注がれているのを自覚しつつ、背に湯をかけられながら隆彦は言う。</p> <p>「前も、きちんとお願いします」</p> <p>「……っ」</p> <p>息を呑む気配の彩花。隆彦は振り返ると、ビキビキに漲らせた肉竿を突きつけて、重ねて言う。</p> <p>「デリケートな部分なので、出来ればスポンジじゃなくてもっと柔らかいものの方がいいですね」</p> <p>「——胸とか」</p> <p>彩花は無言で怒張の切っ先を見つめて、困ったような、切ないような、発情しているような、そんな顔をしながら瞳を伏せて、こくんと白い喉を鳴らす。そして、隆彦に言う。</p> <p>「……ここに、仰向けに寝そべてちょうだい」</p>

<p>kag004_14h</p> <p>●場所 風呂場・夜</p> <p>●使用 CG H110 H111 H112 H113 H114</p> <p>*顔面射精 H115 H116</p> <p>*口内射精 H117 H118</p>	<p>「うっ、うう……感動だよ……まさか彩花さんにパイズリしてもらえるなんて……」 「ああ……っ、やだ……やめて、恥ずかしいから、言わないで……」</p> <p>羞恥に満ちた顔で言う彩花。全裸で仰向けになっている彩花をまたぶようにして、乳房の谷間に怒張を置いている隆彦。隆彦はつきたての餅のように柔らかく絡み付いてくる義母の乳肉の感触に、うっとり呻き声を漏らしている。彩花はしきりに恥ずかしいと言いながらも隆彦の怒張を目の前にして興奮を隠し切れない表情。唾液をたっぷりまみれさせた怒張を、はじめはゆっくりと乳房を上下にゆずるように磨き、今度は互い違いに胸を擦り合わせるように擦って……と、慣れた様子で男を喜ばせるテクニックを披露する。</p> <p>「父さんにもしたことがあるのかい？」 「……んっ、んっ、あの人のことは、今は言わないで」 「聞きたいんだ。聞かせてよ。このパイズリで一体何人くらい射精させたのかを」 「……そんなっ、意地悪なこと……っ、はあ、はあ……」 「言えよ」</p> <p>普段の隆彦からは考えられない冷たい言葉が飛び出して、彩花は一瞬びくりと肩を震わせる。そして諦めたように言う。村中の男の人にシたわ……と。初恋の女性のそんな回答に嫉妬せざるを得ない隆彦。だが今はこの胸は俺だけのものだ、と極上の快楽に酔いしれる。隆彦がうっとりと感じている姿に彩花も興奮をあおられたのか、谷間から飛び出した亀頭をペロペロと舐めまわし、ひとしきり嘗め回したあとは更に突き出された怒張の先端をパクリと啜って強烈にバキュームし、隆彦を追い込みめに掛かる。彩花の本気のパイズリフェラに、隆彦は瞬間に射精欲求を膨れ上がらせる。</p> <p>■射精選択肢発生 射精選択肢①→顔にぶちまけてやる 射精選択肢②→口に注ぎ込んでやる</p> <p>①顔にぶちまけてやる 顔にかけてあげるよ、と唸る隆彦。彩花の顔に怒張の切っ先を突きつけると、ビュバツ、と大量の精液をほとばしらせる。何度も何度も亀頭を上下させ、その度に太い糸のような精液が彩花の顔を汚す。彩花は熱っぽい喘ぎと戸息を漏らしながら顔面で精液を受け止める。射精が終わったころには、彩花の顔面は精液でぐちゃぐちゃのドロドロになる。 →③合流地点へ</p> <p>②口に注ぎ込んでやる 全部飲んでよ、と唸る隆彦。彩花の口内に怒張を押し込んだまま、びくんと腰を痙攣させる。尿道から魂が抜けてしまいそうな極上の快楽に酔いしれつつ、最後の一滴までを彩花の口内に注ぎ込む。彩花はうっとりした顔のまま精液を飲み干して、隆彦の怒張を吸い続ける。そのまま隆彦が腰を引くと、彩花のぷるんとした唇から「ちゅっぽん」という音が鳴って風呂場に響き、彩花の舌と亀頭の先端に太い精液の糸が出ろりとかかる。 →③合流地点へ</p> <p>③合流地点 「ふう……良かったですよ、彩花さんのチンポ掃除。お陰でこんなにテカテカだ」 黒光りする怒張を見せ付けながらうそぶく隆彦。そう……ですか、ととろんとした顔で言う彩花。それじゃあ僕は一足先にあがらせてもらいますよ、と告げると彩花は一瞬「えっ」と、期待を裏切られたとでも言いたげな声を出す。あからさまに欲求不満という表情の彩花の顔にほくそ笑みながら、隆彦は風呂場を後にする。</p> <p>→kag004_15へ</p>
<p>kag004_15</p> <p>●場所 客間・夜</p>	<p>客間にて夕涼みしている隆彦。風呂場でのやり取りで彩花が悶々としていることを確信しながら、彩花に自分から夜這いをかけるか、それとも部屋で待ってみるか、どちらにしようか考える。</p> <p>■選択肢発生 選択肢①夜這いをかける→kag004_16 選択肢②夜這いを待つ→kag004_19</p>
<p>kag004_16</p> <p>●場所 廊下・夜 ↓ 彩花の部屋・消灯</p>	<p>廊下をそっと歩いて、彩花の部屋の前まで行く隆彦。 「彩花さん、起きてるかい？」 返事はない。だが起きていることを示すように、衣擦れの音が聞こえてくる。 「入るよ」 一声かけてから彩花の部屋へと入る隆彦。</p> <p>～彩花の部屋・消灯～</p>

	<p>「……こ、こんな時間に、どうしたの」</p> <p>入ると、彩花が布団の上で襦袢を整えながらそんなことを言う。彩花は瞳を微妙に泳がせていて、おまけに肌を上気させている。息も少し荒い。隆彦は無言で彩花に近寄ると、後ろに回されていた右手をつかむ。掴んで自分の鼻の前に持っていく。彩花の右手指からは、甘酸っぱい女の匂いがする。</p> <p>「もちろん、一人寂しくオナニーしてるに違いない彩花さんを慰めに来たんだよ」</p> <p>「そ、そんなこと、してないわ……」</p> <p>「手からこんなに蜜の匂いをぷんぷんさせておいて、嘘はいけないよ」</p> <p>「……っ」</p> <p>恥ずかしそうに唇をつぐむ彩花。だがその瞳が、ちらちらと隆彦の股間を見つめている。その瞳はどこかでこうなることを期待していたのをはっきりと示していて、隆彦はかつて憧れた女が自分とのセックスを待ち望んでいるという現実に興奮を抑えきれない。</p>
kag004_17h ●場所 彩花の部屋・消灯 ●使用 CG *キス N020 N021 N022 *後背位 H120 H121 H122 H123 H124	<p>「あっ……んむ……っ」</p> <p>ぐいと彩花を引き寄せてキスをする隆彦。はじめは唇を重ね、次に舌を差し出す。口では抵抗を示しながら、彩花の舌は待ち焦がれていたかのように隆彦の舌に絡みつ、鼻からは甘く息を漏らす。ちゅぱちゅぱくちゅくちゅと唾液を掻き混ぜると、抱きしめている彩花の口からあっという間に強張りが取れていく。</p> <p>「んっ……ああっ、あっ……やあ……っ」</p> <p>「すごい濡れてる……ちょうど盛り上がったところを邪魔したみたいで悪かったね」</p> <p>キスしながら彩花の股間に指を送る隆彦。ぐちゅり、と濃密な愛液が指先に絡みつ。隆彦は所在投げにしている彩花の手を握ると、今度は勢いよくそそりたっている自分の股間にその手を導く。</p> <p>「はあ……っ、あああ……す、すごい……こんなに……」</p> <p>うっとりとした吐息と共に、隆彦の怒張を細い指でさすさすと摩る彩花。隆彦もキスを繰り返しながら、くちくちと丁寧に肉溝をいじる。いじりながら彩花に囁く。</p> <p>「もうすぐにでも挿入出来るね」</p> <p>「……っ、はあ、はあ……っ」</p> <p>「でも嫌だったらこのまま帰るよ」</p> <p>「……あ……は……あ……い、いやじゃない……わ……」</p> <p>「だったら、男を興奮させるような、とびきりいやらしい言葉で誘ってよ」</p> <p>「……あ、ああ……義理とはいえ、母親に……そんな、ことお……っ」</p> <p>「言えよ。彩花」</p> <p>彩花のことを呼び捨てにする隆彦。彩花は耳元で囁かれた乱暴な言葉にびくんと全身を震わせて、はああああ、とうっとり吐息をつく。そして意を決したように隆彦の身体から離れると、布団の上でよつんばいになって隆彦に尻を向ける。（床に手を突いて、尻を高くあげる四つんばい。要コンテ画像確認）</p> <p>「あ……彩花の……っ」</p> <p>「彩花のっ……義理の息子のおちんぼを欲しがらっ、メスオマンコに……」</p> <p>「隆彦さんの若くて硬いオスチンポ、ハメハメしてえっ……☆」</p> <p>彩花の腰を掴んで後ろから一気に挿入し、パンパンと股間を叩きつける隆彦。彩花は最初からたまらない声をあげて悶える。生き物のように絡みついてくる彩花の膣肉を堪能しながら、この穴も村中の男に楽しませたのかと尋ねる隆彦。そう、そうよ、と肯定する彩花。だけどこれが一番気持ち良い、このオチンポが一番良いのっ、人生で一番のオチンポなのと彩花は悶え、そして隆彦が好き好きと、昔から好きだったと、甘い声で訴える。「義母のくせに息子と不倫してそんなことを言っ、とんだ淫乱だな」と呻きながら腰を盛んに叩きつける隆彦。彩花は不倫でもいい、二番目でも良いの、と隆彦に切なく訴えながら、ぐりぐりと腰を押し付けてくる。隆彦も怒張を叩き込みながら、それじゃあ今日からこの穴は俺の性欲処理穴だからと彩花に言い聞かせる。そんな隆彦の言葉を受け入れて嬉しそうに返事をする彩花。その膣穴も歓喜に震えて、怒張をきゅううと締め付ける。隆彦はその余りの快楽にあっという間に射精を迎えて、膣内に全部出してと訴える彩花にお望みどおりたっぷり注ぎ込む。闇の中でひとつの肉の塊のようになりながら、隆彦と彩花はお互いの性器をみっちり押し付けあう。</p> <p>■彩花フラグ+1</p>
kag004_18 ●場所 彩花の部屋・消灯	<p>※017hのあと、散々セックスをしたあとの会話、という設定。</p> <p>「満足したか、彩花」</p> <p>「……はあ……っ、はあ……っ、はあ……っ、した、満足、しました……」</p> <p>布団の上に突っ伏して、開いた足の付け根、熟した膣肉から音を立てながら大量の白濁液を逆流させている彩花。肩で息をしている彩花を見下ろしながら、隆彦は言う。</p> <p>「この穴は誰のものだ？」</p> <p>「……隆彦さん、隆彦さんがいるあいだは、隆彦さんのものよお……っ」</p> <p>甘い声で言う彩花。彩花の言葉を聴いて、隆彦は天井に向かってニヤリと笑みを浮かべる。そこには長太郎が仕掛けているカメラが置いてあるのだ。愛実を抱かれたその引き換えに彩花に服従宣言</p>

	<p>をさせ、隆彦は満足しながら部屋を出て行く。この一部始終を見た長太郎が、愛実にどんなことをしてくるのか……と想像しながら。</p> <p>→kag005_02 へ</p>
<p>kag004_19</p> <p>●場所 客間・消灯</p>	<p>迫られて駄目と言っていた彩花が自分から男を、自分を求める姿が見たい、と隆彦は思う。風呂場の様子ならまず間違いなく、放っておけば自分から部屋にやってくるのではないかと。来なかったらその時はその時、改めてこちらから出向けば良い……と、隆彦はそんなことを考えながら布団に潜り込み、天井を見上げる。それから十数分経過した頃、廊下をきしつ、きしつとくすかに軋ませる音が響いて、客間の障子に女の影が映りこむ。</p> <p>「隆彦さん……起きてますか？」</p> <p>「起きていますよ。こんな時間にどうしました」</p> <p>「あの……その……」</p> <p>彩花の声にこたえる隆彦。彩花は少し躊躇いがちな気配をにじませながら、障子をすうと開ける。</p> <p>「……」</p> <p>羞恥に満ちた表情で後ろ手に障子を閉めて目を伏せる彩花。そんな彩花は白い肌襦袢の下に黒いセクシーランジェリー（資料画像 H130_彩花ショーツ.jpg、H130_彩花ブラ.jpg）が透けているという扇情的な格好をしており、清楚な雰囲気彩花がするには余りにも卑猥過ぎ、痴女じみている。隆彦をその気にさせようという苦心がありありと見える服装にニヤつかざるを得ない隆彦。隆彦は嗜虐心がふつつつと湧いてきて、彩花をもう少し辱めてやろう、と思う。</p> <p>「もう一度伺いますけど、こんな時間にどうしました？」</p> <p>「……っ」</p> <p>自分の思っていた反応と違ったのか、彩花は少し焦りながら、更に頬を羞恥に染めて言葉に詰まる。それから潤ませた瞳を泳がせて、白い襦袢に手をかける。しゅるっと衣擦れの音を響かせて襦袢を床に落とす彩花。胸も股間も丸出しの黒いブラとショーツに包まれた肢体を自ら抱きすくめるようにして、彩花は隆彦から視線を逸らしつつ、言う。</p> <p>「た、隆彦さんの……性欲を処理しに……来ました……」</p> <p>まるで隆彦のためにしていると言いたげな台詞に苦笑しながら、隆彦は返す。</p> <p>「昼間彩花さんに抜いてもらったお陰で、全然溜まってませんよ。溜まっているのは彩花さんのほうなんじゃないですか？」</p> <p>「わ、わたしは別に……そんな……溜まって、なんて……」</p> <p>見え透いた嘘をつく彩花に、隆彦は言う。</p> <p>「彩花さんが溜まってて、どうしても性欲処理したいんでしたらチンポを貸してあげますよ」</p> <p>「別にそうでもないんでしたら、今夜は帰ってもらって結構です。僕はもう寝ますから」</p> <p>隆彦の言葉に、彩花はぐっと言葉に詰まって、それから恥辱に震える唇で意を決したように言う。</p> <p>「あっ……うう……か、貸して……ください」</p> <p>「何をですか？」</p> <p>「お願い……します。た……隆彦さんのオチンポ、貸してください」</p> <p>濡れた瞳で懇願する彩花に向かって、隆彦はそこまで頼み込まれたら仕方ないですねとほくそ笑む。</p>
<p>kag004_20h</p> <p>●場所 客間・消灯</p> <p>●使用 CG H130 H131 H132 H133 H134 H135 H136 H137 H138</p>	<p>チンポを貸してほしければまずは口だけで気分を盛り上げて下さいとの隆彦の要求に素直に従い、彩花は本当に口だけを使って隆彦の浴室の前を解き、隆彦の下着をあらわにさせる。</p> <p>「どんな匂いがするか、なるべく詳しく説明してください」</p> <p>浴室の前をはだけて布団に仰向けになっている隆彦。あらわになったボクサーパンツの股間部分がかもつこりと膨らんでいて、彩花がそのふくらみに鼻を押し付けて、鼻の穴を膨らませながらうっとりとおいを嗅ぐ。胸が切なくなるような、逞しくて立派な雄のオチンポの匂いがします……と息を熱くしながら語る彩花。彩花の問いに興奮をあおられながら重ねて尋ねる隆彦。</p> <p>「義理の息子のチンポの匂いはそんなに良いですか？」</p> <p>「は、はい……とっても良い匂いがします……すんすん」</p> <p>みっともなく鼻を鳴らす彩花に、下着を下ろしてくださいと命じる隆彦。彩花はパンツの裾を前歯で噛むと、そのままずりずりと下ろしていく。器用に下着をずりおろすと、ギンギンにいきりたった怒張がパチンと音を立てて隆彦の腹を打つ。彩花はそんな光景を見て目を輝かせると、“まだそれ以上は命じられていないから”とでも言うかのように、今度はむき出しになった怒張の匂いをスンスンと嗅ぎ回す。そんな光景を見ていると、隆彦の嗜虐欲がますます燃え盛っていく。何か頭の中でスイッチが入るのを感じながら、隆彦は言う。</p> <p>「舐めろ。彩花」</p> <p>彩花を呼び捨てにして、言葉遣いを乱暴にして、フェラチオ奉仕を命じる隆彦。彩花は手を使わず、ペロペロと先端を舐め、茎胴をなぞり、怒張全体をテクテクにするようなフェラチオを開始する。彩花の舌先がヘビのように亀頭を、茎胴を這いずるたびに怒張はビクンビクンと痙攣を繰り返す。</p> <p>「啜えろ。一度射精させたらマンコに入れても良いぞ」</p> <p>彩花は命じられながらも陶然とした表情で、手を使わずに隆彦の怒張を口の中に招き入れていく。</p>

	<p>今まで何人の男に奉仕してきたのだろう。風俗嬢でも勝てないだろうという、舌が何枚もあるような錯覚までしそうなほどの快感を隆彦に与えてくる。はじめは貞淑な表情を保つ彩花だが、隆彦が感じた声を出すごとに淫らな表情を滲ませて、いよいよ射精しそうな隆彦を追い込む時には淫魔が男を挑発するような上目遣いをしながら、ジュポジュポジュルジュルと強烈なヒョットコフェラを繰り出して隆彦を呻かせる。</p> <p>どこに射精してやるかを選ぶ間もなく、隆彦は彩花の口の中に大量の精液を注ぎこむ。彩花は淫らな上目遣いのままゴクゴクと喉を鳴らして精液を飲み干すと、最後の一滴まで絞つくすかのよう「ちゅるるるるッ、ちゅっつぽん！」と吸い上げて、命じられたわけでもないのに口をあぐりと開け、糸を引く口内を“全部飲みました”と言うかのように見せ付ける。萎えて腹の上に乗る怒張と突き出された彩花の舌先に、でろりと太い精液の糸が走る。口の中の唾液と精液を舌でかき集めてくちやくちやくと味わってぐくんと飲み干すと、彩花は精液くさい息を吐きながら言う。</p> <p>「……もう一度、おつきく、しますね」</p> <p>言うが早いか、萎えていた勃起をちゅるんと吸って口の中に誘う彩花。そのまま射精直後で敏感な怒張を再びじゅるる、じゅぽじゅぽとバキュームして快感を送り込んでくる。萎えていたはずの怒張が瞬間に硬さを取り戻すと、彩花はそれを口から開放する。精液のカスなどが綺麗に取れてテカテカに黒光りしている怒張が、先端から唾液の糸を引いて彩花の唇に橋をかけつつ、まっすぐ天井をつくように勃起するのを見て、彩花は</p> <p>「……おつきく、なりました……はあ、若いおちんぼ、すてき……」</p> <p>「……入れても、良いですか？」</p> <p>とウツトリしながら尋ねてくる。そんな彩花の姿に、隆彦も生唾を飲み込んで言わざるを得ない。</p> <p>「ああ。入れて良いぞ」</p>
kag040_21h ●場所 客間・消灯 ●使用 CG H140 H141 H142 H143 H144 H145	<p>「はぁッ……ああん……！」</p> <p>エロ下着姿のままM字開脚背面騎乗位の体位で、がに股気味に足を開いた隆彦に跨って自分から怒張を招きいれ、うっとりとうとうと蕩けた声をあげる彩花。この格好良い、良いところに当たるう、と甘えた声をあげながらアンアン腰を振る彩花を見上げながら、どれくらいこのチンポが良いのかとたずねる隆彦。世界で一番良いのと訴えながら、隆彦のことが好きだったと喘ぎ喘ぎ言う彩花。憧れのチンポが奥を押し上げると快感もあらわに泣く彩花の姿に、隆彦も黒い興奮の炎を燃やす。</p> <p>「好きだったのに、親父なんかと結婚しやがって……！」</p> <p>「くふっ、ふっあ、くふああああ……んっ☆」</p> <p>甘い声をあげる彩花。隆彦が身体の横に置いていた手を持ち上げて、目の前でぶるんぶるんとはねる彩花の爆乳、その先端の乳房を指で摘み転がし押し潰すように責め、腰を突き上げる。始めは可愛らしさを感じる甘い悲鳴をあげる彩花だが、腰を振りたてるのに熱中していくにつれて、舌をだらしなくはみ出させ鼻水を滲ませながら「おんおん」「んほお」「くほお」と、動物のような「語尾がお系」の喘ぎを混ぜ始める。そんな彩花の姿に、隆彦も射精欲求がむくむくと鎌首をもたげてしまう。</p> <p>「ひいっ、ひんっ、ひっ、いいいっ！」</p> <p>スパートをかけるように、彩花の尻を鷲づかみにしながら引き寄せ、腰を突き上げて、これでもかと腰を下から叩きつける隆彦。とろけた顔から一転、彩花は余裕の無い顔でひいひいと快感に悲鳴をあげる。そして隆彦はそのまま、本能に任せるままに「膣内に出して」と盛んに口にする彩花の中に放出する。甲高い悲鳴をこれでもかとあげて、膣肉をきゅっきゅっと締め上げながら絶頂を迎える彩花。絶頂の波が収まった時には表情をどろどろに弛緩させて、バカ貝のようにみ出させた下からは唾液をたらーとたらし、鼻からは鼻水をとろっと出して絶頂の余韻に浸りきる。</p>
kag040_22 ●場所 客間・消灯	<p>※021hのあと、散々セックスをしたあとの会話、という設定。 ※kag004_18と同じ会話で、表示する背景だけ変えるというものなので、シナリオ執筆は不要。音声収録も不要です。</p> <p>「満足したか、彩花」</p> <p>「……はあ……っ、はあ……っ、はあ……っ、した、満足、しました……」</p> <p>布団の上に突っ伏して、開いた足の付け根、熟した膣肉から音を立てながら大量の白濁液を逆流させている彩花。肩で息をしている彩花を見下ろしながら、隆彦は言う。</p> <p>「この穴は誰のものだ？」</p> <p>「……隆彦さん、隆彦さんがいるあいだは、隆彦さんのものよお……っ」</p> <p>甘い声で言う彩花。彩花の言葉を聴いて、隆彦は天井に向かってニヤリと笑みを浮かべる。そこには長太郎が仕掛けているカメラが置いてあるのだ。愛実を抱かれたその引き換えに彩花に服従宣言をさせ、隆彦は満足しながら部屋を出て行く。この一部始終を見た長太郎が、愛実にどんなことをしてくるのか……と想像しながら。</p> <p>→kag005_02へ</p>
kag040_23	<p>使いを終えて客間に戻り、一息ついてる隆彦と愛実。するとすぐに長太郎がやって来る。</p> <p>「戻ったばかりのところを悪いが、今夜は愛実さんに少し手伝って欲しいことがあるんだがね」</p>

<p>●場所 客間・夜</p>	<p>にこやかな笑顔で切り出す長太郎。その笑顔の裏にはケモノの顔が覗いていることを知りながら、隆彦は何も知らない善良な夫を演じる。</p> <p>「——ということらしいんだけど、愛実、大丈夫かい。疲れていないかい？」</p> <p>隆彦の問いかけに「家事も何もしていませんから疲れなんて全然」とにこりと微笑む愛実。長太郎は「今から神社でやぐら設営に携わっていた青年会の打ち上げがあつてね」と言う。手伝いが必要なら僕も向かいましょうか？と形だけでも尋ねる隆彦に、長太郎は「帰りは遅くなってしまうと思うので、隆彦は家で留守番をしていてくれないか。彩花が一人だと、何か男手の必要な時に難儀すると思うのでな」と伝える。それはその言葉通りの意味ではなく「お前と彩花はこれから家で二人きりになるのだ」——という事実を強調したかったのだと分かる。あまり遅くならんようにするからなと言うと、長太郎は愛実を連れて外へと出て行く。</p> <p>彩花と二人きりという状況は魅力的だが、昼間見たあの体格の良い男盛りの獣たちのなかに愛実を連れて行って一体何をする気なのかと考えるだけで隆彦の胸は嫌な音を立てて軋む。ああどうすればいいんだと悩む隆彦は……</p> <p>■選択肢発生 選択肢①彩花と二人きりに→kag004_13 選択肢②神社へ行ってみる→kag004_24</p>
<p>kag040_24</p> <p>●場所 田舎道・夜 ↓ 神社・夜</p>	<p>一目見て自分だと気付かれないように着替えて、天狗面を片手に持ち、車で神社へと向かう隆彦。大きな提灯の飾ってある鳥居をくぐり抜けて、盆踊りの音色が夜空に響き渡っている境内をうろつく。大勢で賑わっている盆踊りのやぐら周りを通り抜けて、そのまま奥へ。面をつけた白髪まじりの男たちを見つけて、あとをつけていく。祭りの喧騒を離れ、一気に静かになる周囲。だがしかし、すぐに祭りの喧騒とは別の、男たちの熱気に満ちたどよめきや囁きたてるような声、そして艶めかしい女のうめき声が聞こえてくる。隆彦は生唾を飲み込みながら、声の聞こえてくる建物——本殿へと足を踏み入れる。</p> <p>■玲人フラグ＋１ ■ガチネトラレフラグ＋１</p>
<p>kag004_25h</p> <p>●場所 本殿</p> <p>●使用 CG H150 H151 H152 H153</p>	<p>「おうら、何をちんたらしてやがる。さっさと前に進みやがれ。ワカヅマオメコ！」</p> <p>「いけ、そのまま一位を取れ、チンポヒデリ！」</p> <p>ゲラゲラと下品な笑い声が響く本殿に足を踏み入れて、面に隠れた目を剥く隆彦。旅館の広間のような広さを誇る畳張りの本殿には無数の男たちが詰め込まれて胡坐をかいて座りこんでいる。ぎらぎらと血走った目をした男たちの視線の先には、本殿の端から端まで張り巡らされたコブ縄にまたがり、コブ縄渡りをさせられている何人もの女たち。熟女から少女、そして隆彦の愛する妻・愛実。女たちはコブ縄の食い込んだ股間の上にマジックで「シャッキンドレイ」「チンポヒデリ」などと書かれている。愛実には「ワカヅマオメコ」と書かれていて、全員が競走馬のように下品な名前をつけられている。女たちは全員、目には白い布で目隠し、両乳首には細い糸で小さな鈴を結び付けられ、手はひじから先を後ろ腰に束ねるように縄で戒められている。全員が全員クリトリスを挟み込むようにローターを取り付けられ（本体は白い帯で太ももに固定）ている。</p> <p>「ふうー……っ、ふうー……っ、ふうー……っ☆」</p> <p>猿轡からとろけた荒い息を漏らし、つま先立ちになって縄を歩いていく女。一番最後まで縄の上を歩いていた女が勝ち、というルールらしい。縄の食い込みがきついらしく、女たちは全員、ぶるぶるとつま先を震わせながらの牛歩しか出来ない。縄には媚薬がしみこませられていて、それが女たちの肉溝をとろけさせている。</p> <p>若衆が借金を肩代わりした代わりに共有の肉奴隷となっている少女、辱められるのが好きなマゾ未亡人などなどさまざまな理由があつてコブ縄渡りをさせられている女たちに混じり、愛実は旦那と帰省したくせに旦那の父親のチンポにはまってしまった不貞妻として、罰を与えるという名目で辱められている。一位を取れなければこの町に来てからの辱めの様子をすべて夫にぶちまけることになっていると長太郎が説明して、下品な笑みを浮かべる男たち。愛実は必死になって前に進み、端まで行けば今度はその格好のまま後ろ向きに進み、と縄に愛液を擦り付けながら必死に足を動かし続ける。</p> <p>最後まで残ったのは愛実と未亡人で、愛実を顔でドロドロに汚しながらも未亡人を下して勝利を得る……も、最後の最後に男たちの手によって縄をぐいと上に持ち上げられて、思い切り割れ目に媚薬まみれのコブを食い込ませ、衝撃で絶頂、失神する。あひいあひいと悲鳴をあげながら、ピンとつま先だちになって盛大に小便を撒き散らす愛実の姿を、男たちはニマニマと眺める。</p>
<p>kag004_26</p> <p>●場所 本殿</p>	<p>絶頂を迎えて床にぐったりと崩れ落ちる愛実。そんな愛実をビデオカメラで撮影しながら、長太郎は興奮に舌なめずりをしつつ愛実の手を引いて抱き起こす。そして身体の戒めを解きながら、愛実に言う。「約束どおり隆彦には黙っておいてやろうじゃないか」ちらりと隆彦を見つめる長太郎。愛実は夫がこんなところにいるわけがないと思っているのか、絶頂の余韻にとろけた顔で、獣のような目をしている男たちの視線に怯え、そして興奮している。</p> <p>「秘密はばらさん代わりに、今日も秘密を増やしてやろう」</p>

	<p>「あっ……」</p> <p>ふらふらとしている愛実を後ろから抱きしめる若い男。男の肌に触れた愛実が艶めかしい吐息をつきながら顔だけ後ろを振り返る。そこには軟派な大学生、玲人が全裸になって、怒張をいきりたさせていた。玲人の怒張を見て愛実息を呑む。そして隆彦も。</p> <p>「ふふ……興奮しちゃいますよ。昼間会った時からオマンコしまくりたいと思ってた奥さんを、真っ先に頂けるなんてね。かがち様に感謝です」</p> <p>そんなことを囁きながら面をつける玲人。太さは長太郎よりも控えめだが、より長く反り返った怒張は亀頭の下にポコポコとした膨らみが並んでいる。愛実の熱い視線に気付いた玲人はニヤニヤと笑いながら続ける。</p> <p>「シリコンリングですよ。チンポの力を二つにするみたいなもんです。これで嵌めまくって、旦那さんとのセックスで満足出来なくしてあげますよ」</p> <p>「ああ……う、うそ……こんな、すごい入れられたら、わたし……おかしくなっちゃう……」</p> <p>怯えながらも興奮を滲ませる愛実に、玲人は言う。</p> <p>「そうですよ。今日はたっぷり、おかしくしてあげます。僕だけじゃない。性欲が有り余ってる男が、ここにはみっちりですから」</p> <p>辺りの男たちも面をつけて、コブ縄渡りの脱落者たちの身体に群がっていく。</p> <p>「ああ……いや、だめ、だめよ……おかしく、本当におかしくなる……」</p> <p>へなりと震えて腰を砕けそうにする愛実。そんな愛実を地面に転がすと、玲人は舌なめずりしながら言う。</p> <p>「愛実さんが味わったこともないようなドスケベな格好で犯してあげますからね」</p>
kag004_27h ●場所 本殿 ●使用 CG H160 H161 H162 H163 H164 H165 H166	<p>「はふっ、はぐっ、くふああああ……っ！」</p> <p>息を詰まらせるような声をあげる愛実。その濡れそぼった膣肉に、玲人の長いシリコン入りチンポがずっぴりとねじ込まれている。愛実は開脚後転を失敗したような格好、そんな愛実に背中を向けて跨る体位で玲人は挿入している。いわゆる「きぬた」の体位（資料画像：H160 きぬた.jpg）で、愛実の手足は全裸の筋骨逞しい男たちが手で拘束している。</p> <p>「うっわ……やっべ……愛実さんのマンコ、すんげえ締まる……っ」</p> <p>うっとり情けない声をあげる玲人。その極上の挿入感を堪能してうめくのもつかの間、すぐにもう我慢出来ないと腰を叩きつけ始める。だめだめと言う愛実だったが初めて味わうシリコンの快楽にすぐにあひひあひひと情けない喘ぎ声をあげはじめて、ただただ玲人とのセックスに酔いしれてしまう。そんな愛実に旦那の粗末なチンポと俺のシリコンチンポどっちがいいと、ちゃらけた顔を捨てて乱暴な態度で尋ねる玲人。はじめはそんなこと言えないと抵抗する愛実だが、言わねえと止めんぞとの言葉に、こっちのちんぽが良いと恥も外聞も無く答える愛実。そんな愛実の言葉に、隆彦は悔しくて鬱勃起。旦那を放ってチンポに狂ってる女は罰として孕ませてやるしかねえな、と玲人は「ふんふん」と唸りながら猿のように腰を振って、最後にたっぷりと膣内射精。絶頂に浸る愛実に、玲人は言う。</p> <p>「まだまだ、ここにいる全員で回しまくってやるからね。覚悟しろよ」</p> <p>ぬぶっとチンポを引き抜いて、膣穴と亀頭の先端に橋をかけながら、ぼたぼたと精液を漏らす愛実に向かって、玲人は邪悪な笑みを浮かべながら言う。</p> <p>～時間経過の演出～</p> <p>「はっ……はっ……はっ……はっ……☆」</p> <p>顔を仰け反らせて、荒い息をつきつながら蕩けきった様子の愛実。股間からは大量の精液を逆流させて床に精液の水溜りを作っている。顔も胸も精液でどろどろで、汚れきっている。</p> <p>「最後に記念撮影してやるよ……おら、こっち向けよ。ほら、ピース♪」</p> <p>「は……くあ……ああ……ん☆」</p> <p>のろのろと手を持ち上げて、両手でWピースをする愛実。そんな愛実に、自らも散々愛実に膣内射精した長太郎が尋ねる。</p> <p>「夫よりも若いシリコンチンポはどうだった。愛実さん」</p> <p>「シリコンチンポ……さいこお……っ☆」</p> <p>ぶびい……ッ、とひときわ盛大なマン屁を鳴らしながら、愛実は膣からどろりと精液の塊を地面に垂れ落とす。そんな光景に、隆彦は触れてもいないというのに何度目かの射精を浴衣の下で迎える。</p>
kag004_28	<p>べつとりと股間をぬらししている不快感と、妻を汚された快感。嫉妬に興奮。</p> <p>強い感情が渦巻きぐちゃぐちゃになり過ぎて、ただ立ち尽くす隆彦。</p> <p>ふと視線を感じて顔をあげると、面を外した玲人が隆彦を見て、にやりと笑う。</p> <p>面をつけていてもあんたが誰か分かって、あんたはこれが見たかったんだろうと言いたげに。</p> <p>“これがあんたの奥さんの本性ですよ”</p> <p>雄弁に語る玲人の瞳に、隆彦は更に胸に渦巻く感情を強くしながらも、神社を後にする。</p> <p>→kag005_03へ</p>
kag005_01 ●場所	<p>起床する隆彦。既に起きていたのだろう、隣の布団には愛実の姿は無く、ぬくもりも残っていない。</p> <p>「……」</p> <p>SE ドクン（H098 表示）</p>

客間・昼 ●使用 CG H098 (回想) H105 (回想)	SE ドクン (H105 表示) 胸が高鳴る。夕べ起きた出来事が、老人たちに良いように弄ばれる愛実の姿が克明に浮かぶ。 まさかまた朝から長太郎に呼び出されて、何かされているのだろうか……？ 寝起きの頭に血が上り、むらっと興奮が全身をうずかせる。 →kag005_04 へ
kag005_02 ●場所 客間・昼 ●使用 CG *17h を通過している H119 (回想) H125 (回想) *21h を通過している H119 (回想) H146 (回想)	※kag004_17 と kag004_21h のどちらから合流するシーンですので、どちらから来ても矛盾の発生しないテキストをお願いします。 ※スクリプト担当の方へ=kag004_17h を通過している場合は、H119 (回想) と H125 (回想) を使用して下さい。kag004_21h を通過している場合は、H119 (回想) と H146 (回想) を使用して下さい。 起床隆彦。既に起きていたのだろう、隣の布団には愛実の姿は無く、ぬくもりも残っていない。 そして愛実が今何をしているのかも気に掛かるが、彩花が今どんな様子なのかも隆彦には気にかかる。 SE ドクン (H119 表示) SE ドクン (H125 or H146 表示) 胸の高鳴りと共に、彩花の昨晚の痴態が脳裏に鮮明によみがえる。あの極上の牝の色香を閉じ込めるにはあまりにも頼りない肌襦袢を透けさせて、寝汗で肢体を濡らしているのだろうか？ 彩花のたまらなくなる喘ぎ声が脳裏によみがえって、股間がむくりと盛り上がる。 その時、きしきしきしきしと、廊下を歩いてこちらに近付いてくる音が聞こえる。 →kag005_04 へ
kag005_03 ●場所 客間・昼 ●使用 CG H154 (回想) H167 (回想)	起床する隆彦。既に起きていたのだろう、隣の布団には愛実の姿は無く、ぬくもりも残っていない。 「……」 SE ドクン (H154 表示) SE ドクン (H167 表示) 胸が高鳴る。夕べ起きた出来事が、若衆たちに良いように弄ばれる愛実の姿が克明に浮かぶ。 まさかまた朝から長太郎に呼び出されて、何かされているのだろうか……？ 寝起きの頭に血が上り、むらっと興奮が全身をうずかせる。 →kag005_04 へ
kag005_04 ●場所 客間・昼	※kag005_01、005_02、005_03 から合流しますので、いずれかから来ても矛盾の生じないようなテキストをお願いします。 「あら、おはようございます。隆彦さん」 ……と、愛実が髪を濡らして戻ってくる。勃起を隠しつつ挨拶を返す隆彦。 「ここのお風呂は本当に気持ちいいですね。今日で最後なんて名残惜しいです」 ——気持ちよくて名残惜しいのは、お風呂だけじゃないだろう？ 艶めかしさを全身から漂わせる愛実にそんなことを言いかける隆彦。 実家にいるのも最後の今日は、一体どんな風楽しもうかと、黒い欲望をたぎらせる。 ■フラグ分岐 1 ガチネトラレフラグが 2 以上=kag005_04a へ それ以外=フラグ分岐 2 へ ■フラグ分岐 2 彩花フラグが 3 =kag005_05 それ以外=kag005_19
kag005_04a ●場所 客間・昼	だがそんな欲望をたぎらせる自分とは別の、冷静な自分もいて、ふとそら恐ろしい気分が湧いてきてしまう。 (……だけど、僕は本当に大丈夫なのか？) (昨日以上にすさまじいものを見せ付けられたら、狂ってしまうんじゃないか？) (僕も、そして愛実も、取り返しのつかないところにまで向かってしまうんじゃないか？) ■選択肢発生 選択肢①例え破滅しても良い→kag005_04b へ 選択肢②日常を壊したくない→kag005_45 へ
kag005_04b	冷静だった自分を、欲望に取り付かれた自分が上回る隆彦。

<p>●場所 客間・昼</p>	<p>例えば破滅しても良い。僕はその先が、欲望の行き着くところが見てみたいんだ……と、考え直す。余計なことには気をとられずに、この身を焦がす獣欲にただただ従おう。</p> <p>■フラグ分岐 2 彩花フラグが 3 =kag005_05 それ以外=kag005_19</p>
<p>kag005_05</p> <p>●場所 客間・昼</p>	<p>黒背景に、彩花の立ち絵。 （実家にいるのも、今日が最後……か） そう思ったとき、隆彦の脳裏に浮かぶのは彩花の姿だった。帰宅するのは明日の朝。またまとまった休みが取れるまで暫くは戻れない家だ。彩花と思う存分やっておくのが一番良いのかもしれない。職場の同僚や上司……愛実を楽しむ方法は、日常へ戻っても色々あるのだから。そんなことを考えていると、彩花が髪を梳かしながら言う。 「あの、隆彦さん……最後の日に申し訳ないんですけど、お義父さんに今日も色々頼まれてしまって……」 申し訳無さそうに昼から出かけると切り出す愛実。その顔に、わずかに快楽への期待が滲んでいることを隆彦は見逃さない。もしかしたら、朝から風呂場で長太郎に出くわして、そこで何がしか誘惑され、焦らされてきたのかもしれない。嫉妬しつつも、それならそれで好都合だと隆彦は考える。父親が日も暮れないうちに愛妻を楽しむつもりなら、こちらは義母の熟れた肉体を楽しんでやる。そう考えた隆彦は、何も知らない善良な夫の顔をして、愛実に言う。 「実家になじんでくれてるみたいで嬉しいよ。僕のことは気にしないで良いから、父さんを手伝ってあげて欲しい」 なるべく早く帰ってきますから、そう呟いた愛実は、完全に女目をしている。</p>
<p>kag005_06</p> <p>●場所 廊下・昼 ↓ 彩花の部屋・昼</p>	<p>朝食を食べ終え一服し、みんなと蟬が泣き喚く中、廊下を歩いている隆彦。 向かっているのは彩花の部屋。 長太郎が食事の席で愛実と午前から出かけると切り出した時、彩花がわずかに動揺していたのを隆彦は見逃さなかった。彩花は恐らく待っている。隆彦が部屋を訪れるのを。 そして隆彦は、彩花の部屋の前へとやってくる。 「……彩花」 「……はい」 まだ日は沈んでいないにも関わらず、隆彦は彩花を呼び捨てにする。 かがち様遊ばせなんて関係が無い。二人きりの時は自分が彩花の男だ。そういう自負を込めて。 そして障子の向こう側から、彩花の、秘め事を前にして興奮を隠し切れない返事が聞こえてくる。 長い一日の始まりだった。</p>
<p>kag005_07h</p> <p>●場所 彩花の部屋・昼 （画面右から日が差す） ↓ 彩花の部屋・昼 （中央から日が差す） ↓ 彩花の部屋・夕 （画面左から日が差す） ↓ 彩花の部屋・消灯 （日が沈んで無灯火）</p> <p>●使用 CG *一回戦 H171 H170 H172 H173</p> <p>*二回戦 H174 H175 H176</p> <p>*三回戦 H177</p>	<p>※はじめに表示される CG は H171。熱が篋のためか、わずかに開けた障子の隙間からもどかしそうに足指をよじって畳を引っかいている彩花の白足袋が見える。</p> <p>※ここの CG は彩花の部屋を外から、少し離れた斜め上から眺める感じです。全部で三回戦。昼間（日当たり A）→昼間（日当たり B）→夕焼け、という感じで、日差しの方角などの周りの環境を変えて時間経過を表すと同時に、二人の服装を徐々に裸に近くしていきます。</p> <p>「あっ、ああう、あうふ……んあぁっ、隆彦さん、たかひこっ、さぁん……☆ ちゅむ、ちゅうつ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅぶっ、ちゅぱ……っ☆」 「彩花、彩花っ……ふうっ、ふうっ……んむ、んむあ、んむう……ちゅう……」</p> <p>※台詞を二つばかり流したあとに、H170 を表示する。H171 にあった障子を全部半透明にする。</p> <p>夫の名前を呼ぶように隆彦の名前を呼ぶ彩花。畳の上にしかれた敷布団に仰向けになって、着物を崩して胸をさらけ出して、長じゅばんもはだけて、半脱ぎ状態の彩花。その上に重なるようにして正常位で挿入している、こちらは白いシャツ＋靴下姿の隆彦。二人の周囲にはほどいた帯や、脱ぎ捨てた隆彦のズボン、はずしたネクタイなどが散乱している。全部服を脱ぐ手前ももどかしくてセックスを始めた、という感じ。 二人は熱心に口付けを交わし終えると、結合に集中したいとでも言うようにお互いの首に手を回してぎゅっと抱きしめあう。隆彦はぐりぐりと腰を叩きつけたり、まわすようにしたり、と家に誰もいないことを良いことに獣のように喘ぎまくる彩花をこれでもかと追い詰める。そしてそのまま、たつぷりと膣内射精する。彩花の甲高い悲鳴と共に、一回戦目が終わる。</p> <p>二回戦目開始。 東（画面右）から照っていた日の光が、画面中央から降り注ぐ感じ。背景などの基本は変えずに、布団の二人の体位と服装が変更。床の上に脱ぎ捨てた着物と、脱ぎ捨てた白シャツが増える。テーブルの上に伏せてあったお盆が表を向いて、麦茶と氷が注がれて表面にたつぷり汗をかいたグラスが二つ置かれている。ティッシュボールも布団の脇に二三個散らばっている。熱気が篋って暑いからか、閉まっていた障子は開け放たれている。彩花は乱れて汗まみれになって半透明になっている</p>

H178 H179 H179a *セックス終了 H179b	<p>白襦袢と、白足袋。隆彦は靴下のみ。二人とも汗でビチャビチャ。今度は隆彦が下になり、ブリッジでもするように腰を激しく跳ね上げて、はだけた白襦袢からこぼれた乳房を上下に激しく揺らしている彩花をハードなピストンで突きまくっている。彩花は背を後ろに逸らし気味なM字開脚背面騎乗位で隆彦に跨り、広げた両手を斜め後ろ後方について上体を倒れないようにしている。「あああッあッあッあッあッあッあッ！」と隆彦の怒張に膣奥を突き上げられるがまま悲鳴をあげて、布団や畳を白足袋に包まれた爪先でぎゅうとよじっている彩花。すごいすごいと狂ったように悲鳴を上げている彩花を、隆彦は取り付かれたように突きまくる。始めはうなだれたように喘いでいた彩花は徐々に顔をあげていって、最後には膣内射精と同時に思い切り頭を仰け反らせる。舌を天井に突き出して、足袋に包まれた爪先を死に掛けの虫のようにピクピクさせながら、彩花は絶頂に浸りきる。</p> <p>～ここから黒画面イメージ～</p> <p>布団の上で死んだように四肢を放り出し、膣から精液を逆流させながら満足げなため息をつく彩花。冷蔵庫から持ち出してきていたウィダーインゼリーを彩花に口移しで飲ませて、くちゃくちゃと掻き混ぜて、彩花の唾液が混じったゼリーを自分も飲む隆彦。食事をする時間も惜しい、という文章。まだまだ時間はたっぷりある。この肉体をむさぼりつくしてやる、と考えたとたん、隆彦の怒張がいきりたつ。ぐったりとうつ伏せになって寝込んでいる彩花に、隆彦はそのまま怒張をねじりこむ。快感の覚めやらぬところに挿入されて「おまんこ死んじゃう」「おまんこ殺してえ☆」と自分でも何を言っているのか分からない様子の彩花。</p> <p>～ここまで黒画面イメージ・イベントCGがないので短めに～</p> <p>三回戦目（実際には数え切れないほどやっている）開始。</p> <p>日の光が夕日になって、画面左から差し込んでいる。隆彦の靴下と彩花の汗まみれの白襦袢が畳の上に増えている。布団も愛液と精液でどろどろぐちゃぐちゃで、周りにはあきれ返るほどのティッシュボール。テーブルの上には麦茶を飲み干したあとの氷が全部解けて水が溜まっている汗まみれのグラス（溜まった汗がお盆に水溜りを作っている）と、ゼリー飲料の空きパック。栄養ドリンクの空き瓶などが倒れている。</p> <p>二人は全裸で縁側に出て、隆彦が彩花の腕の付け根あたりを引いて上体を起こす立ちバックの体位で繋がっている。外は夕焼け、もしかするとそろそろ夫と義理の娘が帰ってくるかもしれないと悲鳴交じりに呻く彩花。最初から涙と鼻水でぐちゃぐちゃどろどろの顔をしながら、眉根を寄せて唇を噛み締めている。嫌なら止めるかと叫ぶように尋ねる隆彦に、止めるのも嫌とドロドロの顔で叫ぶ彩花。帰ってきたら二人に見せ付けてやる。貞淑そうな姑が息子のチンポでイきまくってるアへ顔を姿を晒させてやると唸りながら腰を使うと、彩花の膣肉がかつてないほどに締め付けてきて隆彦は唸る。彩花の噛み締めていた口がだらしく開いて、悩ましくとじていた瞳もうっとりとした半目になる。内股気味だった足ががにまた気味になって、太い愛液の糸が大量に縁側に垂れ落ちて、腰を打ち付けるたびに大量の飛沫が撒き散らされる。長太郎と隆彦、二人にこの姿を見られることを想像して興奮しているのだ、と気付いて、隆彦もますます興奮してしまう。今帰ってくるかもしれない、もう帰ってくるかもしれないと彩花を言葉責めしながら、最後には種付け姿を見せ付けてやる、と宣言しながら彩花の膣奥にこの日何度目か分からない射精をする隆彦。彩花はこんなの絶対妊娠すると訴えながら、とろけた声を屋敷中に響かせて絶頂を迎える。そして最後には隆彦が抑えていないと倒れるくらいに弛緩して情けなく失禁し、びしゃびしゃと黄金水を垂れ流して隆彦の股間と縁側に盛大に水溜りを作り上げる。</p> <p>「ああ……こんなの見られたらあ……☆」と、失禁している自分の姿に羞恥し、被虐の快美に酔いしれる。</p> <p>「はあ～～……っ、はあ～～……っ、はあ～～っ……☆」</p> <p>セックス終了。日がとつぷりと暮れ、太陽が地面に沈み込む直前の時間帯。遠くの神社から祭囃子が聞こえてくるのを、ぐちゃぐちゃの布団の上で聞いている全裸の二人。彩花は布団にうつ伏せになって足を開き、肌の上に汗をびっしょり浮かべながら精液を逆流させている。隆彦は全裸で、股間の上にティッシュを一枚乗せながらテーブルの上に置いてあったグラスを片方手にとって、ぬるくなった麦茶を飲んでいる。布団の周囲には更にティッシュが増えている。艶めかしく肌を濡らした肢体を見下ろしながら、隆彦は夏休み最後の日が終わったことを実感する。</p>
kag005_08 ●場所 彩花の部屋・消灯 ●使用CG H179b	<p>※引き続き H179b を表示しっ放し。</p> <p>すっかり精液を出し尽くして体力も空っぽの隆彦が、夏の夜風で汗を引かせていると、暫く満足そうな吐息をついていた彩花がぼそりという。</p> <p>「……隆彦さん」</p> <p>「……なんだ」</p> <p>「……わたしを、隆彦さんだけのものに、してちょうだい……」</p> <p>布団に突っ伏したまま、隆彦の顔も見ずにいう彩花。</p> <p>彩花を隆彦だけのものにする。逢魔が刻の間に溶け込むような囁きにごとりと息を飲む隆彦。逢魔が刻。昼が夜に染まり魑魅魍魎が現れる時間帯。……ああ、確かに女は魔物だと隆彦は思う。彩花</p>

	<p>を隆彦だけのものにする。その言葉をもう一度噛み締める。なんて魅力的な言葉なんだろうか。</p> <p>■選択肢発生 選択肢①彩花の誘いに乗る→下のフラグ分岐へ 選択肢②彩花の誘いに乗らない→kag005_15</p> <p>■フラグ分岐 ガチネトラレフラグ 2 以上→kag005_49 へ ガチネトラレフラグ 1 以下→kag005_09 へ</p>
kag005_09 ●場所 彩花の部屋・消灯 ●使用 CG H179b	<p>※引き続き H179b を表示しつ放し。</p> <p>彩花を自分だけのものに……けれどその願いを叶えるためには、余りにも邪魔なものがある。 「まずは権造を、こちら側に引き込む必要がある。……何か良い方法はあるか？」 「それは大丈夫。権造は長太郎に従っているんじゃないわ。富蔵家に従っているんだもの」 権造だけではない。県警のお偉いさんや県議員、村人、白縄村に関わる人々は長太郎という個人に ではなく富蔵家の威光に従っているだけ。だからそれが長太郎ではなく隆彦になった所で何の問題 も無いと言う。むしろより若い血が富蔵を継ぐのなら、安心する連中のほうが多いかもしれない、 と語る彩花。それを聞いて安心したよと隆彦。それなら今夜すぐにでも父さんには退場して貰おう、 と隆彦は語る。</p> <p>～黒画面～</p> <p>時間経過の演出を入れて黒画面を表示。メッセージウィンドウを非表示に。一定時間の経過かもし くはワンクリックで、黒画面に大きく飛び散る血液の効果と、ぐちゃっ、という殴打音。</p>
kag005_10 ●場所 廊下・昼	<p>～時間経過の演出～</p> <p>「旦那様……旦那様？」 「……あ！ ああ。僕のことが。すまないね。まだ慣れなくてね」 廊下で権造に呼び止められて立ち止まる隆彦。長太郎が風呂場で溺れ死んでから約一年。蔵家を正 式に継いだ隆彦はそれなりに忙しい日々を送っていた。始めは慣れないことばかりだったが義母と 権造の手ほどきにより今ではすっかり富蔵の家長としての仕事をそつなくこなすようになっていた。 長太郎が死体として発見された朝、愛実突然義父が死んだことに相当混乱していたようだが、警 察の口から『本当に風呂場で滑って頭を打って当たり所が悪くて死んでしまった』という説明を受 けて、それを信じたようだった。……まあ信じるもなにもそれが真実なのだから、何の問題も無い。</p> <p>隆彦は権造にそろそろ今年のかがち様遊ばせのことを考えないといけませんので、という話を振っ てくる。そういえばそろそろそんな季節なんだねえとのんびりした返事をしながら、隆彦は和服に 隠れた股間をむくりとヘビのように持ち上げる。『今年こそは愛実についている嘘を——村の風習 を何も知らない当主』を返上しようかとも考える隆彦だが、まだまだ夫に隠れて不義を働いている 自分に酔っている妻の姿を見たいとも思う。今夜辺り自分の気持ちを確かめるのもいいかも知れな い。でも今夜は自分の妻ではなく、やはり自分だけの牝を抱いてやるのも良いな、と悩む。</p> <p>■選択肢発生 選択肢①不貞妻を観察したい→kag005_11 選択肢②自分だけの牝を抱く→kag005_13</p>
kag005_11 ●場所 廊下・昼	<p>「ところで権造」 「へえ」 「今夜辺り、君が調教してる牝が見たいんだけど」 声をひそめて言う隆彦に、権造はにたりと笑って答える。 「くくっ……畏まりました」 そんなやり取りを交わして権造と分かれる隆彦。 夜、調教室で光景が見れるのか楽しみだ、と嫉妬と興奮に胸と股間を膨らませる。</p>
kag005_12h ●場所 調教室・夜 ●使用 CG H180 H181 H182	<p>「ひい……っ、ひい……っ、ひい……っ☆」 夜。調教室に響きわたる愛実の甘い呻き声。全裸で黒い革のアイマスクをされている愛実は、自分 の足首を後頭部に引っ掛けるような体勢で足をOの字にし、縄で手足を一まとめにされて空中から 吊り下げられている。縄や太ももや乳房にも食い込んでいて、ボンレスハムのような（縄の食い込 みは資料フォルダの「180 縄イメージ.jpg」をご覧ください）そんな愛実の膣穴とアナルには、パイ プとアナルパイプがそれぞれ突っ込まれ、左右の乳首には一個ずつ、クリトリスをは二つで挟み込 むように、ピンクローターが白い医療用テープにて貼り付けられている。愛実の膣からもアナルか ら透明な液体がだらだらと零れ落ちて、鼻からは鼻水が、口からは唾液が、それぞれ強い快楽に 翻弄されるがままに垂れ流れている。</p>

H183
H184
H185
H186
H187
H188
H189

「たまらないだろう、愛実」
「ああっ、あっ、あああっ、ふあああっ、たまっ、たまりませんっ……権造さまぁ……っ☆」
愛実に問いかける権造と、甘い声で権造に答える愛実。隆彦は表向き愛実の良き夫を演じ続けているが、裏では権造に愛実を好きにさせた。愛実のことを長太郎と一緒に責めていた時の写真なりなんなりを使って脅して、好きに弄んで良いと言ってやったのだ。はじめは隆彦へ操を立てていた愛実だが、権造が今まで培ってきた手練手管を用いて責めてやると、すっかり権造とのセックスに嵌ってしまい、裏では使用人である権造のことを様付けで呼ぶようになっていた。そして権造は時には覗き穴から、時には愛実が目隠しをしていることを良いことに直接、観察するようになっていた。
「愛実、お前の夫は誰だ？」
「そおっ、それはもちろん、隆彦さんっ……隆彦さんっ」
「じゃあお前のご主人様は誰だ？」
「そっ、ひっ、それはあっ……権造様っ、権造様ですうっ☆」
「愛実のオマンコはっ、権造様専用の、おまんこお……っ☆」
「だからオマンコっ、オマンコしてへえっ、玩具じゃいやあ……っ☆」
とろけきった声でおねだりする愛実。ニタニタと気色の悪い笑みを浮かべて、愛実の艶めかしく揺れ動く肢体を見つめる権造。醜悪な怒張が、ビクンビクンと痙攣する。
「くっっ、入れて欲しければ、パイプを捻り出してみろ。先に空いた穴に突っ込んでやる」
「あっ……ああああっ、そっ、そんなぁ……もう我慢、出来ないのにい……っ」
切ない声を出しながらも、権造の言うことに従う愛実。尻をもじつかせながら、みっともなく鼻の穴を膨らませながら、膣のパイプとアナルのパイプを捻り出そうとする愛実。にゅぐっとわずかに膣のパイプが捻り出されると、その反動でアナルがパイプを欲張って飲み込んで、アナルパイプを排泄しようとする、まるで生き物のように膣がパイプを咥え込みなおす。その欲張りな肉穴をなじりながら愛実の尻を叩く権造。愛実が甘えたおねだり声を出しながら、必死になってパイプを手を使わずに捻り出そうと尻を振る。途中で抜けかけたパイプを再び押し込んだりして、「んふおおおお……っ、ほへっ、ふあああ……っ☆」と、愛実に切ないアへ声をあげさせる権造。だがそれでも愛実が必死に尻を振り肉壁を蠢かせると、膣のパイプがじわじわと抜けていく。
「はあっ、はああ、あっ、んんっ、欲しいっ、欲しいっ、早くっ、欲しいい……っ」
「んおっ、おっ、ほっ、おっ、ほお、ほお……っ☆」
貞淑で可愛い妻の面影は無く、下品で動物じみた喘ぎを漏らしながら必死になってパイプをひりだす愛実。じわじわじわじわと膣のパイプが抜けていき、そしてヌボッと一気に抜け落ちる。子馬の出産のように、ねばねばの本気汁にまみれたパイプが地面に落ちて、大量の糸を引く。
「抜けたぁ……抜けたぁ……オマンコっ、抜けましたぁ……」
うっとりしつつも、だから早く入れて欲しいと言いたげな愛実。そんな愛実に権造は言う。
「入れて欲しければ、いつもどおりおねだりしてみせろ」
愛実はためらいなく言う。
「隆彦さんのよりもきもちいいっ、遅しくてぶっといおちんぼ、ご主人様のおちんぼ様あっ」
「愛実のスケベオマンコっ、串刺しにしてください……っ☆」
悔しくて歯軋りして、手のひらに指の爪を食い込ませる隆彦の前で、権造はそのおぞましいまでにいきりたった剛直を一気にねじ入れる。
「おっ……ごおっ！」
ごちゅんツと膣奥をえぐられて生臭いうめきを漏らす愛実。その結合部から、ぶしッ、ぷちゃッ、ぴちゃッ、ぴちゃぴちゃぴちゃッと透明な飛沫が撒き散らされる。挿入されただけでイったのだ。そんな愛実の膣肉を、権造はこれでもかと乱暴に、容赦なく突きまくる。愛実の柔らかな肉体を拘束した縄が鴨居をぎしっぎしっぎしっ！と激しく軋ませる。権造が肉棒を一突きするごとに、愛実の身体はわずかに後ろに揺れる。愛実をブランコのように揺らして生のオナホ扱いするような、そんなオスの性欲処理に、愛実が歯を食いしばりながらヒイヒイと悲鳴をあげる。そしてそれでも権造が手加減せずにつきまくと、今度は噛み締めていた唇をOの字にして、んほお、おほお、とお系の生臭い喘ぎ声を撒き散らし始める。そんな愛実の痴態に、権造もオスの本能を刺激されてどこに出して欲しいかとうめきながら尋ねる。
「ナカにっ、オマンコにっ、ドピュドピュしてへえっ！ ご主人様の子種汁うっ！」
「おっ、おおおっ、孕ませてやるっ、使用人の子種をっ、孕ませてやるぞおっ！」
「ああっ、来るっ、オチンポビクビクしてるうっ！ 御免なさい隆彦さんっ、孕んじやうっ、権造さんの、ご主人様の子供、孕むっ、孕んでいぐうううッ！」
権造の腰がビクンと跳ねて、固体のようなゼリー状の精液がみっちり愛実の膣内を埋め尽くす。その衝撃におほおおおおおおと絶頂の雄たけびをあげる愛実。権造の怒張が跳ねて膣奥に精液を吹き付けられるたびに感極まった声をあげて「んおおっ、おっ、ほおおおお……っ☆」と、快感の波に浸りきる。
「はあああ……っ、はあああ……っ、はあああ……っ、んんふう……☆」
権造が腰を引き、にゅるんと怒張が抜けるとぼたぼたぼたっ精液が木の床に落ちていく。隆彦もそんな愛妻の様子を見ながら、調教室の床の上にびゅるっと精液を吐きこぼす。権造の精液と隆彦の精液が地面で一つになり、オスの匂いをむわりと立てる。嫉妬と怒りと興奮。権造に愛実を抱かせることで毎度身体を渦巻く感情。それが沸騰したままおさまらず、隆彦はそのまま衝動的に愛実のアイマスクに手をかけて、上にずらす。

	<p>「へあ……はあああああ……っ☆」</p> <p>白目をむきかけた焦点を失った瞳。その瞳に理性が戻った時、新しい日々が始まりを告げる胸を高鳴らせる隆彦の前で、愛実の膣からぶりゅりゅりゅりゅりゅと下品な音が細く長く鳴った。</p> <p>■エンド1「愛妻の啼く夜」</p> <p>■スタッフロールの再生 →タイトルへ</p>
kag005_13 ●場所 廊下・昼 ↓ 彩花の部屋・昼	<p>「ところで権造」</p> <p>「へえ」</p> <p>「今夜は彩花さんと出かけようと思うんだ」</p> <p>「……へえ」</p> <p>「今夜は権造と愛実が二人きりだから、宜しく頼んだよ」</p> <p>「くくっ、畏まりました」</p> <p>愛実と二人きりにするということは、愛実に何をしてもいいということだ。それを理解した権造がいやらしく笑う。権造と分かされると、隆彦はそのまま彩花の部屋を訪れる。</p> <p>～彩花の部屋・昼～</p> <p>「彩花さん、入るよ？」</p> <p>「……はい。どうぞ」</p> <p>普段は義理の母親の顔を保つ彩花だが、二人きりになると途端に牝の匂いを漂わせる。そんな彩花の姿に隆彦もまた興奮しながら、告げる。</p> <p>「掲示板の連中が、そろそろ新作が見たいらしくてね」</p> <p>「……っ」</p> <p>「今夜は二人で出かけようか？ 彩花」</p> <p>彩花は隆彦の言葉に、はああ、とうっとりとした吐息をついて答える。</p> <p>「分かりました……隆彦さん……」</p>
kag005_14h ●場所 ラブホテル ●使用 CG *オナニー H190 H191 H192 H193 *立ちバック H194 H195 H196	<p>くちっくちっくちゅっくちゅう——</p> <p>淫らな粘着音がラブホテルの一室でかき鳴らされている。音の主は変装した彩花。彩花はフォックスタイプの眼鏡をかけて、ドールボブの銀髪ウィッグをかぶり、蛍光ピンクのボディコンスーツ＋蛍光ピンクＴフロントに身を包んで、必死になって自分の股間を揃えた指で弄り回している。（彩花の格好については画像資料フォルダにH190〇〇というファイル名で入っております）そんな様子をビデオカメラで撮影している隆彦。年甲斐もないみっともない格好をしているのに、おまけに撮影もされているのに、必死になってオナニーにふけている彩花を言葉で責める隆彦。</p> <p>「誰に見られるかも分からないのに、カメラに向かってマンコを突きつけて、彩花は本当にド変態のドスケベだな」</p> <p>「はあっ、はあっ、はああっ☆ だって早くオチンポっ、オチンポ欲しい、欲しいのお……っ☆」</p> <p>隆彦をその気にさせたらハメてやると言う約束をしている彩花は、屈んでいる隆彦が構えているカメラに向かって愛液を跳ね飛ばせながら自慰にふける。そんな彩花の浅ましい様子をねちねちとなじる隆彦。隆彦になじられればなじられるほど彩花は気持ち良さそうな喘ぎ声を漏らして、そしてあっという間に絶頂に駆け上がる。絶頂の叫び声を共にびしゃっ、ぷしっ、と愛液のしぶきが飛び散って、隆彦が構えているカメラのレンズをびしゃびしゃと潮が打つ。</p> <p>「あゝ～っ、はあゝ～っ、あゝ～っ、おまんこ、早くうう……☆」</p> <p>絶頂の余韻にひたりながらも、カメラに向かって膣肉を晒し続ける彩花。そんな彩花の姿に、隆彦も辛抱が出来なくなる。三脚にカメラを立てる隆彦の姿に、彩花は期待で一杯の顔をする。そんな彩花の後ろに回ると、隆彦は一息に立ちバックで挿入する。はじめはＴフロントを右手でずらして挿入を手伝い、ノってきてからは右手で右乳首を自分でこねて快感をむさぼる。彩花も隆彦も瞬く間に快感に酔いしれて駆け上がっていき、同時に絶頂を迎える。精液を膣内にたっぷり注ぎ込まれながら、彩花は甲高い悲鳴をあげて二度目の絶頂に浸る。自分の怒張に串刺しにされながら悶える女を抱きしめつつ、この牝は俺のものだ、と心の中で唸る隆彦。そんな隆彦の心の声に同意するように、彩花の膣肉は隆彦の怒張を貪欲に絞り、精液をすすり上げる。</p> <p>■エンド2「極上の牝義母」</p> <p>■スタッフロールの再生 →タイトルへ</p>
kag005_15 ●場所	<p>※引き続き H179b を表示しっ放し。</p> <p>「……次にここに来るのは冬か。もしかしたらここに俺の子供がいるかもしれないわけだ」</p>

彩花の部屋・消灯 ●使用 CG H179b	自分だけのものにする云々には答えずに、彩花の腹を撫でて言う隆彦。 彩花も自分だけの云々の話題は続けずに言う。 「冬が来るのが、楽しみ……」 ～時間経過の演出～
kag005_16 ●場所 隆彦家居間・夜 ↓ 広間・昼 ↓ 客間・消灯	「はいもしもし。富蔵です。……あ、どうも。どうしましたか？」 淫夢の世界に迷い込んだような夏が終わって二ヶ月ほど経ったある日のこと、権造から連絡があった。良い知らせと悪い知らせが一つずつ——ということだった。 一つは彩花が妊娠したらしいこと。そしてもう一つは、富蔵長太郎が死んだこと。なんでも自室でくびをくくって自殺してしまったらしい。事後報告になってしまって申し訳ないがわざわざ遠くから呼びたてることになってても申し訳ないので連絡は葬儀などもろもろ全てが片付いてからするように彩花に命じられた、と権造が言う。 「富蔵家の実質的な権利につきましては一先ず彩花様が預かられております」 「お正月に帰省された際にでも、遺産分配などのお話をゆっくりさせていただければと彩花様が申しおりました」 ～黒背景～ ～時間経過の演出～ そんな連絡を受けてから更に三ヶ月が経ち、僕は再び富蔵家を訪れていたと独白する隆彦。 季節は冬。 1 2 月の 2 9 日。もうすぐ大晦日。 愛実「洋服もお似合いです、彩花さん」 彩花「ありがとう。お腹が大きくなってしまうと、和服だと過ごしにくくて」 富蔵家の広間。時刻は昼過ぎ。隆彦の目の前にはマタニティウェアに身を包んだ彩花がいる。冬用のマタニティワンピースにタイツを合わせてその上にカーディガンを羽織っている彩花のお腹はぽこりと膨らんでいる。そんな彩花のお腹を見て目を輝かせている愛実と、母親の顔をしてお腹を撫でている彩花。わたしも早く子供が欲しいなあ……と隆彦を見つめる愛実。がんばるよと笑う隆彦。大丈夫。子供なんてすぐに出来るわよ。二人とも若いんだから。と愛実に気付かれないように隆彦に意味深な視線をちらりと送る彩花。 「小難しい話は明日以降にして、今夜はゆっくりして頂戴ね」 ありがとうございますと彩花の言葉に返ししながら、隆彦は夜のことを思い、腹の底でじわじわと興奮を沸き立たせる。
kag005_17 ●場所 客間・消灯 ↓ 黒背景 （冬の富蔵家廊下、背景は無し） ↓ 彩花の部屋・消灯	～客間・消灯～ ～時間経過の演出～ 「……」 帰省したその深夜。客間にて布団から身体を起こす隆彦。愛実はお酒を飲んでいい気分になってしまったようで、ちょっとはそっとでは起きそうにないくらい熟睡している。隆彦は浴衣の上に羽織を引っ掛けて、静かに障子をあけて部屋を出る。 ～黒背景～ 向かう先は勿論決まっている。隆彦は静かに足を運ぶと、目的の部屋の前に立つ。 すると部屋の中の人物——彩花も隆彦の来訪を待っていたのだろう。先に声をかけられる。 「寒い空気が入って来ちゃうから、すぐに閉めて頂戴ね？」 その声に秘められた怖気を催しそうになるくらいの艶めかしさに、隆彦はごくんと息を呑みながら障子をあける。 ～綾花の部屋・消灯～ 部屋をあけると、そこにはすっかり母の顔ではなく女の顔をした彩花が待っている。 障子越しに薄く差し込んでいる月明かりを浴びながら、彩花は淫らな微笑を浮かべる。 「数ヶ月ぶりの隆彦さんのオチンポ、今夜はたっぷり味わわせて下さいね……？」 ぱさりと服を脱ぎ捨てて全裸になる彩花。隆彦もふらふらと、蛾が光におびき寄せられるように彩花に近寄り、そして全裸になる。
kag005_18h ●場所 彩花の部屋・消灯 ●使用 CG	「ああんっ、欲しかった、ずっとこれが欲しかったのよお……っ☆」 黒いベビードール（モデル：H200 ベビードール.jpg）を着ているボテ腹彩花が背面座位の格好で隆彦に跨り、顔を後ろに振り向かせてペロペロと舌を絡めながら喘いでいる。隆彦は母体を慮って彩花を抱え気味にして、彩花に尻を余り振らせずに、自分が積極的に下から腰を突き上げて膣をかき回している。数ヶ月ぶりのおちんぽと嬉しそうに言いながら喘ぐ彩花の姿は母親ではなく女そのもので、隆彦は左手で膨らんだ腹を撫で回しながら、赤ん坊に「お前の母さんはとんだ淫乱だぞ」と

H200 H201 H202 H203 H204 H205 H207	<p>ニヤつきながら声をかける。彩花は「赤ちゃんに変なこと教えないで」と甘ったるく喘ぎながら、「男の子だったらお父さんみたいに、女を狂わせる子になるのかしら……？」と隆彦に流し目を送る。「女の子だったらお母さんに似た淫乱になるのかもな」と返す隆彦。その視線は彩花の乳房に。妊娠して更に大きくなった乳房はベビードールに包まれながらもゆさゆさと量感たっぷりに揺れている。もう母乳が滲み始めて困ると訴える彩花に、飲んでも良いかと尋ねる隆彦。彩花は乳首の色が変わって恥ずかしいと言うのだが、隆彦はそんな彩花の言葉を無視して、ベビードールの胸元から右乳房を取り出してしまう。「下品ですけべな色だ」と評する隆彦に感極まった表情で「ああああ……は、恥ずかしい……っ」とうっとりした声を漏らす彩花。隆彦はそんな彩花の右乳房の先端を持ち上げて、ちゅうと吸い上げる。そしてそのままじわっと滲み出す母乳をしゃぶりあげながら腰をとんとんと使って怒張を突き上げる。搾乳の快感と膣奥をゆるく掻き混ぜられる快感に、彩花は隆彦を置いてあっという間に絶頂に達してしまう。</p> <p>「ああっ、はああっああああっ、くあああ……っ☆」</p> <p>ヒクヒクと肢体をひくつかせながら、ちょろちょろと透明な汁を弧を描いて漏らす彩花。余りにも早い絶頂に隆彦は「子供の前でお漏らしなんて恥ずかしいママだな」と苦笑しながら、彩花の尻を持ち上げていったん怒張を引き抜く。</p> <p>「んっ……」と残念そうな声を漏らす彩花に、隆彦が囁く。</p> <p>「ナカイキはともかくとして、ナカダシは赤ちゃんがかわいそうだからな。……言いつけどおりにしたか？」</p> <p>「はあ、はあ、はあ……したわ、しました……」</p> <p>隆彦の問いかけにうっとりしながら頷く彩花。隆彦は昼間彩花に腸内を綺麗にしておくように言いつけていた。隆彦は頷く彩花のアナルに亀頭を押し当てると、にゅぐぐっと怒張を突き入れる。アナルに焼けた肉竿を入れられる快感に喘ぐ彩花。余りの絡みつきと締め付けに呻く隆彦。アナルの蕩け具合に唸る隆彦に、彩花は妊娠が分かってからは毎日のようにアナルでオナニーしてましたと恥ずかしげもなく言う。膣とは違う快感に呻き呻きしつつ腰をばっつんばっつんと突き上げる隆彦。豊富な肉体がそのたびに波打って、左手でクリトリスを弄り回して快感を増幅しようとしている欲張りな彩花の肉体は、二度目の絶頂に向かって駆け上がる。隆彦も彩花のアナルの強烈な絡みつきに、怒張が根元から引き抜けそうな快感に襲われて、腰が溶けそうな射精感が全身を駆け巡る。大量に精液を放出する隆彦。アナルにたっぷりとザーメンを注入されながら、彩花は舌をくねらせながら二度目の絶頂に押し上げられる。</p> <p>■エンド3「真実は闇の中に」</p> <p>■スタッフロールの再生 →タイトルへ</p>
kag005_19 ●場所 客間・屋	<p>※kag005_04 からここに来ています</p> <p>と、愛実が「あの……」と隆彦に話しかけてくる。</p> <p>今日は午前中からお父様にお手伝いを頼まれていて……と申し訳なさそうに言う愛実。</p> <p>長太郎が最後の最後まで愛妻の肉体をしゃぶり尽くすつもりなことを理解して、どくどくと不快な鼓動を高鳴らせながら興奮する隆彦。平静を装って「娘が欲しいって言ってたこともあるみたいだし、きっと義理とは言え娘が出来たみたいで嬉しいんだよ」「折角の帰省なのに申し訳ないけど、力になってあげてくれないかな」と、やはりここでも何も知らない善良な夫を演じる。</p> <p>共有フラグが2 =kag005_20 玲人フラグが2 =kag005_23 それ以外=kag005_26</p>
kag005_20 ●場所 客間・屋 ↓ 田舎道・屋 ↓ 公民館・屋 (背景黒)	<p>「お前の愛する妻がどこで何をするのか見たければ、今から公民館に来ると良い」</p> <p>家を出た長太郎からすぐにメールが届いて、隆彦は家を出る。</p> <p>そして田舎道を歩き始める。歩き始めてすぐに長太郎が再びメールが入ってくる。</p> <p>「公民館についたら裏口へ回れ」</p> <p>公民館につき、長太郎と合流する隆彦。長太郎はこちらへこいと隆彦の手を引くと、公民館の裏口から中へと入り、使われた形跡の無い扉の鍵をあけて、真っ暗な部屋へと入る。</p> <p>～黒背景～</p> <p>部屋に入ると暗闇の中にいくつか光が走っている。それが穴であることを理解すると同時に、愛実でも彩花でもない女の声が聞こえてくる。</p> <p>「これから何をするか、もうみんなは聞いているわね？」</p> <p>「はい」とか「はいい」とか元気な少年の声が聞こえてくる。(以降、子供という表現はNGです)</p>

	<p>「これからみんなにはクジを引いてもらいます。それで相手を決めて、かがち様遊ばせの練習をします。もうみんな精液が出たんだから、一人前の男の子だもの。セックス、出来るわよね？」</p> <p>今度は複数の女の子でいやらしい含み笑いや、楽しみだわあ、という声が聞こえてくる。闇の中で息を飲んでいる隆彦に、長太郎が言う。</p> <p>「くくっ……これから村の女たちがな、坊主どもの筆卸をしてやるのよ」</p> <p>「女と坊主しか入れんことになっているが、わしは特別だからな。わしの息子であるお前も特別だ」</p> <p>「自分の妻が、オナニーも覚えたばかりのような悪ガキどもの穴ぼこにされるのを楽しむと良い」</p> <p>そう言って、長太郎は隆彦に鍵を預けて部屋を出て行く。隆彦はバクバクと心臓を高鳴らせながら、ゆっくりと隠し部屋の鍵を回して、それから覗き穴の一つに顔を貼り付ける。壁一枚を隔てた隣室からは、既に熟れた女の悩ましい声が聞こえ始めていた。</p>
kag005_21h ●場所 公民館・屋 （立ち絵背景は無し） ●使用 CG *キスの手ほどき N019 N019a N019b *愛撫と 6 9 H210 H211 H212 H213 *セックス H214 H215 H216 H217 H218 H219 *事後 H219a	<p>kag004_10h と同じ、茅葺屋根の公民館の畳の上に規則正しく幾つも並べられた白い敷布団の上に、白装束を着た熟れた村の女性たちが膝立ちになっている。そんな女性たちに抱きしめられて、村のショタたちがまずはキスの仕方を習っている。</p> <p>そんな熟れた女性の中に白装束を着た愛実もいて、周りの女性と同様に可愛い顔立ちをしたショタにキスを教えようとしている。</p> <p>「ボクのお名前はなんていうの？」</p> <p>「……ま、まもる」</p> <p>「まもるくんは、わたしみたいな女のひとと、えっちなことして、いやじゃない？」</p> <p>「……い、いやじゃない……お姉さん、この中でいちばん綺麗だもん」</p> <p>「あら、うふふ……まもる君は女の人の喜ぶ言葉、知ってるのね？」</p> <p>それじゃあ今日は言葉以外に女の人を喜ばせる方法、たっぷり教えてあげる——と、愛実は嬉しそうに言う。手始めにキスの練習開始。胸元や首筋など唇ではない場所にキスをさせたり、唇を重ねただけだったりと軽めのキスの練習をした後は、唇を絡めて唾液を交換するようなねっとりとしたキス。ちゅぴちゅぴ、くちゅくちゅという水音が幾重にも重なって公民館中に響く。</p> <p>「はあ……じよ、上手よ……そう、んちゅ……舌を……んちゅむ、ちゅう、吸ったり……ちゅぶ」</p> <p>長太郎や権造に弄ばれるのではなく、自分が若い男の子の上位に立って性の手ほどきをしていることに、愛実はある程度に興奮している。ショタも愛実とのキスで見た目に似つかわしくないう立派な怒張をバッキバキに勃起させながら腰をもじつかせたりしている。愛実が一切嫌悪しておらず、それどころか少年のことを愛おしそうに抱きしめながらキスの手ほどきをしてやっていることに、隆彦は今までに無かったたぐいの嫉妬心に襲われて、興奮する。</p> <p>一通りキスをした後は、愛実が布団に仰向けに寝そべる。周りの女性たちも愛実と同じように布団に仰向けになっている。（全員が同じ方向を向いているのではなく、縦に並んでいる女性Aの頭と女性Bの頭が向き合っている感じ）女たちはみな白装束の前をはだけ、足を緩やかに開いて、少年たちの手を引いて自らの股間へと導いている。愛実も周囲の女性たちにならってショタの手を引いて自分の股間に導いている。どこが大陰唇で小陰唇で尿道でクリトリスで、と女性器の構造を教えてやり、一番最後に膣口がどこかを教える。優しく触るように言ってショタに恐る恐る触れながら愛撫の手ほどき。にゅるんと指を飲み込んだ膣のうごめき、愛液のぬめりなどに息を呑みながら熱中するショタ。そんなショタの丁寧な愛撫に感じ入った顔をしながら、愛実も興奮の面持ちで切り出す。</p> <p>「……触るだけじゃなくて、舐めたりもすると、良いのよ」</p> <p>「……舐めあいっこ、しましょうか……？」</p> <p>愛実に言われるがまま、愛実の顔に跨るようにして怒張を押し付けるショタ。イラマチオ気味のフェラチオをされながら、ショタにクンニされる。愛実とショタの69。ショタは生まれて初めてのフェラチオに情けない声をあげて、あっという間に射精してしまう。愛実もショタが可愛らしく悲鳴をあげながら腰を震わせて放出している精液を、こくんこくんと飲み干していく。放尿後のように、ぶるぶると身震いしながら表情をのろけさせるショタ。こんなに気持ち良いことはじめてとうとうしているショタに、愛実も自ら膣肉を割り広げて、それから言う。</p> <p>「ここにおちんちんを入れたら、もっと気持ち良いのよ……？」</p> <p>すぐに硬さを取り戻すショタチンコ。ショタは高熱に浮かされるような顔をしながら、愛実に促されるがまま、濡れそぼった膣穴に怒張を押し当てて、そのまま腰をぐいと進める。にゅぶぶぶっと一息に膣に飲み込まれる肉竿。余りの気持ちよさにどうしていいかわからないという顔をして呻きながら硬直してしまうショタと、こつんと奥を軽く押してくるショタチンコに快感の声をあげる愛実。ショタは愛実に男の子なんだから頑張っ☆と励まされ、腰使いなどを教えられるがままおずおずとピストンを開始。はじめはぎこちないショタの腰使いも、より強い快感が欲しいというオスの本能と、目の前の女を喘がせたいという男の子の意地でなめらかさを増していく。余裕たっぷりに喘いでいた愛実の顔から徐々に余裕が消えていって、その様子に自信をつけたショタが一生懸命になって腰を振りたて、愛実を追い詰めに掛かる。そして絶頂を迎える愛実とショタ。ショタに膣内射精されながら、愛実は口を大きく開いて絶頂の悲鳴をあげる。射精したショタが繋がったまま可愛く喘ぎ断続的に射精を繰り返している様子に、愛実は母性を刺激されながら牝の本能もたぎらせる。「男の子なんだもの……まだまだ、頑張っ☆ピュッピュ出来るわよね……☆」ショタの萎えていた怒張が、愛実の中におさまったムクムクと膨らんでいって、愛実が嬉しそうに声をあげる。</p>

	<p>事後。</p> <p>「はあー……はあー……はあー……☆」</p> <p>満足そうな吐息をついている愛実。その膣口からはたった今まで注がれ続けていた大量の精液が逆流して白い布団の上にどろどろと水溜りを作り上げている。愛実をさんざんイかせまくったショタは、愛実の膣内に射精しまくってマーキングでもしたつもりなのか、すっかりオスの自信を手に入れた顔をしている。</p> <p>「オマンコ……まもるくんの精液の味、教え込まれちゃったわ……」</p> <p>うっとりと言う愛実に、ショタがいったいのオスの顔をして、目の前で揺れる尻を叩いて言う。</p> <p>「まなみのまんこは、おれだけのものなんだからな。わかったか？」</p> <p>「分かった、分かったわ。わたしのオマンコは、まもるくんだけのものよ」</p> <p>年下の少年に乱暴な扱いをされていることに、明らかに嬉しそうな顔をする愛実。</p> <p>そんな愛実を見ながら、隆彦は暗闇の中で何度目か分からない射精をするのだった。</p>
<p>kag005_22</p> <p>●場所 公民館・昼 (立ち絵背景は無し)</p>	<p>女たちのショタ手ほどきを見終わった後に暗闇の中で呆然としている隆彦。ショタたちはみな夢見心地の顔で出て行って、公民館では女たちが身だしなみを整えている。いつ出ようかタイミングを計っていると。女たちの会話が聞こえてくる。</p> <p>「あんた、富蔵様のところの息子さんのお嫁さんだって聞いているけど本当なのかい？」</p> <p>「え、ええ、はい……」</p> <p>村の女に話しかけられて答える愛実の声に、再び意識をそちらに集中する隆彦。</p> <p>部屋を覗くと、汗まみれでけだるげにした女たちが、愛実に視線を向けていやらしく笑っている。</p> <p>「それじゃあ、今年のかがち様鎮めは、あんたのお役目かねえ？」</p> <p>「……かがち様、鎮め……？」</p> <p>怪訝そうに尋ね返す愛実。隆彦も聞いたことのない言葉に疑問符を浮かべていると、周りの女たちがいやらしく笑いながら続ける。</p> <p>「とっても気持ちいいことさ」</p> <p>「うふふ。あれは確かに……ねえ」</p> <p>「こらこらみんな、まだ日の上がってるうちから、かがち様の名前を出しちゃいけないよ」</p> <p>「あんただって言ってるじゃあないの」</p> <p>くすくすと笑う女。愛実は何も答えない。答えないが今起きたこと以上にいやらしいことが待っているのだ……ということをなんとなくさとした顔をしている。隆彦も、今夜何かが起きるのだということを知って、一度は静まった黒い興奮がドクンドクンとぶりかえしていることを自覚する。</p> <p>「夜にお声がかかれば、全部はつきりするさ」</p> <p>女たちのいやらしい笑みに、愛実の白い喉がこくとぜん動するのを隆彦は見る。</p> <p>→kag005_27 へ</p>
<p>kag005_23</p> <p>●場所 客間・昼 ↓ 田舎道・昼</p>	<p>愛実が部屋を出てすぐに、「愛実を連れてどこに行くつもりなのか」と長太郎にメールを送る隆彦。するとすぐに長太郎から電話が掛かってくる。</p> <p>「くくっ、わしはどこにも連れていかんぞ」</p> <p>「——え？」</p> <p>「昼から出かけるから口裏を合わせてくれとは、頼まれたがなあ」</p> <p>長太郎が愛実を連れ出したわけではなかった——そして愛実が自分に嘘をつき、父親に口裏を合わせまで頼んで出て行った。つまり愛実に嘘をつかれたのだ。その衝撃に帰省してから一番大きい衝撃を受ける隆彦。隆彦が硬直していると、長太郎が愉快そうに低く笑う。</p> <p>「お前たちと同じ、彦太市から帰省している若いのがいたろう？ あれがな、愛実のことを相当気に入ったらしくてなあ……」</p> <p>「出来ることなら明日は朝からハメ倒してやりたい……などとぎらついた目で言われてはな、村人のことを第一に考えるわしとしては断りにくいだろう？」</p> <p>「くくっ……あいつは幼い頃から村の女を実家の牛小屋に連れ込んでわ泣き狂わせておった悪餓鬼でな、あいつのお陰かどうなのか、あそこの牛は頻繁に発情しておったわ」</p> <p>「あそこの二親は昼から出ているそうだから、今頃は予定通りこれ幸いと牛小屋で牝牛を発情させているのではないか？」</p> <p>場所が知りたいかと聞かれて、ああ知りたいと素直に答える隆彦。</p> <p>その股間は既に痛いくらいに張り詰めてしまっている。</p> <p>～田舎道・昼～</p> <p>長太郎に教えられた道を、はやる気持ちを抑えながら足早に進む隆彦。全力疾走したい気持ちで一杯なのだが、もし走っている姿を愛実に見られたりしてしまったら怪しまれるからと、早歩きで玲人の家へと向かう視界は開けているので、玲人の家を見つめながら、愛実と玲人の姿が視界にないことを確認しながらその建物へと近付いていく。ほどなくして、玲人の家の駐車場の入り口までやってくる</p>

kag005_24h

●場所

田舎道・昼

↓

牛舎・昼

(立ち絵背景無し)

●使用 CG

H220

H221

H222

H223

H224

H225

「……」

息を呑みながら、玲人の家の敷地に足を踏み入れる隆彦。家があり、納屋らしきものがあり、その奥に牛舎や、牛がのんびり資料を食んでいる放牧地が見える。入り口や窓からは死角になっているところを選びつつ牛舎へと近付いていく。一步、また一步と歩みを進めるたびに隆彦の心臓がドクンと力強く鳴る。いつのまにか口の中はカラカラで、だというのに舌の裏には大量の唾液が溜まっていて、隆彦は心臓の鼓動を早鐘のように鳴らしながらそれをゴクンと飲み干す。

「ああっ、あっあっあっ☆　いくッ、イクイクイクッ、イクイクイクううううッ☆」

牛舎まであと少しということまで近付いた瞬間、聞き覚えのある声の、聞いたことのないような絶叫が青空の下に響く。叫びだしたくなる気持ちを抑えて牛舎の裏手に息を殺しながら回ると、隆彦は壁に空いていた穴から中を覗く。

～H220 表示～

牛のいない牛舎のなかで、愛実が地面に並べられた牛のえさ箱の上に走っている牛押さえの細い丸太を掴んで後ろに尻を突き出している。愛実の格好はスカートと靴だけを穿いてあとは全裸。下着は抜き取られて、上着も全て脱がされて、乳房や股間を丸出しにして後ろから立ちバックで玲人に突かれている。玲人はズボンとボクサーパンツをいっしょくたに膝下まで下ろして、着ていたシャツは脱いでいる。今しがた絶頂を迎えたばかりなのか、愛実がビクビクと肢体を引きつらせながら膝を笑わせていて、それを玲人が腰を持って支えている。

「くっくく、マジでさっきからいき過ぎだっ。どんだけスケベなんだよ愛実さん」

「はあんッ、だっ、だっへ……すごいよ、シリコンチンポっ、すごすぎるう……っ☆」

絶頂の悲鳴を上げたばかりの愛実をニヤつきながら見下ろすと、玲人は再び激しいピストンを再開する。愛実はその外であることもどうでも良いというところけきった顔で喘ぎまくる。周囲に漂う獣の匂いとあいまって、二人は本当に本能のままに交尾しまくる動物のようだ。

「へへっ……しかし愛実さん、あんた本当に牝牛だね。こんなにたぶんたぶんさせちゃってさあ」

「んあッ、ああっ……やっ、やあ……言わないでえ……っ」

「今更恥ずかしがるなんておかしいでしょ。こんな真昼間から外でアヘアヘ叫んじゃってるのにさ」

「だっ、だっ、だっ……これっ、これがっ、奥う、突くとっ……☆」

「頭の中、真っ白になっちゃうっ……はあッ、はあんっ☆」

「あ～あ、俺の種で孕ませて、この爆乳からミルクをびゅうびゅう噴き出させてやりてえなあ」

愛実の胸を揉みしだき、牛の乳をしぼるようにする玲人。愛実は若い男に妊娠させられて母乳を噴出しながら犯される自分の姿を想像して、感じた声を出してしまう。愛実の膣肉が露骨にざわめいて収縮して、玲人はそのありさまにニヤニヤと興奮を隠し切れない。

「なあ、愛実さん、彦太に戻ってもさ、ちょくちょく会おうぜ……？」

「えっ、ええ……？　で、でもっ、それはあ……っ、んっ、んんっ」

「俺たち身体の相性最高じゃん。もっともっとすげえことしてやるからさ」

「もっと……これよりもっと、すごいことっ、なんてえっ……」

「愛実さん、ドスケベの変態だろ？　SMとか露出とかさ、ＡＶ出演なんかもいいな。俺のツレに黒人兄弟いるから、そいつらにレイプさせても面白いかもしれねえ……」

「こっ、黒人……ＡＶっ……そ、そんなの……そんなことっ」

怯えたような素振りを見せる愛実だが、その膣肉はますます絡みついて玲人を喜ばせる。オマンコは賛成してるみたいだなあ、愛実……と、いよいよ玲人は愛実を呼び捨てにして腰を更に激しく突き上げる。戸惑いの声をあげていた愛実の表情から理性が瞬く間に抜け落ちていって、下品な喘ぎ声がどんどんボルテージをあげていく。

「おっ、またマンコがヒクヒクしてきてるな。なあオイ、いきそうなんだろ？　なあ？」

「ひいっ、ひっ、いいっ、いくっ、いくわっ、いくッ、いくうッ☆」

「イかせて欲しかったら言えよ。あっちに戻っても俺と会うって言え。俺とセフレになるって言え、オラ。言えっ、オラ、オラ、オラッ！」

パンッパンッパンッと強烈に腰を叩きつけられて、愛実は鼻水をたらしながらよがりまくる。

「なるッ、なるうッ、セフレになる、なるからあッ……！」

「くくッ、このドスケベ妻が。いい答えだ。なるな？　俺のセフレに、オマンコ奴隷になるな？」

「んああッ、あッ、あッ、ああッ！　なるっ、なりますっ、オマンコ奴隷っ、玲人様のオマンコ奴隷になりますうっ！　だからイかせてっ、イかせてくださいい……ッ！」

恥も尊厳も捨てて愛液を撒き散らしながら尻をくねらせる愛実。そんな愛実の返答に満足したのか、玲人はいよいよラストスパートをかける。膣奥を突かれ、身体の奥深くをゆさぶられる牝の快感に、愛実はあるという間に絶頂にかけあがっていく。そして玲人も、あっという間にオスをむき出しにした声を出す。

そして躊躇いなく膣内に精液を注ぎ込む玲人。愛実は「くあゝあゝあゝあゝあゝ！」と濁点交じりの雄たけびをあげながら潮を噴き、絶頂へと到達する。

「はあああ……すごお……っ、すご……ひい……☆」

玲人とのセックスに深い満足感を覚えた顔で、愛実はうっとりとして囁く。

鼻水をたらし、よだれをとろと垂れ流した、情けない顔で。

<p>kag005_25</p> <p>●場所 牛舎・屋 (立ち絵背景は無し)</p> <p>●使用 CG H225</p>	<p>※引き続き H225 を表示しっぱなし。</p> <p>手も使わずに射精してしまう隆彦。 「——！」</p> <p>嫉妬と興奮が燃え盛る瞳で覗きを続けていると、ふと玲人と目が合う。玲人は隆彦を見つめて、そしてニヤリと笑うと、愛実の尻を撫でながら言う。 「かがち様鎮めがあるまでまだまだ時間があるなあ……」 「……はああ、はああ、はああ……かがち様……鎮め……え？」 「くっく、愛実みたいなドスケベにぴったりのイベントだよ。……まあそれまでは俺の部屋でハメまくってやるか。立ちバックばっかりだと疲れるからな。オラ、行くぞ」 「……ふ、服を……着ないと……」 「誰も見てねえよ。なんならこのまま駅弁で運んでやろうか？」 「や、いやぁん……歩く……歩きますからぁ……☆」</p> <p>ぼたぼたと陰から精液をこぼしながら、愛実は玲人に命じられるがままに牛舎を出て、それから家の中へと戻っていく。これからどんな風に愛実が泣き喚かされるハメになるのかを考えながら家を見上げると、二階の窓にシャッとカーテンが掛かる。隆彦はどす黒い熱が胸のなかで燃え盛っているのを自覚しながら、そのまま誰にも見つからないように富蔵家へと戻る。 『かがち様鎮め』 その言葉が一体何を意味するのかを考えながら。</p> <p>→kag005_27 へ</p>
<p>kag005_26</p> <p>●場所 客間・屋</p>	<p>愛実が部屋を出てすぐに長太郎にメールを送ったりワン切りしたりするも、全く無反応でやきもきする隆彦。いつ長太郎から返事が来るか分からないので客間でまんじりともせず待ち続けるのだが、全く連絡が無いまま時間は刻一刻と過ぎていく。 そのまま数時間が経過して、長太郎が帰ってきたのは午後 17 時を回る頃だった。 隆彦は権造に呼ばれ、長太郎の私室へと赴く。</p> <p>→kag005_27 へ</p>
<p>kag005_27</p> <p>●場所 書斎・タ</p>	<p>※kag005_22 (シヨタ筆卸) か kag005_25 (玲人牛舎ファック) か kag005_26 (一人で留守番) から合流するシーンですので、そのいずれかから合流しても矛盾の出ないようなテキストをお願いします。</p> <p>「愛実は……戻ってないんですか？」 「ああ、戻っていない。今頃準備で忙しいだろうから」 何の準備だといぶかしがる隆彦に、長太郎は『かがち様鎮め』という神事について説明する。</p> <p>-----</p> <p>概要書上部の各種設定の項目より抜粋</p> <p>かがち様鎮め 8 月 16 日、白縄村の地の底に沈んでいるかがち様の頭の直上にあると言われている「白縄神社」の本殿にて行われる神事。巳女（みこ）と呼ばれる若い女を選出し、神社のご神体（黒檀で作られた巨大な男根）の前にて、村中の男で輪姦して精液を注ぎ込む。その時巳女が男子を身ごもれば村長の子となり、将来村を継ぐことになる。女子を身ごもれば将来優先的に巳女としてかがち様に捧げられる。この時に生まれた巳女は、なぜか皆男を魅了してやまない女性として育つという言い伝えがある。</p> <p>-----</p> <p>「村長であるわしが選んだ今年の巳女は、お前の愛しい妻よ」 その言葉に衝撃を受け、強い怒りを覚えながらも、でも心のどこかで興奮している自分がいることにも気付いており、何も言えずに立ち尽くす隆彦。そんな隆彦に長太郎は問いかける。 「お前はただ物陰でそれを見ていれば良い。それとも、見ているだけでは満足出来ないか？」 愛実が大勢に輪姦されている様子を物陰から眺める。なんならビデオで撮影してもいいかもしれない。この数日で、愛実の身体には淫らな悦びが染み付いている。神社に大人しく残ったということは“父親や権造に抱かれたことを知られたくない”という建前はあるかもしれないが、大勢の男たちに輪姦されることを受け入れた……ということだ。もしかしたら、受け入れるどころか淫らな期待に興奮をあらわにしているかもしれない。そんな妻の姿を見たくないと言われてしまえば、勿論見たい。見ているだけでは満足出来ないと言われてしまえば、それもその通りかもしれない。</p> <p>見ているだけにするか。それともそれ以上を求めるか。</p>

	<p>隆彦は思い悩み、そして結論を出す。</p> <p>■選択肢発生 選択肢①見ているだけにする→kag005_28 選択肢②それ以上を求める→kag005_39</p>
kag005_28 ●場所 書斎・タ	<p>「……愛実のそんな姿を見られるのなら、それだけで満足さ」 どちらにするかギリギリまで思い悩みながら、そう結論を出す隆彦。 長太郎はそんな隆彦の返答に満足そうにしながら言う。 「そうと決まれば白装束と面を用意しろ。必要ならビデオカメラも貸してやる。愛する者が汚される喜びを、骨の髄まで味わわせてやろうじゃあないか」 邪悪な笑みを浮かべる長太郎に導かれるがまま、隆彦は富蔵家を後にする。</p>
kag005_29 ●場所 タ焼け空 ↓ 正門・タ ↓ 田舎道・タ ↓ 神社・タ	<p>家を出て、権造の運転する車で神社へと向かう隆彦。 タ焼け空→正門前・タ→田舎道・タ→神社・タという感じで、神社へと近付いていくにつれて、隆彦は興奮と嫉妬と不安で胸を軋ませる。神社の前までやってくると浴衣を着た子供たちや大人たちが大勢いて、その中に白装束を着た男たちが混ざっている。白装束の男たちはみな顔に面をつけて、白縄神社の本殿へと向かっている。長太郎や隆彦もそれに混じり本殿へと向かう。</p>
kag005_30h ●場所 本殿 ●使用 CG H230 H231 H232 H233 H234 H235 H236 H237 H238 H239 H239a H239b H239c H239d H239e	<p>本殿へ足を踏み入れると、大勢の白装束+面の男たちが詰め込まれている室内には、むわりと頭の芯までのぼせてしまいそうな甘い匂いが漂っている。人の中に眠っている獣の本能を呼び覚ます香を焚き染めているのよ、と小声で説明する長太郎。そんな長太郎の説明を聞き流している隆彦。視線は本殿の中央に釘付けになっている。</p> <p>～H230～ 「はああ……っ、ひいい……っ☆ これっ、だめえ、だめえ……っ☆」 本殿の中央には、黒檀で出来た巨大な張り型が台座（刀を置くようなデザインの台）の上に乗る形で横になって鎮座している。（腕は後ろでに柱に回されて、両手首を注連縄で連結。ご神体に跨っている足首同士も、柱に回すように注連縄で連結。下半身の注連縄は若干長さに余裕があって、愛実はまだしもそのままに腰を持ち上げてくねらせている。持ち上げたスペースに男が腰をすべりこませて挿入に繋がります）その横になった張り型に仰向けになるように、全裸の愛実が注連縄でくくりつけられている。愛実の膣には跨っているのと同じような黒檀で出来た張り型が突き立ち、白く泡立ったべっとりとした本気汁が垂れ流れている。愛実のヘソには、行書体で奉納、と書かれたお札が貼られている。巳女役の方はそれこそがち様鎮めの一時間前にはご神体である巨大張り型にくくりつけられて、媚薬を塗り込めた張り型を膣肉に挿入されて香を嗅がされ、肉体を焦らされ続けている。そんな中、神主がかがち様に巳女を捧げる祝詞を唱え続けている。低く唸るような男の声に、喘ぎ続ける愛実の声、香の匂いに、発情した雄と牝の匂い、それらが渦巻く部屋の中、まるで淫夢の世界に紛れ込んだような感覚に浸りながら、もうすぐで愛する妻が大勢の男たちに揉みくちやにされてしまう……という予感と興奮に息を荒くする隆彦。 そしてぴたりと祝詞がやんで、一瞬、本殿が静寂に包まれる。 そんな淫らな静寂のなかで、愛実がもう我慢出来ないという響きを伴って言う。 「かがち様あっ……お慰めっ、奉りますうっ！ お慰めさせて下さいい……っ！」 愛実の叫びに男たちは息を呑んで白装束を脱ぎ捨てる。ヘソにまで反り返った無数の怒張に囲まれて、愛実が瞳を輝かせる。</p> <p>男の一人が、愛実の膣から張り型を抜き取って、ごぼりと本気汁があふれ出した膣内に一息に挿入する。歓喜の悲鳴をあげる愛実。30代前半ほどか、筋骨逞しい浅黒い肌の火男面をかぶった男は愛実のことを肉オナホか何かを扱うかのようにフンフンと腰を振りたてて、ケダモノじみたピストンを容赦なく繰り返す。男の長くは無いが異様に太い怒張の快感に愛実の悲鳴上げて、あっという間に高ぶっていく。 「あああっ、いくいくいくッ、いぐっ、もういぐっ、もうイぐうううッ！」 獣のような声をあげて絶頂を迎える愛実。男も醜い呻き声をあげながら、びゅるると膣内に精液を注ぎ込んでいく。二度、三度と執拗に腰を押し付けると、男は怒張を「ぬぼっ」と引き抜く。太い精液の糸が亀頭と膣口を結んでいる。愛実のごぼっ、ごぼっご神体に精液を逆流させて大きく</p> <p>胸を喘がせていると、次の男が早速愛実ののしかかりに掛かる。痩せた肉体の老人で、怒張はまるでウナギのように細長い。そんな生き物じみた怒張が、愛実の膣肉ににゅるんと一息に挿入される。 「いいっひいいいいッ——おっ、ぐうんッ！」 ぐりっとならぬ奥を押されて活を入れられる愛実。仰け反っていた頭が戻って、何を入れられているのか分からないという顔で結合部を見る。一番奥を突いてもまだ根元が余っている怒張を、結合部を</p>

	<p>玲人フラグ= 2 →kag005_36</p> <p>※ジャンプ先無しエラー回避に、どちらでも無い場合は玲人フラグ2の場合に飛ぶ命令を入れたほうが良いかもしれません)</p>
<p>kag005_33</p> <p>●場所 隆彦家居間・昼</p>	<p>「そう言えば……」</p> <p>愛実の行ってらっしゃいのキスを終えてから、家を後にする前に振り返る隆彦。</p> <p>「今日は近所の子たちに勉強を教える日なんだっけ？」</p> <p>「ええ。そうです」</p> <p>にこりと微笑む愛実。愛実は最近、近所の子に勉強を教えるようになったのだ。隆彦も愛実も都内指折りの有名私大の卒業生なので、前々から近所の奥様方をお願いされていたらしい。</p> <p>「やっぱり子供は可愛いかい？」</p> <p>「ええ、とっても」</p> <p>そう言って再び微笑む愛実。その可憐の笑みの裏に一瞬、淫靡な匂いがむわっと立ち上ったのを隆彦は見逃さない。愛実の全身からじっとりと滲んだ艶に心を奪われながら、隆彦は言う。</p> <p>「子供、欲しいね」</p> <p>「……ええ、とっても☆」</p> <p>ハートマークを出しながらもう一度隆彦にキスをする愛実。隆彦も二度目のキスに答えて、それから家を出る。自分が家を出てから、この家でどんなことが起きるのかを想像しながら。</p>
<p>kag005_34h</p> <p>●場所 隆彦家寝室・昼</p> <p>●使用 CG H249a (はじめだけ) H240 H241 H242 H243 H244 H245 H246 H247 H248 H249</p>	<p>～黒背景～</p> <p>～時間経過の演出～</p> <p>「はあっ……はあっ、はああ……っ☆」</p> <p>「……くすくす、先生、ここは何？」</p> <p>「そこはっ、そこは、乳首よお……っ、えっちな乳首い……☆」</p> <p>「それじゃあここは？」</p> <p>「んひぐッ……あああ……っ、そこ、しょこっ、クリトリスう……エロっ、クリトリスう……☆」</p> <p>「へへっ、それじゃあここは？」</p> <p>「はあっ、あああ……☆ そこはっ、おまっ、おまああ……っ、おっ、ほお……☆」</p> <p>～H249a 表示～</p> <p>「そこはっ、オマンコよおっ、スケベマンコっ、ドスケベマンコなのお……っ☆」</p> <p>三人のショタに胸を、クリトリスを、膣を同時に愛撫されて感じ入った声をあげている愛実。女の子みたいに可愛らしい顔だちをしたショタは愛実の胸を揉み潰しながら小悪魔じみた笑みを浮かべ、眼鏡をかけている利発そうなおぼちゃんタイプのショタはクリトリスの包皮を剥ぎ取ってクリクリと摘み転がしながら愛実の反応を観察している、鼻の頭に絆創膏を張っているレトロなヤンチャ少年ショタはニヤつきながら人差し指と薬指を愛実の膣穴に突き入れて、くちゅっくちゅっくちゅぐっちゃぐつと愛液を掻き出しながら手マンに耽っている。愛実乳首と股間がむき出しになった黒いボディタイツを着ている。参考画像「H240 ボディタイツ.jpg」がサンプルです。</p> <p>(隆彦は帰宅して隠しカメラで録画した映像を見ているのですが、このシナリオラベルではその辺の説明は無しに、ただ隆彦がショタにいいように玩具にされている愛実を隠れて観察して興奮しているという風に進めて頂ければと思います)</p> <p>「はあ、はあ、ああん……そう、そうよ……復習は、大事よ……っ、みんなっ、勉強熱心で、嬉しいわあ……」</p> <p>愛実が突然家庭教師をやるといい始めたときに思い出したのは、村で子供たちの筆卸をして絶頂を迎えていた愛実の姿だった……と独白する隆彦。案の定、愛実は家庭教師を始めて暫くして、こういうことをし始めるようになった。そして僕はそれをこっそりと観察するのが密かな楽しみになった、と隆彦。愛実はショタたちにいいように弄られながら、あっという間に潮吹きを迎える。</p> <p>「せんせー、すぐイくようになったよなあ。せんせいみたいなエロいおんなのこと、よっきゅうふまんっていうんだろ？ こんなエロいしたぎ着てさあ」</p> <p>ヤンチャそうな少年がべちゃべちゃになった自分の手を見ながらニヤニヤと笑う。既に服を脱ぎ捨てている少年は、愛実に皮を剥かれてすっかり見事に勃起するようになった怒張をピンと反りかえらせて、それを見せ付けながら言う。</p> <p>「せんせー、オマンコパンパンしてやるから、コンドームくれよ」</p> <p>そんなヤンチャ少年の言葉に、愛実はんふふと誘惑的な笑みを浮かべる。</p> <p>「今日の授業では、新しいことを教えてあげるわ」</p> <p>「ナマセックスの気持ちよさと、女を孕ませて征服する喜び……よ」</p> <p>愛実の誘惑に、ごくんと息を吞んで、本当にこのまま入れていいのかよ、ともじもじしながら興奮を隠し切れないショタたち。そんなショタたちに、愛実が言う。</p> <p>「先生の旦那様がね、可愛い子供が欲しいんですって……」</p> <p>「だからかわいい君たちに、子供を作ってもらわないと……ね？」</p> <p>愛実の誘惑にあてられたヤンチャ少年に挿入される愛実。ああん☆とうっとりしながら、モンキーバナナのようなショタチンコでヌブヌブされる。少年はいたずらっぽい笑みをなくして、愛実のことをすきすきと言いながら、初生セックスの快感に酔いしれながら必死に腰を振る。そしてあっと</p>

	<p>いう間に果ててしまう。</p> <p>はあはあと荒い息をつくショタを、眼鏡のショタが早くどけるよなと言ってどけさせる。そして生意気ショタよりも細長いチンコをヌプッと挿入する。またまた甘い声でくうんと無く愛実。その長いチンコを旺盛にピストンしながら、眼鏡ショタはナマセックスが普段とどう違うのかを分析しながらも（ヒダヒダの細かい様子など）生意気ショタに負けずに告白する。「大きくなったら僕と結婚してください、まなみ先生」「そんなに一生懸命言われたらっ、断れなくなっちゃうわあ……っ☆」と、愛実がピストンを受け入れ、気持ち良さそうにしながら言う。メガネショタもあつという間に果てて、そして大量の精液を愛実の中に注ぎ込む。</p> <p>三人目の童顔ショタが愛実のにしかかる。</p> <p>「相変わらず可愛い顔して、いちばん凶悪なオチ——ンポおおおお……っ☆」</p> <p>ずぬぬぬぬぬ……っ、と、太く長い怒張をねじ入れられる快感に酔いしれる愛実。ショタも生の快感に「ああ……あああ……！」とどうして良いか分からないという顔をしながら、間髪いれずに腰を必死に叩きつけ始める。余裕を無くして喘ぎまくる愛実に向けて、童顔ショタもすきすきと必死になって告白して、先生はぼくとけっこんするの！と尻を叩きながらピストン。する、あなたともするからあ！とよがりまくる愛実を見て、ヤンチャショタとメガネショタは再び勃起した怒張をもじもじと手でいじって頬を赤くしている。そして童顔ショタも、驚くほど大量の精液を射精する。</p> <p>「おっほオオおおおおオオオ——ほっお……っ☆」</p> <p>けだものじみた声をあげながら絶頂に達する愛実。そんな愛実に、ぎゅうと抱きついて、愛実は自分だけのものだと言明する童顔ショタ。そんな童顔ショタをずるいぞ！と非難する二人。喧嘩をする三人に、愛実がとろけきった顔で言う。</p> <p>「喧嘩は……やめなさい、先生、三人のお嫁さんになってあげるからあ……☆」</p> <p>ほんとう？と不安そうにする三人に、愛実が言う。</p> <p>「誓いのキス、してあげるから……おちんぼ、先生のお口に、ちゅってしなさい？」</p> <p>愛実の言うことに従って、愛実の顔の前に怒張を差し出すショタ三人。</p> <p>可愛らしく勃起した怒張を突きつけられながら、愛実が言う。</p> <p>「せんせいは、病気の時も、元気な時も、三人の可愛いおちんぼのお嫁さんでいることを誓います」</p> <p>ちゅるるるるると、三本の怒張を一息に吸い上げる愛実。</p> <p>じゅるるるるるるるるるるッ☆　じゅるるるる、ずちゅううううッ☆</p> <p>三人のショタは尿道の残り汁を吸い上げられながら、可愛らしく腰をひくつかせる。</p> <p>そして隆彦もまた、そんな様子を見ながら射精するのだった。</p>
kag005_35 ●場所 隆彦家寝室・夜	<p>「……」</p> <p>隠しカメラを自分の家にしかけるようになってからどれくらい経っただろうか。ショタたちとセックスして中出しされまくってよがっていた妻の姿を思い返ししながら、隣で穏やかな寝息を立てている妻の寝顔を見る。あんな淫らなことがたった数時間前にあったなんて信じられないくらいに穏やかな寝顔。そんな愛実の姿を見ているとたまらなく愛おしさがこみ上げてきて、その頬にちゅっと軽くキスをする。寝ている愛実がそれに答えるように「……隆彦さあん……」と甘い寝言を言う。</p> <p>——いつかこの寝言が、自分ではない誰かの名前になったりするのだろうか。</p> <p>——たとえば、あの少年たちの名前に。</p> <p>それはとても悲しくて悔しくて許せなくて、でもどうしようもなく興奮してしまう想像だった。だけど今はまだ寝言に自分の名前があることを喜びながら、互いに秘密を抱えた日々を過ごそう。いつしか崩れてしまう仮初の日常かもしれないけれど……</p> <p>と、そんなことを独白しながら、隆彦は眠りにつくのだった。</p> <p>日常と薄皮一枚を隔てた非日常の世界は、まだまだ明日からも続いていく。</p> <p>そんな予感に、股間を疼かせながら。</p> <p>■エンド4「牝豚と三匹の子狼」 →タイトルへ</p>
kag005_36 ●場所 オフィス・昼	<p>——そう。変化は確実に起こっている。</p> <p>隆彦は腕時計で時間を確認する。時間は15時と少しを回ったところだ。</p> <p>居間や寝室に仕掛けた盗聴器では、今日はこれくらいの時間に来ると言っていた。</p> <p>隆彦はずっとオフィスを抜けて、そのまま廊下の奥のデッドスペースに。</p> <p>そこで携帯を取り出して、愛実の携帯へと電話をかけることにする……</p> <p>ぷるるるるるる、ぷるるるるるる、と数度のコールのあと、</p> <p>「……は、はい……もしもし、隆彦……さん？」</p> <p>少し慌てた様子の愛実が電話に出る。愛実は妙に息が荒く、まるで熱を出している時のようだ。</p> <p>それはそうだろう。なぜなら今まさに、愛実は間男とセックスをしていたか……それとも、今もし</p>

	<p>ているに違いないのだから。</p> <p>「うん。僕だよ。ちょっと連絡があってね。今は電話をしても大丈夫かな？」</p> <p>「……は、はい……大丈夫、ですよ」</p> <p>「実は今日は少し残業で遅くなりそうなんだ。早くても帰りは23時くらいになってしまうと思う。だから食事を先に取っていてもらおうと思ってね」</p> <p>「あっ……そ、そう……ですか……分かりました」</p> <p>ところどころ言葉に詰まる愛実。受話器の向こうから、二人分の吐息が聞こえている。だが隆彦はそれには気付かないふりをして愛実と言う。</p> <p>「ところで、具合でも悪いのかい？ 息が荒いみたいけど」</p> <p>「……は、はい……ちょっと、だけ……熱がある、みたい……で……」</p> <p>はあはあと熱い吐息をつく愛実に、隆彦は言う。</p> <p>「それはいけない。無理をしないで休んだほうがいいよ」</p> <p>「は、はい……そう、します……」</p> <p>ふうー……ふうー……と、荒くなりそうな息を無理やり堪えている感のある愛実の声に勃起しながら、隆彦は平静を装って言う。</p> <p>「とりあえず伝言はそれだけさ。……愛してるよ、愛実」</p> <p>「は、はい……私も、愛してま——」</p> <p>いかにも途中で無理やりという感じで切れる電話。受話器から響いてくるツーツーツーという無機質な音を聞きながら、隆彦はズボンの中でビクンと怒張を痙攣させる。</p>
<p>kag005_37h</p> <p>●場所 隆彦家寝室・昼</p> <p>●使用 CG H250 H251 H252 H253 H254</p>	<p>～黒背景～</p> <p>ぶるるるるるる、ぶるるるるるる、と数度のコール音。</p> <p>「……は、はい……もしもし、隆彦……さん？」</p> <p>「うん。僕だよ。ちょっと連絡があってね。今は電話をしても大丈夫かな？」</p> <p>「……は、はい……大丈夫、ですよ」</p> <p>「実は今日は少し残業で遅くなりそうなんだ。早くても帰りは23時くらいになってしまうと思う。だから食事を先に取っていてもらおうと思ってね」</p> <p>「あっ……そ、そう……ですか……分かりました」</p> <p>「ところで、具合でも悪いのかい？ 息が荒いみたいけど」</p> <p>「……は、はい……ちょっと、だけ……熱がある、みたい……で……」</p> <p>「それはいけない。無理をしないで休んだほうがいいよ」</p> <p>「は、はい……そう、します……」</p> <p>「とりあえず伝言はそれだけさ。……愛してるよ、愛実」</p> <p>～H250～</p> <p>「は、はい……私も、愛してま——ああああっ☆ 愛してますっ、愛してますうっ☆ このオチンポ、愛してるうッ☆ ごめんなさい、ごめんなさいっ☆ 隆彦さん、ごめんなさいっ☆」</p> <p>愛実が話している最中に、ギッシギッシギッシギッシ！と激しい音を立てながら、夫婦の寝室に置かれたキングサイズのダブルベッドが激しく軋む。全裸の玲人が、同じく全裸の愛実を、背面騎乗位で容赦なく下から突き上げて腰を跳ねさせている。隆彦の仕事中に、夫婦の声域である寝室に間男を連れ込んで、愛実はケダモノのようなセックスに耽っている。愛実突然のハードピストンに喘ぎ声を堪えることが出来ず、途中で電話を切ってベッドに押し付けるようにして体勢を保つ。</p> <p>「くくッ、オチンポ愛してるとはなあ！ よくもまあそこまで変態妻になれるもんだなあ、愛実い！」</p> <p>「ひいっひいっ、ああああっ、だってえっ！ これすごひっ、ああっ！ だめなところっ、だめなところっ、あたるうッ！ ずんずん来るうッ！」</p> <p>愛実を呼び捨てにしながら腰を突き上げる玲人。帰省の際に交わした約束の通り、彦太市に戻っても玲人は愛実を呼びつけて、そして散々にハメ倒した。はじめは帰省のあいだだけの過ちだったと玲人を跳ね除けようとした愛実だったが、最初の一回から乱れに乱れて、今では自分から隆彦の留守中に玲人を呼ぶようになっていた。愛実玲人のシリコン入りの怒張に串刺しにされながら、ただただ悲鳴をあげることしか出来ない。そんな愛実に、玲人は今日もいつものやつをやるぞ、と命令。愛実は恥ずかしがりながらも通話を切った携帯を持ち上げて、それからそのカメラを前に突き出すようにして、騎乗位で突かれている自分を動画で撮影し始める。</p> <p>「この動画をっ、楽しみにしている皆さあんっ！ 今日のっ、今日のおまんこ☆の時間ですうっ！」</p> <p>今日もおまんこというタイトルで投稿掲示板に目線を入れたハメムービーを、玲人の命令で投稿させられている愛実。愛実自分自分の痴態を撮影して、もしかしたら大勢の男の目に触れるかもしれない——もしかしたら隆彦の目にも止まるかもしれない、と想像して感じている。そんな愛実に玲人は、今度そこの掲示板の奴らを集めてオフ会でもするか、と愛実を言葉でなぶる。一人500円くらい徴収して、愛実のワンコインマンコを一晩中ハメまくるイベントなんか良いかも知れねえなあと言語る玲人。愛実はその想像に、きゅうきゅうと膣肉を締め上げて玲人を唸らせる。</p> <p>「おらッ、今日もたっぷりだしまくってやるからな！ 夜は旦那の薄いザーメン、中出ししてもらえよ、オラあっ！」</p> <p>膣内射精する玲人。精液を注がれながら絶頂する愛実。ひいひいひいと長く尾を引くような絶叫を</p>

	<p>響かせて、びくんびくんと肢体を痙攣させる。にゆるんと音を立てながら引き抜ける怒張。愛実は無精液を逆流させる膣穴に携帯を向けると、片手でピースしながら言う。</p> <p>「はあっ、はあっ、はああ……ド変態妻まなみの、今日のオマンコ☆のコーナーでしたあ……っ☆」</p> <p>愛実のあまりの痴態に興奮をあおられたのか、玲人の怒張はすぐにムクムクと硬さを取り戻す。</p> <p>「旦那、遅くなるんだし……おまけに風邪だって嘘ついたのは好都合だったな」</p> <p>「今日はこのまま夜まで、足腰立たなくなるまでハメ倒してやるからな……？」</p> <p>玲人の熱っぽい口調に、愛実は目を輝かせる。</p> <p>「はあー……はあー……はあー……そんなの、すごすぎるう……☆」</p> <p>隆彦は間男の怒張に目を奪われている妻の姿を見ながら、ううっと呻いて射精する。</p>
<p>kag005_38</p> <p>●場所 隆彦書斎・消灯</p>	<p>暗い書斎に青白く光っているモニタを見つめている隆彦。モニタの中には愛実がこの家で玲人と行ったさまざまなプレイの様子が収められた動画ファイルが山ほど並べられている。今しがた見終えた今日の昼間の様子を撮影した動画ファイルに、日付と簡単なプレイ内容を書き込んで保存する隆彦。着々と増えていくコレクションを見ながら、嫉妬と興奮に全身を包み込む。</p> <p>——いったい次はどんな変態的なプレイをされるのだろうか。</p> <p>——いっそ玲人本人に頼み込んで、更に下品なプレイを要求してみようか？</p> <p>妄想は次か次へと溢れ出して止まらない。</p> <p>玲人は闇の中で、これから先に一体どんな興奮が待っているのかを考えて、再度股間を硬く膨らませるのだった。</p> <p>■エンド5「愛妻はやがて一匹の牝に成り果てて」 →タイトルへ</p>
<p>kag005_39</p> <p>●場所 書斎・夕</p>	<p>「……もっともっと、より強い興奮が欲しい」</p> <p>どちらにするかギリギリまで思い悩みながら、そう結論を出す隆彦。</p> <p>長太郎はそんな隆彦の返答に満足そうにしながら言う。</p> <p>「くくっ……やはりお前は、わしの息子よ……」</p> <p>邪悪な笑みを浮かべる長太郎。</p> <p>長太郎は隆彦に白装束や面を渡すと、にやつきながら言う。</p> <p>「ならばやることは決まっておろう。お前も、全てをさらけ出すのよ」</p> <p>そして長太郎は権造を呼ぶと、彩花にも白装束を用意して一緒に出かけるように言う。</p> <p>彩花はその言葉に「ああ……」と嘆きながらも、瞳の底に淫欲を燃やすのだった。</p>
<p>kag005_40</p> <p>●場所 夕焼け空 ↓ 正門前・夕 ↓ 田舎道・夕 ↓ 神社・夕</p>	<p>家を出て、権造の運転する車で神社へと向かう隆彦。</p> <p>夕焼け空→正門前・夕→田舎道・夕→神社・夕という感じで、神社へと近付いていくにつれて、隆彦は興奮と嫉妬と不安で胸を軋ませる。神社の前までやってくると浴衣を着た子供たちや大人たちが大勢いて、その中に白装束を着た男たちが混ざっている。白装束の男たちはみな顔に面をつけて、白縄神社の本殿へと向かっている。既に興奮しているのか足に力が入っていない彩花を支えるようにしながら、それに混じり本殿へと向かう隆彦と長太郎。</p>
<p>kag005_41</p> <p>●場所 本殿</p> <p>●使用 CG H230</p>	<p>※シーン序盤は kag005_30h に彩花の様子などを足した流用テキストで OK です。</p> <p>本殿へ足を踏み入れると、大勢の白装束+面の男たちが詰め込まれている室内には、むわりと頭の芯までのぼせてしまいそうな甘い匂いが漂っている。人の中に眠っている獣の本能を呼び覚ます香を焚き染めているのよ、と小声で説明する長太郎。そんな長太郎の説明を聞き流している隆彦。視線は本殿の中央に釘付けになっている。</p> <p>～H230～</p> <p>「はああ……っ、ひいひい……っ☆ これっ、だめえ、だめえ……っ☆」</p> <p>本殿の中央には、黒檀で出来た巨大な張り型が台座（刀を置くようなデザインの台）の上に乗る形で横になって鎮座している。（腕は後ろで柱に回されて、両手首を注連縄で連結。ご神体に跨っている足首同士も、柱に回すように注連縄で連結。下半身の注連縄は若干長さに余裕があって、愛実はもどかしさもそのままに腰を持ち上げてくねらせている。持ち上げたスペースに男が腰をすべりこませて挿入に繋がります）その横になった張り型に仰向けになるように、全裸の愛実が注連縄でくくりつけられている。愛実の膣には跨っているのと同じような黒檀で出来た張り型が突き立ち、白く泡立ったべっとりとした本気汁が垂れ流れている。愛実のヘソには、行書体で奉納、と書かれたお札が貼られている。巳女役の女はそれこそがち様鎮めの一時間前にはご神体である巨大張り型にくくりつけられて、媚薬を塗り込めた張り型を膣肉に挿入されて香を嗅がされ、肉体を焦らされ続けている。そんな中、神主がかがち様に巳女を捧げる祝詞を唱え続けている。低く唸るような</p>

	<p>男の声に、喘ぎ続ける愛実の声、香の匂いに、発情した雄と牝の匂い、それらが渦巻く部屋の中、まるで淫夢の世界に紛れ込んだような感覚に浸りながら、もうすぐで愛する妻が大勢の男たちに揉みくちやにされてしまう……という予感と興奮に息を荒くする隆彦。</p> <p>そしてぴたりと祝詞がやんで、一瞬、本殿が静寂に包まれる。</p> <p>そんな淫らな静寂のなかで、愛実がもう我慢出来ないという響きを伴って言う。</p> <p>「かがち様あっ……お慰めっ、奉りますうっ！ お慰めさせて下さいい……っ！」</p> <p>愛実の叫びに男たちは息を呑んで白装束を脱ぎ捨てる。ヘソにまで反り返った無数の怒張に囲まれて、愛実が瞳を輝かせる。</p> <p>※ここまで kag005_30h 流用想定。以下から分岐</p> <p>「愛実……」</p> <p>そんな愛実の前に、ずいと歩みを進める隆彦。面をつけてはいても、頭の中が香に犯されていてもそれが最愛の夫だとすぐに気付いたのだろう。その脇にいる義父と義母の姿も確認しながら、愛実が目を見開いて絶句する。</p> <p>「た……隆彦……さん……？ それに、お義父さま……お……義母さま……」</p> <p>違うの、これは、と唇を震わせながら、それでも何も言えない愛実。腰から下だけがまるで生き物のように、くねくねとくねっている。そんな愛実を見下ろしながら隆彦は言う。</p> <p>「いいんだよ愛実。僕は全部知ってる。僕が全部頼んだんだ。僕が今回ここに帰ってきたのは……愛実を、僕以外の男に抱かせるためだったんだ……」</p> <p>「……え……え……？」</p> <p>混乱する愛実に隆彦は続ける。</p> <p>「僕は、愛する女性が自分以外の誰かに抱かれる姿に、興奮する人間なんだ。そして僕の父親も……」</p> <p>「あっ……あああっ……た、隆彦さん……はあああ……っ、だ、だめえ……愛実さん……見ないで、見ては、見てはいやあ……」</p> <p>何もする前から興奮していたのだろう。白装束に包まれた彩花の乳房を揉みしだく隆彦。愛実は見てはいやと言いつつも、くねくねと腰をくねらせる。そして絶句する愛実に向かって、長太郎が近づいていく。長太郎の股間は既に天を突かんばかりにいきりたっており、それにちらりと目をやった愛実がごくんと息を呑むのを隆彦は見逃さない。</p> <p>「……さあ愛実、一緒に落ちていこう」</p>
<p>kag005_42h</p> <p>●場所 本殿</p> <p>●使用 CG H260 H261 H262 H263 H264 H265 H266 H267 H268</p>	<p>「あっあっあっあっあっあっ～～ッ、ああああ～～っ！」</p> <p>「あああっ、いやいやいやあっ、見ないで愛実さんっ、見ないでええええ……っ！」</p> <p>隆彦に立ちバックで犯されている姿を愛実に見られて恥じらいながらも感じる彩花。</p> <p>長太郎の怒張でバンバンと突かれて切なく喘ぐことしか出来ない愛実。</p> <p>全裸の四人は立ちバックの体位で向かい合わせになっていて、互いのパートナーに痴態を見せ付けような構図になっている。彩花のお腹にも愛実と同じ「奉納」の札が貼られている。</p> <p>「この数日ですっかり旦那以外の味を覚えたの、愛実さんや！」</p> <p>「彩花さん、どうですか義理の娘と夫により顔を見られている感想は！」</p> <p>隆彦と長太郎は互いのパートナーを言葉攻めしながら、自分の妻が相手に抱かれて感じた声を出していることに嫉妬しつつ腰を盛んに動かしている。</p> <p>「愛実さんはハメられながらクリトリスをいじくりまわされると、おめでチンポをちゅうちゅうしてきよるぞ」</p> <p>「彩花さんは乳首を少し痛そうなくらい潰されて、つねられるのが良いんですね？」</p> <p>「くくっ、ペロを出して誘いおって。ほれ……ちゅむ、じゅるるじゅ、ちゅむ……義父のツバは美味いか？」</p> <p>「彩花さん、うらやましそうな顔してるじゃないですか。れろれろろ、ちゅむ、じゅるるる</p> <p>隆彦が愛実のクリをいじって喘がせれば、隆彦は彩花の左右の乳首を捻り潰して責め。</p> <p>長太郎が愛実とペロチューにふければ、隆彦も彩花とべろべろ舌を絡めまくる。</p> <p>愛実と彩花は当初こそ理性を宿し、困惑していたものの、義理の母親と義理の娘が自分の夫に抱かれて喘ぎまくっている姿に興奮して、あっという間に表情を蕩けさせていく。</p> <p>「ほほっ、イきそうなんだな。愛実さんや。いつも通りオメコがひくつきよるわ」</p> <p>「彩花さんのマンコも、ザーメンおねだり始めましたね。イきたいですか？ イきたいか彩花？」</p> <p>「イきたければイかせて下さいと言え、愛実」</p> <p>四人ともペロチューを中断。男二人も理性を失い、獣じみた表情になっていき、ただただ雌の中に精液を排泄したいがためのピストンに切り替わっていく。女たちも理性をかなぐり捨てて、自分の旦那ではなく膣に収まっているチンポに向かって、イかせてくださいと悲鳴をあげながら哀願する。</p> <p>そして同時に射精する隆彦と長太郎。愛実と彩花は夫ではない精液を受け入れながら、夫に向かっ</p>

	<p>て情けないイキ顔を晒す。男二人も醜く呻きながら、何度も何度も精液を目の前の肉つぼに向かって注ぎ込む。</p> <p>「僕のじゃない精液ではしたなくイきまくって、愛実とはんだ淫乱だね。恥ずかしくないのかい？」</p> <p>「お前もよ、彩花。義理の娘の前で、義理の息子のチンポでいきまくりおって。この牝豚が」</p> <p>夫に罵倒された女二人が、あっああ……！と呻きながらびくびくと肢体をひくつかせる。身体にくすぶっていた快感の余熱がぶり返したかのような喘ぎを漏らすと、同時に射精した夫たちに習うように、ぶるるるっと全身を震わせて。</p> <p>じょろろろろろろろろろろ……♪</p> <p>二人分の失禁音が、本殿の中に響き渡る。もう既に理性なんてあってないようなもののなか、愛実も彩花も放尿しながらビクンビクンと何度も何度も痙攣して、絶頂を示している。そしてそんな二人の姿に、周囲の男たちがゴクンと生唾を飲み込んでいるのを隆彦は理解する。</p> <p>～夜空～</p> <p>まだまだ、本当のかがち様鎮めがこれから始まるのだ……と。</p> <p>隆彦は二人の巳女が絶頂に胸を喘がせる姿を見下ろしながら、再度剛直をいきらせるのだった。</p> <p>■スタッフロールの再生 ※タイトルには戻りません。</p>
kag005_43 ●場所 隆彦家居間・昼間 ↓ 青空 ↓ 夕焼け空 ↓ 夜空	<p>ある朝。実家から戻り、何事も無かったかのようにいつも通りの日々を再開している隆彦と愛実。今日もいつも通り二人で仲睦まじく朝食をとり、食事を終えて身だしなみを整えて家を出る隆彦を愛実は相変わらず行ってらっしゃいのキスで見送る。夫婦仲は熱いまま。隆彦も勿論愛実に対する愛情は冷めるところか、ますます愛実を愛しく思っている。</p> <p>だが、そんな二人のあいだには確実な変化が起こっていた。</p> <p>「……愛実、例の話なんだけど、今週の土曜日に決まったよ」</p> <p>「……は、はい」</p> <p>穏やかな朝の空気が一変して、淫靡な雰囲気二人を包み込む。</p> <p>隆彦は食卓の下で週末のことを考えて怒張を硬化させ、愛実はあからさまに発情した瞳を隆彦に向けている。</p> <p>「父さんと彩花さんも田舎から出てくるってさ……土曜日の夜が、楽しみだね」</p> <p>「……。……は……はい」</p> <p>そんな会話をして、隆彦は今日も仕事へ向かう。</p> <p>～青空→夕焼け空→夜空～</p> <p>そして、その日がやって来た——という感じの独白でシーン締め。</p>
kag005_44h ●場所 ラブホテル (H270 用) ●使用 CG *黒人お披露目 H270 H271 H272 *ファック開始 H280 H281 H282 H283 H284 H285 H286 H287	<p>※黒人輪姦ですが、黒人という言葉はテキスト中に使わないシーン。</p> <p>彦太市にあるラブホテルの一室。部屋は大きめピンクの内装。モデルは背景サンプルの「ラブホテル (H270) . jpg」そのベッドに並んで腰掛けている愛実と彩花。二人はスケスケのボディタイツを着て、目隠しをして期待に満ちた顔をしながらベッドに並んで腰掛けている。</p> <p>「今から、二人の今日の相手に部屋に入ってもらおうからね」</p> <p>「ああ……は、はい……☆」</p> <p>「はあ……はあ……今日の、相手……☆」</p> <p>隆彦の言葉に興奮を隠し切れない返事をする愛実と彩花。そんな二人の左右と背後を四人の黒人が全裸になって囲む。全員が40センチはある怒張を勃起させており、愛実と彩花の左右を挟んでいる黒人二人は、二人の顔の前にその長大な怒張を突き出している。二人は鼻の下の怒張の匂いを嗅がされて、隆彦や長太郎にどんな匂いがするか尋ねられている。ケモノみたいな匂いがします、と二人。</p> <p>目隠しを外されて、目の前にある怒張を見て呆然とする二人。しばしその余りの長さに息を呑んでいた二人だが、長太郎の「くくッ、触ってみろ」という言葉に意識を取り戻して、おずおずと手を伸ばす。</p> <p>「あ、ああ……う、うそ……こんなの、作り物みたい」</p> <p>「こんなの、入れられてしまったら……わたし、どうなってしまうの……？」</p> <p>半ば呆然と、熱っぽく怒張を見つめながら、差し出されたそれを撫でる二人。黒人たちも愛実と彩花の胸や尻を撫でながら、たどたどしさを残しながらも日本語で、「そんなにコックが好きかヨ。</p>

*事後
H288
H289

いやらしく撫でやがる」「今日はマンコが閉まらなくなるまで、ファックしまくってやるからナ」と、ニヤつきながら言う。最初からアナルも犯す気なのか、後ろの黒人などはたっぴりとローションを怒張になすりこませていて、そんな様子を見た愛実と彩花は「あ、ああ……そんな……壊れちゃう……☆」「お願い……最初は手加減、手加減して……☆」と、期待に満ちた目をしながら哀願する。が、隆彦と長太郎は黒人たちに念を押すように言う。
「遠慮なんていない。最初から手加減無しでやりまくってくれ」
「OKポス。言われなくても、こんなスケベなジャパニーズビッチには遠慮なんてしねえよ」
黒人たちはニヤニヤと笑いながら、愛実と彩花を押し倒しにかかり――

～H280～

※H280は横に二枚繋がったイベントCGで、左右にスクロールさせて使用します。左が愛実、右が彩花です。愛実の描写の時は左の1024*768を表示し、彩花の描写の時は右の1024*768を表示します。

「ああっ、あがっ、あああっ、あっ、ああっ、奥ッ、おぐうううッ！」
「ひいっ、ひっ、いいいっ、壊れるうっ、壊れちゃうううううッ！」
二人の悲鳴のような喘ぎ声と、肉と肉が盛大に打ち付けあう音がラブホテルに響く。
愛実と彩花は背面騎乗位の体位で並んでサンドイッチファックされている。40センチはある黒人の怒張で膣とアナルをズボズボと容赦なく抉られる壮絶な快感にただただ翻弄される二人。ベッドは今にも壊れそうなほどの悲鳴を上げて、男たちがいかに本能任せのピストンをしているのかを伝えてくる。隆彦と長太郎は、愛する女が黒い肉棒に串刺しにされている姿を見ながらシコシコと自慰に耽っている。
「まったくジャパニーズは Hentai だな。テメエの女が他のオトコとヨロシクやってるのを見て、ソマツなナニをしごいてやがる！」
「おら、あれがオマエラの旦那だぞ！ どうだ。旦那の粗末なナニと俺たちのモンスターコック、どっちが気持ちいい？」
黒人たちになじられながら、愛液を撒き散らしながら、卑猥な言葉をこれでもかと吐いて悶える二人。汗まみれ汁まみれになって、鼻水をたらしながら尻をバウンドさせる。乱れる妻に「そんなに良いのか、愛する夫の前で恥ずかしげもない豚面を晒すくらいいいのか」と訪ねる隆彦と長太郎。二人の妻は、二人の夫に愛してる、心はあなたのものと良いながら、自分を貫いているチンポがどれだけ気持ちいいのかを必死になって語る。二人の夫は嫉妬しながら、ますます自慰に熱を入れる。
「あああああッ、だめだめだめだめだめええええッ、こんなのいぐッ、すぐにいぐう！」
二人はあっという間に絶頂の到来を叫び、黒人たちも妻たちの膣肉の絡みつきに「日本のオナナのマンコは本当にサイコウだな。ガキとやってるみてえなシマリだ！」と唸りながら、絶頂に向かってかけあがっていく。そして

～射精～

四人全員同時に射精するのはさすがに演出上間抜けなので、
H282（愛実アナル射精）→H283（愛実膣射精）→H284（彩花膣射精）→H285（彩花アナル射精）
という差分を、フラッシュさせながら連続で切り替え表示。

射精する男たち。絶頂の悲鳴をあげる愛実と彩花。男たちは大量の精液を注ぎ込みながら「黄色い子供が生まれるように祈っておきな、ビッチ……オオウ」と、唸りをあげて、そしてひとしきり精液を注ぎ終わると怒張をぬぼりと引き抜く。大量の精液が逆流していく。そんな様子を見て「ああ……こんなのぜったい、妊娠しちゃう……☆」と甘い悲鳴をあげる二人。「今まで何人も孕ませてきたから覚悟しろ」と別の黒人も語る。アナルを犯していた黒人たちは、次は俺たちに「H E N T A I のプッシーを味わわせろヨ」とニヤついている。黒人たちと比べて余りにも粗末な量の精液を吐き出しながら、隆彦と長太郎はまだまだ陵辱が続くことを理解する。

～事後～

膣を犯していた黒人がいなくなり、アナルを犯していた黒人の怒張が萎えてズルリと抜けている。二人は散々陵辱されて失神しており、開きっぱなしになった膣とアナルから滝のように太いザーメンを逆流させている。

「ヘイ、このビデオの予告編を見してくれる全国のAVファンにアイサツしろよ、ビッチーズ」
黒人に要求されて、愛実と彩花はのろのろと両手をあげて、アヘ顔でダブルピース。

愛実「は……へえ……は……へえ……☆ ぶ、ぶっとくて、ながい……特上黒チンポにハメハメされて……アヘりまくっちゃういけない人妻の愛実と……おっ☆」

彩花「ひっいいい……ひいいい……ひいいい……ん☆ ドス黒ギガチンポに種付けされまくってえ……ボテ腹確定の、彩花のオマンコ姿あ……っ、たっぴり楽しんで……くさあい……☆」

愛実「はあ……あ、はあ……ご、ごめんなさい……ウワキ大好き、スケベオマンコで、ごめんなさい……あなたあ……☆」

隆彦が構えるカメラに向かって、二人はとろけきった顔で語る。
二人の夫はそれを見てドライオーガズムに達して、散々射精を繰り返した怒張から、最後にタマに残っていた精子を根こそぎ放出して、ラブホテルの床に撒き散らすのだった。

	<p>～黒背景～</p> <p>この顔出しＡＶを、もしかすると近所に住む男が見るかもしれない。そしてそれをネタに、愛実に迫ってくるかもしれない。不貞の味を知った愛実は、それを拒みきれずに受け入れるかもしれない。ＡＶを出したらどうになってしまうのか、どんなことが起こってしまうのか、隆彦にも想像がつかない。そんな隆彦の不安と興奮を知ってか知らずか、愛実はうっとりとしながら、なえた黒人の怒張に手を伸ばして摩り始める。</p> <p>「まだまだ、お慰め奉ります……黒かがち様あ……」</p> <p>うつろな瞳で眩く愛実の瞳には、もはや隆彦の顔は映っていなかった。</p> <p>■エンド６「かがち様お慰め奉ります」 →タイトルへ</p>
kag005_45 ●場所 客間・昼	<p>※2010年4月5日追加ガチネトラレ関連シーン（kag005_04a→kag005_45）</p> <p>（僕は、破滅までは……望んじやいない……） （だけどこのまま今日ここにいたら、きっと取り返しのつかないことになるんじゃないか？） 加速度的に恐ろしさが増して行き、興奮をあっという間に恐怖が……築き上げてきた平凡な日常が取り返しのつかないレベルで破壊される恐怖が上回る。この村の異様な空気にあてられてどうかしていた……と、後悔しながら、隆彦は硬い表情で切り出す。 「愛実、すぐに家に帰る準備をしよう」 「……え？」 「ちょっと仕事で大変なことが起きたんだ。急いで会社に戻らないといけない。一日早いけれど、帰ろう」 「……は、はい。分かりました」 いぶかしげな愛実だが、隆彦の深刻そのものの気配を見てとったのか特に何も言わずに家へと戻る準備をする隆彦と愛実。ほどなくして準備は整い、隆彦と愛実が富蔵家を後にする。引き止められたりするかと思ったが意外にもすんなりと二人は白縄村を出ることが出来た。ただ、家を後にする時の長太郎の、ねっとり絡み付いてくる視線が、隆彦の脳裏に焼きついて離れなかった。</p> <p>■スタッフロールの再生 ※タイトルには戻りません。</p>
kag005_46 ●場所 隆彦家居間・昼 ↓ 時間経過 ↓ 隆彦家居間・夜	<p>※ここは一ヶ月間の出張ということで、シットリ目なやりとりをお願いいたします。</p> <p>帰省から数ヶ月。季節は秋。 悪い何かに取りつかれて夢でも見ていたような夏休みは終わって、隆彦と愛実はいつも通りの平凡な日常へと帰ってきていた。 「隆彦さん、忘れものはないですか？」 「うん。大丈夫。完璧だよ」 一ヶ月ばかり出張することになった隆彦。出発直前に愛実とそんな会話をかわしている。 「それじゃあ、お義父さんとお義母さんにはよろしく言うておいて」 「はい。隆彦さんも、怪我とか病気とかしないように気をつけてくださいね」 「ははは。たった一ヶ月の単身赴任で大げさだよ」 「一ヶ月も、です。一ヶ月も会えないなんて……さびしいです」 少し不満そうな愛実。おまけに出張終了の三日前は丁度結婚記念日で、愛実の仕事だから文句こそ言わなかったものの、毎年必ず二人きりでお祝いしているその日がだめになってしまったことを悲しんでいるに違いない。隆彦は僕もさびしいよと愛実を抱きしめながら、帰ってきたら二人きりで結婚記念のお祝いをしよう、少し遅れてしまうけど、と切り出す。はい……と、少し残念そうなでも嬉しそうな顔をする愛実。 「それじゃあ行ってくる」 「はい、行ってらっしゃい、隆彦さん」 チュッとキスをしてから家を出る隆彦。一ヶ月も愛実を一人きりにするのは不安だったが、愛実が愛実の実家へと帰るそうなので安心だ、とかそんなことを独白しながら隆彦は新幹線に乗り込む。たかだか一ヶ月で、事故とか事件とか、そんな大それたことが起きるわけ無いと考えながら。</p> <p>※時間経過の演出 青空→夕焼け空→夜空→青空、と言った感じ。</p>

	<p>■フラグ分岐</p> <p>ガチネトラレフラグが2→kag005_47h</p> <p>ガチネトラレフラグが3→kag005_49</p>
<p>kag005_47h</p> <p>●場所</p> <p>隆彦家玄関・昼</p> <p>(立ち絵背景無し)</p> <p>●使用 CG</p> <p>H300</p> <p>H301</p> <p>H302</p> <p>H303</p> <p>H304</p>	<p>黒背景。</p> <p>仕事を頑張って早く終わらせて、出張を予定より三日早く終わらせる隆彦。</p> <p>急いで帰れば結婚記念日に間に合うということで、花束とケーキを両手に家路を急いでいる。ほどなくしてタクシーはマンションの前につき、隆彦はうきうきしながら玄関を潜り抜ける。どうせならビックリさせようと考えているので、今日帰宅することは伝えていないが、予定なら愛美は家にはいるはずだ。家の前についた隆彦はそっと鍵を差し込んで、音を立てないように開錠する。</p> <p>愛美がどれくらい驚くのだろうかとワクワクしながら玄関の扉をあけて、すぐに表情が凍りつく隆彦。そこには愛美の靴のほかに、男物の、重厚な革靴が置いてある。その革靴には見覚えがあった。長太郎が洋装のときに愛用していたものと、同じデザインだ。</p> <p>(……まさか)</p> <p>ズクンと、心臓が嫌な音を立てて軋む隆彦。ごくりと息を呑みこんで立ち尽くしていると、</p> <p>「んはああああアアアアツ！」</p> <p>と、生臭い女の悲鳴が、明らかに情交に及んでいる牝の鳴き声が部屋の奥から聞こえてくる。</p> <p>続いて、ベッドがすさまじい勢いでギシギシと揺れる音と、肉と肉の打ち付けあう音が聞こえてきて、隆彦はフラフラと音のする方向へ、扉がわずかに開いた夫婦の寝室を覗いてしまう。</p> <p>「そうりゃッ、結婚記念日に夫の父親にハメられる具合はどうだ、愛美さん！」</p> <p>夫婦の寝室、そのベッドの上で、凄まじい勢いで愛美に腰をたたき付けている長太郎。体位は上から串刺しにするような正常位。愛美は怒張とベッドのあいだに膣奥と子宮を挟まれてズコズコされる壮絶な快楽に悲鳴をあげる。</p> <p>「くかかっ、用事も無いのにちょくちょく電話をかけてきおって、ワシの魔羅が忘れられんのは丸分かりだぞ！」</p> <p>隆彦が帰省を一日早く切り上げて帰ってきてから、愛美はちょくちょくと隆彦の実家にご機嫌伺いの電話をかけてきていたのだという。そして隆彦の出張が決まったあと、すぐにそれとなく隆彦の実家に電話をかけて、もしかしたらご挨拶に伺うかもしれません、などと言ったのだという。長太郎はそんな愛美の言葉に、わざわざこちらに何度も出てきてもらうのは申し訳ないから、次はこちらから挨拶に伺おう、と愛美に切り出した。</p> <p>出張一週間目に長太郎はこの家を一人で訪れて、そしてその日の夜、愛美に夜這いをかけた。愛美は口でこそこんなのはいけないと言っていたがすぐに獣のようにあえいで、それから数週間、二人は昼も夜もなく、猿のようにセックスしていた。</p> <p>「ほうりゃ、誰が本当のお前の主人か、誰がこのオマンコの所有者か言ってみろ！」</p> <p>愛美の尻を思い切りひっぱたきながら尋ねる長太郎。愛美はヒイヒイと喘ぎながら「お父様です、長太郎さまで、長太郎さまのオチンポ様ですう」「本当に愛しているのは、長太郎様ですう」と喘いで、信じられないくらいに卑猥な声をあげる。ひとつの肉の塊のようになりながらまぐわい、いよいよ愛美の声が逼迫していくと、長太郎も薄汚い声をあげる。</p> <p>「不貞嫁の淫乱おめこに、初孫を仕込んでくれるわ！」</p> <p>みっともなく腰をかくつかせながら、ゼリーのように固まった精液をどぶりと膣奥に仕込む長太郎。</p>
kag005_48	<p>歓喜の声を漏らしながら父親の精液を受け止める愛妻の姿に、隆彦はいつの間にか手に持っていた花束とケーキの箱を取り落としていた。フローリングの床の上に花びらが散り、生クリームとスポンジがベチャリと潰れる。隆彦も膝から崩れ落ちながら、視線だけは扉の隙間からまぐわいを見続ける。</p> <p>予定を切り上げて村を出たあの時には、平和な日常なんてとっくに終わりを迎えていたんだ……と、隆彦は呆然とする。触ってもいない怒張から、情けなく射精しながら。</p> <p>■エンド7「平凡な日常は既に無く」</p> <p>→タイトルへ</p>
kag005_49	<p>※引き続き H179b を表示しっ放し。</p>

<p>●場所 彩花の部屋・消灯</p> <p>●使用 CG H179b</p>	<p>すっかり精液を出し尽くして体力も空っぽの隆彦が、夏の夜風で汗を引かせていると、暫く満足そうな吐息をついていた彩花がぼそりという。</p> <p>「……隆彦さん」</p> <p>「……なんだ」</p> <p>「……わたしを、隆彦さんだけのものに、してちょうだい……」</p> <p>布団に突っ伏したまま、隆彦の顔も見ずにいう彩花。</p> <p>彩花を隆彦だけのものにする。逢魔が刻の間に溶け込むような囁きにぐくりと息を飲む隆彦。逢魔が刻。昼が夜に染まり魑魅魍魎が現れる時間帯。……ああ、確かに女は魔物だと隆彦は思う。彩花を隆彦だけのものにする。その言葉をもう一度噛み締める。なんて魅力的な言葉なんだろうか。</p> <p>「……したい。俺だけのものにしたい」</p> <p>彩花を自分だけのものにする。その言葉に秘められた魔力に、隆彦は熱にうなされるように唸る。そんな隆彦に、彩花は甘く囁く。</p> <p>「……なら、その言葉が嘘じゃないって、証明して」</p> <p>「証明？」</p> <p>「愛美さんと別れて迎えに来て。」</p> <p>別れる——離婚。隆彦は考え込む。愛美には何の文句も無い。大好きだ。最愛の妻だ。だけれど。</p> <p>「——ねえ、お願いタカくん……今度こそお姉ちゃんをタカくんだけのものにして……」</p> <p>彩花に甘く囁かれると、もう彩花さえいれば何もいらないのではないかと、そんなことを思ってしまう。理性がぐずぐずに溶けて、彩花以外の何もかもがどうでもいいものに思えてきてしまう。気付いた時には、隆彦は何もかも彩花の言うがままにしようという思いを固めてしまう。</p>
<p>kag005_50</p> <p>●場所 黒背景 ↓ 富蔵家正門・昼 ↓ 隆彦家居間・昼 ↓ 隆彦書斎・昼</p>	<p>隆彦独白。</p> <p>彩花の望むとおり愛美と離婚した。愛美は悲しみ、考え直してくれるようにすがったが、隆彦は愛美に自分の持つほとんど全ての財産を渡して離婚した。隆彦に残ったのは家と、自分の買った家具だけだったが、仕事を失ったわけではないしお金はこれから頑張り次第でいくらでも入ってくる。それにこれからここで彩花と暮らすうちに家具も元通り増えていくだろう……と、そんなことを考えながら隆彦は富蔵家へ彩花を迎えに行くことにする。大切な用事があるからこれから家へと向かう、と権造に電話を入れてから家を出る。</p> <p>富蔵家の前につくと権造が桎の丸棒を持って門扉の前に立っている。いぶかしみながらも権造に声を掛けて中に入ろうとすると、権造は棒を横にして隆彦を制止する。</p> <p>「旦那様より、隆彦様に今後二度とこの家の敷地をまたがせないようにと申し付けております」</p> <p>「……何を馬鹿なことを言っているんだ？ 妙な冗談はやめてくれ」</p> <p>権造の脇を通り抜けようとする、隆彦のみぞおちに権造の携えていた棒が突き立つ。隆彦は余りの痛みにのたうち、その場で膝からくずおれる。呼吸が止まり「何をするんだ」と抗議の声をあげようにもむせこむばかり。そんな隆彦に、権造が続けて言う。</p> <p>「冗談ではありません。旦那様のお申し付けは絶対です」</p> <p>その冷たく硬い声にいいよ尋常ならざるものを感じながら、よろけながら立ち上がった隆彦は権造にすがるように言う。</p> <p>「なら、なら彩花さんを出してくれ。大切な話があるんだ！」</p> <p>「それは出来ません。彩花様より、隆彦様とは取り次ぐなと申し付けられておりますので」</p> <p>そんな馬鹿な……と、よろめく隆彦。そんなわけがない、お前らが彩花さんを隠して閉じ込めているんだろうと掴みかかり、再び権造にしたたか打ちのめされる。胃液を地面にこぼして倒れる隆彦を権造は二度、三度と蹴り飛ばして「余りしつこいようですと警察沙汰になりますよ？」と落ち着いた声で言う。どうすることも出来ず、隆彦はとぼとぼと家へと帰る。</p>
<p>kag005_51</p> <p>●場所 隆彦家書斎・昼</p>	<p>長太郎の力は強大で、警察に届け出など出来るわけもなく、隆彦は彩花がいつか富蔵家を出て自分のところへ来ることをただただ信じていつも通りに働き、いつも通りに過ごし始める。</p> <p>そんな抜け殻のような日々を開始して一ヶ月ばかり経過したある休日。隆彦のもとにひとつの小包が届く。差出人の名前は無い。中を開けてみると、ラベルの無いDVDが一枚入っている。</p> <p>「……」</p> <p>何か恐ろしいものが詰まっている、と本能的に察する隆彦。だが手は勝手にDVDを掴み、足は書斎へと向かってしまう。</p> <p>■スタッフロールの再生 ※タイトルには戻りません。</p>
<p>kag005_52h</p>	<p>DVDを再生すると、初めにノイズが映り、そしてパッと明るい画面に切り替わる。そこには権造に背面騎乗位で犯される愛美と、長太郎に背面騎乗位で犯される彩花が並んで映って</p>

<p>●場所 隆彦家書斎・昼 (画面の中は長太郎の 部屋・昼)</p> <p>●使用 CG H310 H311 H312 H313 H314 H315 H316</p>	<p>喘いでいる。呆然とする隆彦に、画面の中の彩花が喘ぎながら言う。</p> <p>「タカくん、見てるううッ?」「隆彦さん、見てますかぁッ?」</p> <p>喘ぎ喘ぎしつつ、イエーイとWピースする二人。二人とも身体の前면에、胴体に絡みつくような感じで白い大蛇の刺青を入れられている。大蛇は後ろ腰からぐりと回って乳房の下で鎌首をもたげているイメージ。左右の太ももの付け根には花札の短冊のような刺青で「かがち様大歓迎」「淫乱おまんこ」と、股間を挟むように配置されている。陰毛は全て剃り上げられて、大陰唇をすっぽりと飲み込んでしまう大きさの、白蛇の絡みついたハートマークの刺青が入っている。</p> <p>彩花は画面のなかで、隆彦に「離婚をねだったのは長太郎に命令されたから、長太郎がそうしないともうオマンコしてくれないって言ったからなのよお、ごめんねえ」と淫らに叫びながら説明。隣の愛美は「隆彦さんに離婚されてからすぐにお父様に呼ばれて、押し倒されて、二人がかりでハメ倒されて、すぐにこの隆彦さんとは比べ物にならない立派なおチンポのとりこになっちゃったのぉ、離婚してくれてありがとう隆彦さぁん」と、こちらも卑猥に叫ぶ。権造はニタニタと笑いながら長太郎に「いつまでも独身でいるのもなんだからと愛美を愛妻兼肉便器としてあてがわれたのでこうして有効活用させて頂いてますよ」と呻く。長太郎も「ただ彩花を誰かに抱かせるのも飽きたのでな、今回は少し趣向を変えて楽しませて貰ったぞ」とガハハと笑う。そういうわけで彩花は貴様のものにはならないし、愛美さんは権造の性欲処理道具としてこの村の一員になるからな!と笑いながら、これからも二人を牛とまぐわわせたり馬と交配させたり犬に輪姦させたり、徹底的に犯し抜いてやるから、その都度哀れなお前のために動画を送ってやろう。一人さびしくセンズリでもこいていろ、と宣言。</p> <p>ポロポロと涙を零しながらも画面から目を離せない隆彦の前で、二人の牝が同時に絶頂を迎えて、二匹のオスが子種を子宮に炸裂させる。大量の精液を受け止めた愛美と彩花は画面に向かって再び両手でピースサインを作って、満足げな、とろけた顔をする。</p> <p>「さようなら、元夫の隆彦さぁん……粗末なチンポをシコシコして楽しんで下さいねえ(はあと)」「ごめんねタカくん……初恋の女がこんな淫乱でごめんねえ……せめてものお詫びに、わたしのこと、一生ズリネタにしてねえ」</p> <p>二人にさげすまれながら、隆彦はズボンの中で情けなく射精してしまう。</p> <p>暗い画面をいつまでも見つめながら、隆彦はただただ呆然とすることしか出来ないのだった。</p> <p>■エンド8「完全なる敗北」 →タイトルへ</p>
備考——プロット全体を通してのメモなど	
<p>・プロットに無くとも良いので、愛実と隆彦の会話、彩花と隆彦の会話を挟めそうな部分にはどんどん挟んで下さい。二人の女性の普段の顔などを描いて、ユーザーに少しでも愛着を持たせたり、魅力を伝えたりしたいです。(寝取らせ/寝取られ/寝取りの興奮を増やすため)</p> <p>・プロットに変更したい点などありましたら遠慮なく申し出て下さい。意見の摺り合わせ後、変更したほうが良さそうでしたら変更させていただきます。</p>	

※全体的なメモなどを書いておきます。企画書ではこうだったけど、こっちのほうがエロい、ということもあるので意見はどんどん頂いた方が良いでしょう。ただ企画(弊社の場合大体がディレクターを兼任する)は、最終的には「売れたのは皆のお蔭、売れなかったのはディレクターのせい」という言葉を噛み締めつつ、自分＝ディレクター兼任企画者の納得の行くように作るのが一番悔いが残らずに良いと思います。売れなければクビですが、顔色を伺いながら自分を押し殺して作ってもピンと来ない作品になる気がします。自分がピンと来ない作品を作るよりも、自分同じ性癖の人はまず間違いなく抜ける!という企画を作ったほうが、外に魅力が伝わりやすいかと思います。

……ただ余りニッチな性癖を押し出し過ぎてもそれはそれで売れないので、ニッチとメジャーの擦り合わせを行って、ニッチ性癖な人も嬉しい!大多数の人も嬉しい!な作品を目指していくのがディレクター兼企画者の大きな役割なのではないかと個人的に思います。誰もやっていないからと言って売れるとは限りませんし、低価格帯抜き作品については物珍しさよりも安心して抜けそうかどうかユーザーに分かり易く伝わるというのが大事かと思っています。

かがち様お慰め奉ります概要書
製作 ORCSOFT ディレクター
okomeman の本名

※俺がこの企画を作ったんだぜ! って誇らしげに自分の名前を書きます。

※これらの素案と、別添のシーンリスト、フローチャート、素材リスト、そして絵コンテや字コンテなどがオークソフトの企画一式となります。